

2012 年度

博士論文
(指導教授 平山正実教授)

キリスト者の死生観
—信仰成熟度の観点から

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科
(博士後期課程)

学籍番号 110DC005

村上純子

謝辞

本研究の過程において、懇切なるご指導とご鞭撻を賜り、本論文をまとめるに際しては、親身なご助言と励ましを頂きました平山正実教授に、心より感謝を申し上げます。

また、本論文の審査過程において、数々のご助言とご指導を賜りました、アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科の高橋義文教授、政治政策学研究科の松原望教授、そしてルーテル学院大学教授であられました賀来周一先生に深く御礼申し上げます。

最後になりましたが、本研究の趣旨を理解し、貴重な時間を割いてアンケート調査にご協力して頂いた皆様に、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

キリスト者の死生観 ―信仰成熟度の観点から

Spiritual maturity as an indicator of how Christians view life and death

序章 キリスト者と死生観

第1節	問題の設定	1
1.	問題の所在 ...	1
2.	研究のアプローチ ...	2
第2節	研究の神学的背景	3
1.	神学的人間観 ...	3
2.	神学的死生観 ...	5
3.	キリスト者の成熟と死生観 ...	7

第1章 先行研究の検討と本研究の課題

第1節	国内外の死生学研究の概観	9
1.	国外における死生学研究 ...	9
2.	国内における死生学研究 ...	12
第2節	宗教と死生観に関する研究の概観	18
1.	宗教と死に対する態度の研究 ...	18
2.	宗教における内発性、外発性と死生観の研究 ...	21
第3節	死生観と宗教に関する研究の課題と展望	22
第4節	本研究の研究目的と研究方法	23
1.	研究目的 ...	23
2.	研究方法 ...	23

第I部 大学生の宗教と死生観に関する量的調査

第2章 調査I：大学生における宗教と死観に関する調査

第1節	調査目的	25
第2節	調査方法	25
1.	調査対象者 ...	25
2.	調査方法 ...	25
3.	調査手続き ...	25

第3節	調査結果	26
1.	死観尺度得点と希死願望得点の男女差	...	27
2.	死観尺度得点と希死願望得点の宗教別の差異	...	28
3.	死観尺度と希死願望得点の宗教別男女差	...	29
4.	死観尺度と希死願望得点の男女別宗教差	...	30
第4節	考察	33
1.	死観尺度	...	33
2.	希死願望	...	34
第3章 調査Ⅱ：大学生における宗教と死生観に関する調査			
第1節	調査目的	35
第2節	調査方法	35
1.	調査対象者	...	35
2.	調査方法	...	35
3.	調査手続き	...	35
第3節	調査結果	36
1.	死観尺度と希死願望得点、生き方尺度の男女差	...	37
2.	死観尺度と希死願望得点、生き方尺度の差異	...	38
3.	死観尺度と希死願望得点、生き方尺度の宗教別男女差	...	40
4.	死観尺度と希死願望得点、生き方尺度の男女別宗教差	...	42
5.	宗教別の死観尺度と生き方尺度の相関係数	...	46
第4節	考察	48
1.	死観尺度と希死願望得点と生き方尺度	...	48
2.	宗教別の死観尺度と生き方尺度の相関係数	...	51
第5節	まとめと今後の課題	51
第Ⅱ部 キリスト者の信仰と死生観に関する量的調査			
第4章 調査Ⅲ キリスト者における信仰と死生観に関する調査			
第1節	調査目的	56
第2節	調査方法	56
1.	調査対象者	...	56
2.	調査方法	...	56

3. 調査手続き	...	58
第3節 調査結果 1	58
1. 内発的・外発的宗教尺度の尺度構成のための因子分析	...	59
2. 信仰重視度と礼拝出席による差異の検定	...	62
3. キリスト者の死観尺度と生き方尺度の因子分析	...	63
第4節 考察 1	69
1. 内発性・外発性宗教尺度	...	69
2. キリスト者の死観尺度と生き方尺度	...	70
第5節 調査結果 2	71
1. 内発的・外発的宗教尺度と死観尺度、生き方尺度	...	71
2. キリスト者の成熟度による死観尺度の検定	...	75
3. 死の意識度と死の受容度による、キリスト者の成熟度と死観尺度の検定	...	79
第6節 考察 2	84
1. 内発的・外発的宗教性と死生観	...	84
2. キリスト者の成熟度と死生観	...	85
3. 死の意識、受容とキリスト者の成熟度	...	86
第7節 キリスト者の死生観に関するまとめと今後の課題	87
終章 キリスト者の信仰と死生観		
第1節 信仰が死生観に与える影響	92
1. 信仰と死生観	...	92
2. 死生観の形成	...	92
第2節 キリスト者としての成熟	94
1. 信仰の成熟と死生観	...	94
2. 成熟を促すもの	...	96
第3節 本研究の意義と課題	98
1. 本研究の意義	...	98
2. 今後の課題	...	99
付録	101
引用文献	107

序章 キリスト者と死生観

第1節 問題の設定

1. 問題の所在

この世に生まれてきた人間にとって、“死”は不可避であり、生きることと死ぬことは決して切り離すことができないものである。人類は、近年のめざましい医療技術の進歩によって、長寿が可能になってきている。しかし、それで死期を遅らせることができたとしても、死ぬときは必ず訪れるし、人はそれを避けることはできない。人生の中で、たった一つ確実なことがあるとしたらそれは死であり、私たちは確実に死に向かって生きているのである (Thielicke, 1970)。

本研究は、キリスト教信仰を持つ人々（以下、キリスト者）の死生学研究である。そもそも“宗教”は、人間にとっての究極的な意味や問題、つまり人間が生まれてきた意味、死んでいく意味といった生死の意味、あるいは苦悩への対処の仕方を教えるものと捉えられる (河野, 2011)。その中でも、キリスト教は人間がいかに生きるべきか、死をどう捉えるべきかを直接的に取り扱っている“宗教”といえる。私たちは、普段の生活の中では、“自分がいつか必ず死を迎える”という現実をあまり見ようしていないかもしれない。しかし、Thielicke (1983) は、死を無視する、あるいは忘れようとすることは、聖書的に言えば、自分の人間としての限界を見ようとしなないことであり、自分の限界を見誤ることであると述べている。つまり、キリスト教にとって“死”は欠かすことのできないテーマであり、キリスト者は死を無視して、死が存在しないかのように生きてはならないのである。

熊澤 (2005) は、神学的死生学は“死のさ中であって生のうちに生き”、死のさ中であってもなお、キリストにあって生きるように力づける“福音”の視点に立つものであり、“生”は神のうちにその根拠を持つ永遠のいのちであるということが、一般的な死生学とは決定的に違うものである、と述べている。このように、キリスト教的死生学はその独自の世界観、価値観の中で、一つの研究分野として成立していると考えられる。そして、その研究を進めることは、人はいかに生きるべきかという、人間の根本的な問いに迫る重要な課題であると考えられる。

では、キリスト者として“死のさ中であって生のうちに生き”るとは、どういうことなのであろうか。また、キリスト者の“生と死”の捉え方（死生観）は、その人の生き方に

どのような影響を与えているのであろうか。そして、キリスト者にとっての死と、キリスト教信仰を持たない人（以下、未信者）にとっての“死”には、何らかの違う意味があるのであろうか。

キリスト教において、“死”“天国”“永遠のいのち”は、必ず触れられることがらである。なぜなら、キリスト教の中心的教義は、十字架の信仰により、死後には天国での永遠のいのちが約束されており、やがてキリストの再臨の日が来る、ということだからである。

教会で行われるキリスト者の葬儀に参列すると、もちろん悲しい涙も流されるのだが、「どこか希望、明るさ、平安というものが感じられる」という感想を聞くことが多い。葬儀の中で、「永遠のいのちが約束されている」といったことや、「天国で再会する希望がある」といったことが語られるから、というのがその一つの要因であると考えられる。しかし、信仰を持っていることと、死に対する不安がないということは別のことである。また、教えとして頭で理解することと、死を自分のものとして受け止め、自分自身が有限の存在であるということを意識することは、別のことであろう。「よりよく死ぬこととは、よりよく生きることだ」と言われるが、自分の生命の有限性に気付き、与えられている生命を生き抜くことが、キリスト者として成熟して生きることにつながるのではないだろうか。

本研究では、キリスト者の信仰とその成熟度が、死生観にどのように影響しているのかを量的に調査することである。キリスト者の“人間の死と生をどのように捉えるかという、生と死にまつわる価値や目的に関する考え方”という死生観と、キリスト者として成熟して生きることの関連性を明らかにしたい。

2. 研究のアプローチ

人間の生と死をめぐる問題を学問的に探求する死生学は、これまでもさまざまな分野からなされてきた（平山, 1991）。キリスト者の死生学研究としては、精神医学や看護、緩和ケアなどのターミナルケアからのアプローチや、生命倫理や哲学的アプローチ、宗教学的、神学的アプローチなどがある。その中で、本研究は心理学的アプローチを用いて行うものである。

心理学においては、長い間、死の問題を扱うことはタブーとされていた（Feifel, 1959）。しかし、1950年代半ばにようやく心理学においても、“人間の死とそれをめぐる問題”が重要なものとして取り上げられるようになり（Kastenbaum & Costa, 1977）、近年では心理学の

一つの分野として、死生学研究が行われるまでになった。

Kastenbaum (2000) は *The Psychology of Death* (3rd ed) の中で、心理学は死についてはほとんど何も教えてくれないが、私たちの生き方について多くを教えてくれている、と述べている。死生学は、人がどのように死を捉え、死に臨むのかという“死”の問題に取り組むのと同時に、人が、何のために生まれてきたと考え、そしてどのように生きていこうとするのかという“生”の問題も取り扱っている。よって、人間の心理を実践的に解明し、説明しようとする心理学的研究の方法を用いて死生学研究を行うことにより、人間の生と死に関する問題に、他のアプローチとはまた違った側面からの示唆を得ることを期待することができる。また心理学の、人間の心理に対する宗教の役割や影響を研究する手法を用いることで、人間存在の根本的な問題と宗教、信仰との関連性を明らかにすることが期待できる。

第2節 研究の神学的背景

キリスト者の死生観とキリスト者としての成熟を研究テーマとして取り扱うため、本研究の神学的背景を明らかにしておくことは重要であると考え。そこで本研究の背後にある神学的人間観と神学的死生観を、ここにまとめておく。

この研究の趣旨は、人間観や死生観を神学的に論議することではない。したがって、さまざまな神学的立場があり、神学的議論の余地が残されていることを承知の上で、この研究が立つ神学的立場を述べる。なお、聖書からの引用は、断りの無い限り、新改訳聖書（日本聖書刊行会）を用いた。

1. 神学的人間観

聖書における人間観とはどのようなものであろうか。創世記には、初めに神は天と地を創造され、動植物を創造し、最後に人間を創造されたことが書かれている。そして、神がそれをご覧になると「見よ。それは非常によかった」（創世記 1:31）とある。神が最初に創られたものは、完全に調和された世界だったのである。

しかしその後、アダムとエバの墮罪が起きてしまった。このことにより人間は、最初に神が創造されたときに意図していた生き方ができなくなり、エデンの園から追われたのである。

では、神が本来意図した人間の姿、生き方とは、どのようなものだったのであろうか。

聖書には、私たち人間は“神のかたち”に造られたと書かれている。“神のかたち”が何を意味するのかという問題は、古今東西、神学的に多くの論議が行われてきたところであり、いまだに一致した見解が出されているわけではない。しかし、神が「われわれに似るように、われわれのかたちに人を造ろう」（創世記 1:26）と言われたその意味は、少なくとも、三位一体である神ご自身が交わりを持つ存在であり、そのかたちを受け継いだ人間は、自分とは違う他者と一つになる能力、関係性を持つ存在であることを指す (Jones & Butman, 1991)、といえるであろう。

神が「人が、ひとりであるのは良くない」（創世記 2:18）と言われてアダム（男性）のためにエバ（女性）を創造したことも、人間が本質的に関係性、社会性を持っていることの現れといえよう。私たち人間は、さまざまな面で他の動物たちと似ているが、他者と、そして神との関係をもつ能力があることと、世界を支配するよう責任が与えられている（創世記 1:26）という点で、他の被造物とは決定的に違う存在であり (Collins, 1993)、私たちは神と人との交わりの中に生きるように創られているのである。

ところが、墮罪によって、パウロが「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています」（ローマ 7:19）と告白しているように、人間は罪の支配下におかれてしまった。その罪の影響は、人間の持つ関係性、社会性にも及び、人間は神との関係を引き裂かれ、他者との間にも対立や緊張関係が起こり、自分自身の内面的問題をも抱えるようになってしまったのである。

それでは、キリストを信じる信仰によって、再び神のものとされたキリスト者は何を目指すのであろうか。人間が「神のかたち」に創造されたという教理は、罪の贖いの教理でもある。つまり贖いによって、人間は「神のかたち」であることが成就され、それによって神との完全なる関係がもたらされるのである (McGrath, 1997)。

聖書には、キリスト者は、聖霊の働きによって「主（キリスト）と同じかたちに姿を変えられて行きます」（Ⅱコリント 3:18）とある。「神のかたち」に創られた人間が、罪の支配下に置かれていたが、そこから贖い出され、キリストと同じかたちに変えられて行くことは、本来の人間があるべき姿、つまり神が最初に創造された人間の姿に近づくことである。そしてそれは、神との関係、他人との関係、自分との関係が修復され、良い関係が築かれているという生き方であり、これこそがキリスト者が目指すところであり、キリスト者として成熟して生きるということであるといえよう。

2. 神学的死生観

地上のすべての生物は死を迎えるが、人間の死は動物の死とまったく同じというわけではない (Douglas, 1982)。確かに生物学上は、人間の死と動物の死は同じ“死”である。しかし人間は、神がご自身のかたちに創造された (創世記 1:27) という点において、動物とはまったく違う被造物である。それゆえ、その死も動物のものとは違うものなのである (Thielicke, 1970)。

Thielicke (1983) は、人間の死と動物の死の違いは、人間は未来に向かって生きているので、自分の有限性を知っていることだ、と述べている。詩篇 90 篇のモーセの祈りに「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。」(10 節)「それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください」(12 節)とある。このように、人間はこの地上で与えられている命には限りがあることを知っているのである。

1) 自然であり、不自然である“死”

人間の死は、ある意味では、まったく当たり前のことであり、自然の成り行きである。ヘブル人への手紙 9:27 には「人間には、一度死ぬこと」が定まっていると書かれており、死ぬことは被造物としての弱さの現れでもある。しかし、神が人間を創造の当初から死すべきものとして造られたのか、不死の存在として造られたのかは定かではない (Douglas, 1982)。

死が、神の性質とはまったく異なるものであることを考えると、神の創造のわざの中には計画されていなかったものなのではないかと思われる (Richardson, 1960)。「罪から来る報酬は死です」(ローマ 6:23)とあるように、ある意味では、死は人間にとって不自然なもので、私たちが神に反抗したゆえに入ってきたものであり、神のさばきなのである (Milne, 1982)。つまり、“死”は人間にとって、自然なものであり、同時に不自然なものでもあるということになる。

死のもう一つの現実は、私たちは一人でそれと向き合わなければならないということである。C. S. ルイスは、妻の死後の著書“A Grief Observed” (Lewis, 1976) (邦題「悲しみを見つめて」)の中で、たとえ愛するもの同士が同じ場所で同時に死んだとしても、死は二人を引き離すのだ、と述べている。

Thielicke (1970) は、人間の死について以下のようにまとめている。①死は、人間が本来持っている神の近くにいるという性質と矛盾するがゆえに、不自然なものである。②死の不自然さは、一般論ではなく、人間と神との個人的な関係において現れるものである。③死は、誰にでもおとずれる普遍的な現実であると同時に、一人で引き受けなければならぬ個人的なものでもある。

2) 肉体的、霊的、そして永遠の死

人間の死は、生物学的な出来事というだけではない。肉体の死は、私たちの肉体の命が消えるということではあるが、それで終わりなのではない。伝道者の書 12:7 には、「ちりはもとあった地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る」とあり、死は肉体と霊を引き離すものとして描かれている。聖書によれば、生と死は“存在するか、存在しないか”ではなく、存在の別次元であり、死は消え去ることではなく、ただ違う次元での存在に移行することである。

さらに、人間の死には、肉体的な死、霊的な死、そして永遠の死という 3 つの側面がある。肉体の死は、体と霊が引き離されることであり、霊的な死は、その人が神から引き離されること、そして永遠の死とは神からの別離が決定的なものになることである (Erickson, 1985)。

3) キリスト者の死

それではキリスト者にとっての死は、何を意味するのだろうか。キリスト教の信仰を持っているようがいまいが人間は必ず死ぬが、キリスト者と未信者の死では何か違いがあるのだろうか。

未信者にとって、死はのろいであり、罰であり、敵である。死は、その人を神から引き離し、永遠のいのちを得る機会を断ち切ってしまう、最終的なものである。それに対し、キリスト者も肉体の死は迎えるが、そののろいはすでに過ぎ去っている。なぜなら、キリストご自身が十字架によって死なれたことによって、「私たちのために、のろわれたもの」となられたからであり (ガラテヤ 3:13)、キリスト者はそののろいを経験しなくてよいのである (Erickson, 1985)。

であるから、キリストとの個人的な関係の中に生きている人は、死の不安におびえる必要はない (Thielicke, 1970)。なぜなら、死は喪失ではなく、キリストにより近くなることだ

からである（Ⅱコリント 5:1-10; ピリピ 1:20,21）。しかし、キリストに属さないものにとっては、それは最終的な神との完全な別離という、第二の死となるのである（Elwell, 1988）。

キリストにある信仰とは、キリストの死と復活の両方をともにするということであり、キリスト者はキリストとともに死に、キリストとともに永遠のいのちを分かち合っている（ローマ 6:4,5）のである。さらに聖書は、神が受け入れ、キリストの復活のいのちにあずかっているのであれば、もはやなにものも、死でさえも、神と私たちを引き離すことはできないと約束している（ローマ 8:31-39）。つまり、キリスト者も肉体の死は経験するが、それは神との離別ではなく、キリストを信じるものは、死んでも生きる（ヨハネ 11:25）のである、その罪はすべて取り除かれ、霊的な死、永遠の死はなくなり、第二の死を経験することはないのである（Erickson, 1985）。

もちろんキリスト者にとっても、死は敵であり、私たちはそれに怒りを感じ、嘆き悲しむであろう。しかし、キリストによって死は打ち負かされ、神のものとなった信仰者には、永遠のいのちの希望が与えられている。肉体的な死は通らなければならないが、それは終わりなのではなく、キリスト者には勝利が与えられている（Ⅰコリント 15:55）と聖書は約束している。

3. キリスト者の成熟と死生観

キリスト者は、死が人生の最終段階であることを認め、それを受け入れなければならない（Erickson, 1985）。私たちは、いつかは死に対して、自分一人で直面しなければならない。しかし、それが自分に起こることを認めたくないし、他人の死であっても直面するのが恐ろしいと思ってしまう。

しかし実際には、死を現実のものとして認めたとき、初めて自由に生きることができるという、逆説的なことが起こるのである（Bayly, 1969）。Liston (1969) は、自分の命の終わりと死の破壊的な力に直面しなければ、人は立ちあがって、毎日の生活を愛の中で送ることができない、と述べている。死があるからこそ、自分に今与えられている時間や、周りの人との関係を大切にしながら、生きていくことが出来るのである。

であるとすれば、キリスト者として成熟するということは、「神、他者、そして自分との関係を修復し、より良い関係を築いていくという、神が本来造られた人間の姿を保ちつつ、自らに与えられているこの世での時間を意識し、死とその先にある永遠の命に向かって歩

む」ことであると考えられる。

そこで、本研究はこのような観点から、キリスト者の成熟と死生観の関連性を調査、検証していくことにする。

第1章 先行研究の検討と本研究の課題

この章では、心理学における死生学の先行研究と、宗教と死生観の関連性を調べた先行研究の検証と分析を行う。その上で、宗教と死生観すなわち“人間の死と生をどのように捉えるかという、生と死にまつわる価値や目的に関する考え方”の関連性の研究という本研究の課題を、心理学的見地から検討する。

第1節 国内外の死生学研究の概観

1. 国外における死生学研究

1) 死の恐怖、不安に関する研究

心理学の分野において、死生学研究が始まった当初に行われた研究は、高齢者や病気の人など、死が比較的身近に迫っている人々を対象としたものが多かった。また研究方法は、生と死に関するチェックリストやインタビューなどによる調査 (Swenson, 1961; Jeffers et al., 1961) が主であった。この頃の研究内容は、死に関する否定的な側面に焦点を当てられることが多く、人々が“死の恐怖”や“死に対する不安”とどのように向き合うのかを調査したものが多かった。

そこから、心理学者たちの関心は、高齢者や病人など、対象が限定されている“病的・病理学的な死に対する恐怖”だけではなく、誰もが持つ“自然かつ正常な、人間の経験の重要な特徴としての死に対する恐怖” (Florian & Kravetz, 1983) へと広がっていったのである。その中で、心理尺度などを用いた量的研究も行われるようになり、死に関するさまざまな心理尺度が作成されていったのである。

例えば、Templer (1970)は、死に対する感情、特に不安や恐怖を測定する尺度として、死の不安尺度 (Death Anxiety Scale: DAS) を作成した。これは多くの研究で用いられてきた心理尺度の一つであった。しかしこの DAS は、死に対する心理の中でも、ネガティブな感情にのみ焦点を当てており、また一次元尺度であるため、“死の不安”を多面的に捉えることが難しいという限界があった。

その一方で、死に対する感情を多面的に測定するための、新たな心理尺度構成も試みられてきた。例えば、Collett & Lester (1969) の作成した the Collett-Lester Fear of Death Scale はその一つである。この心理尺度は、死の恐怖を“自分の死”“自分が死にゆくこと”“他者の死”“他者が死にゆくこと”という4つの側面から測定しようとした、多次元尺度であった。

さらに、人々が死に対してどのような態度を取るかを尺度構成する研究も行われるようになった。例えば、Nelson & Nelson (1975) は、死の態度尺度の因子分析を行い、“死の回避” “死の恐怖” “死の否定” “死にゆく人に関わることへの抵抗” という 4 次元尺度を抽出した。あるいは、Hoelter (1979a) は、Multidimensional Fear of Death Scale (MFODS) を開発し、人々の死の不安を、“死にゆく過程の不安” “死者に対する恐怖” “破滅してしまうことに対する恐怖” “大切な人に対しての不安” “未知なる死への不安” “意識的な死への不安” “死後の体に対する不安” “未熟な死への不安” という、8 つの下位尺度に分類した。また、Conte et al. (1982) は、Death Anxiety Questionnaire (DAQ) を作成し、“未知のものとしての死に対する不安” “苦しむことへの不安” “孤独に対する不安” “自分の存在が消えてしまうことへの不安” の 4 つの下位尺度からなる心理尺度を構成した。

このように“死の恐怖、不安”を心理学的に測定しようとする試みが、盛んに行われるようになったのである。

2) “恐怖” 以外の死に対する態度の研究

心理学の分野において、死に対する態度の心理尺度が多く開発され、研究が行われていたが、その間、“死に対する心理”の定義は明確にされてこなかった。すなわち、“死に対する恐怖、不安”という点に関しては多面的に研究が行われていたものの、“死への恐怖の積極的な役割”、すなわち「生命の危険を回避させる機能や、今まで気付かなかった潜在能力の開発を促し、創造性を育む」(デーケン, 1996) といった肯定的な側面は、研究の対象とされてこなかったのである。

ところが、Shneidman (1973) の死に対する調査研究の結果で、「自分自身の死について考えると恐ろしい」と答えた人よりも、「自分自身の死について時々考え、その結果人生に関して確固たる意識を持つか、あるいは生きているうちに楽しんでおこうと思う」という態度を示した人の方が多かった、という報告がなされたのである。そこで、“死に対する感情”には、“恐怖”や“不安”といったものだけでは表現されえない、さまざまな側面が存在していることが着目されるようになった。そして、“死”に対する感情、態度やその影響を、不安や恐怖などの否定的な側面だけでなく、肯定的な側面からも捉えていく研究が行われるようになった。

死に対する態度に関して、“死を受け入れているかどうか”に着眼点を置いた研究も盛んに行われてきた。Ray & Najman (1974) は死の受容に関する尺度構成を行い、“死の不安”の反対は“死の受容”ではないこと、つまり死を受容していてもなお死に対する不安を持っている場合もあり、死を受け入れることと死に対する不安がないことは、必ずしも一致しない、ということを示した。その他にも、Gesser et al. (1988) は、死に対する態度の多面的心理尺度として、死に対しての態度を“積極的受容”“死の恐怖”“回避的受容”“中立的受容”の4次元に尺度構成した Death Attitude Profile (DAP)を作成した。この尺度は、その後 Wong et al. (1994) によって改訂され、その改訂版 DAP-R は多くの研究で用いられるようになった。

その他には、死に対する個人の価値観や意味づけを“死観”と名づけ、その構成概念を明らかにしようとする研究が行われた。Spilka et al. (1977) は、死観尺度 (Death Perspective Scale, DPS) を開発し、“苦しみと孤独”“浄福な来世”“無関心”“未知”“家族との別離”“勇気”“挫折”“自然な終焉”の8因子を抽出した。

また、SD法 (Semantic Differential Method) などを用いて、死に対するイメージを測定する研究も行われた。SD法は Osgood によって開発されたもので、反対の意味を持つ形容詞対の評定尺度法を用いて、ある概念に関するイメージを洗い出す方法 (松下・尾方, 2007) である。また概念の類似性から、概念の意味を規定したり、概念と概念の間の距離を測定したりするといった研究にも用いられるものである。

例えば、Neuringer (1979) は、“生と死”、“生と自殺”、“死と自殺”という概念を対にして、入院患者に対してSD法でその概念距離を測定するという研究を行った。その結果、自殺念慮のある患者は、生と死をはっきりと分けて考えており、自殺するという決断は、生と死が混乱した状態というよりは、生ではない状態としての死を意識して行われているのではないかと推察した。日本では、岡村 (1984) が、このSD法を用いて、“死”と“生”や、“死”と“病”や“老い”などの類似性を調べる研究を行った。このように、死に対する感情や態度だけでなく、人々が死に対して持つイメージの測定研究も行われてきた。

これらの心理尺度を用いた心理学的死生学研究は、死に対する心理や死生観の構造と、それに影響を与えるさまざまな要因を量的に把握するために行われた。

3) 死の質的研究

もう一つの研究アプローチとして、死に対する心理や死生観の構造を、質的に把握しようとするものがある。尺度評定法を用いた量的研究では、研究調査結果が研究者の想定した範囲にとどまってしまうという制限があるため、死生観の全体的な構造が検討されているとは言いがたい(丹下, 2002)。そこで、死生観を多様な側面から研究するために、質的研究が行われるようになった。すなわち、調査対象者に死についての文章や絵画を描かせ、その内容を分析するなどの、より制限の少ない方法を用いて、死生観の構造をより多面的に捉えようとしたのである。

Neimeyer et al. (1983) は、死に関連した構成概念を内容分析するためのコード化マニュアルを作成した。Holcomb et al. (1993) は、このマニュアルを用いて、個人が死について書いた文章を分析し、その結果、死に対しては“死の有意味性”“存在の存続”“非存続(終結性)”“否定的な感情”“肯定的な評価”などの反応があり、それは性別や健康状態、自殺企図の有無、個人の死に関する哲学の有無などによって差がある、ということを示した。Wenestam & Wass (1987) は、子どもに「死」「死んだ」という言葉を聞いて思い浮かぶ事柄を絵に描かせ、その内容の質的分類を試み、さらに文化間の比較や発達に伴う差を検討した。Noppe & Noppe (1997) は、中学生、高校生、大学生に対して、死についての考えや態度を質問し、自由記述と面接で得られた反応を質的に分析した。その結果、思春期・青年期では、死に対する態度や考え方にそれぞれの発達課題が反映されており、死の概念や態度に違いがあると報告している。

このように、死生観には個人の属性や特性による差、発達に伴う差、文化間の差などが存在しており、一つの側面からの研究では、その全体像を把握することはできない。つまり、心理尺度評定による量的な差異を扱う研究と、質的な差異を扱う手法を用いた研究は互いを補い合うものであり、その結果を統合し、総合的に判断することによって初めて、死生観全体の研究が進んでいくといえるであろう。

2. 国内における死生学研究

1) 死の概念および態度の研究

我が国における死生学研究は、1980年代から医学や看護学、宗教学の分野を中心に始まった。当初、研究の対象は、ターミナル期にある人々や高齢者、老年期の人々が主であっ

た。しかし、死をより多面的に捉える必要がある（金児, 1994）との見方から、次第に死に対するネガティブな心理のみを捉えるのではなく、ポジティブな心理についても検討されるようになった。

これまで、日本人の死生観に関する心理尺度を用いた量的研究の多くは、欧米の心理尺度を翻訳したものを使用してきた。例えば、金児（1994）は、Spilka の死観尺度を翻訳して日本人向けに尺度構成し直し、“浄福な来世”“挫折と別離”“苦しみと孤独”“人生の試練”“未知”“虚無”の 6 つの因子を抽出した。他にも、Templer の DAS を翻訳して用いた研究（岡村, 1984）、Gesser & Wong の DAP を尺度構成し直した、死に対する態度尺度（河合ら, 1996）、Conte らの DAQ の日本語版（杉山, 1997）、DAP-R 日本語版（隈部, 2003）などがある。

しかし、欧米の心理尺度は、内容的にキリスト教的背景の中で作成されたものが多く、文化的社会的背景も日本のそれとは違っている部分も多い。したがって、日本人の死生観を探るには適切ではない、あるいは十分ではないという問題があった。そこで、日本人独自の死に関する心理を測定する尺度の開発が、試みられた。

例えば、丹下（1999）は、大学生に対して行った文章完成法テストと死に関する自由記述の結果を用いて心理尺度を構成し、死に対する態度尺度として、“死に対する恐怖”“生を全うさせる意志”“人生に対して死が持つ意味”“死の軽視”“死後の生活の存在への信念”“身体と精神の死”の 6 つの下位尺度を抽出した。さらに平井ら（2000）は日本人の死生観尺度を開発し、死生観や死に対する態度を構成するものとして、“死後の世界観”“死への恐怖・不安”“解放としての死”“死からの回避”“人生における目的意識”“死への関心”“寿命感”という 7 つの因子を抽出した。この心理尺度は、死の否定的側面だけでなく、“解放としての死”“人生における目的意識”という肯定的側面を含んでおり、死生観を多次元、包括的に測定する心理尺度といえる。平井は、その中でも日本人の死生観における主要な構成要素は、“死後の世界に関すること”“死に対する恐怖や不安に関すること”“解放としての死に関すること”ではないか、と推察している。平井らや丹下の研究は、日本人の死生観という点に絞られており、日本独自の死生観の特徴を把握するために大きく貢献している（海老根, 2008）。

また、藤本・本多（2003）は、死に対処するための能力を測る Death Competency 尺度を作成し、“自分の身近な死に対する能力”（“身近に起こりうる死について考える能力”“身近に起こりうる死に対処する能力”“死に対する親和性”の 3 つの下位尺度）と“概念的な

死に対する能力”（“他者の死を受け止める能力”“死を意味あるものと認める能力”の2つの下位尺度）に分け、計5つの下位尺度から測定した。

その他にも日本では、死生観の質的研究としてKJ法を用いた研究がさかんに行われてきた。KJ法とは、あるテーマに関する思いや事実を単位化し、グループ化と抽象化を繰り返して統合し、最終的に構造化をする問題解決法である（川喜田, 1967）。丹下（2002）は、死から連想する言葉として回答された語句をKJ法によって分類し、死生観の構造の検討を行った結果、死は客観的な事象としてよりも、さまざまな意味、価値、態度、信念などを付与した形で想起されるのではないかと、という可能性を示した。さらに、石坂（2003）は、人々が死に対してどのような意味づけをしているかという回答をKJ法によって分類した結果、死の意味づけとして“ネガティブ”と“ポジティブ”、そして両価的な意味づけの“アンビバレント”を見出している。

このように日本では、研究が始まった当初は欧米で行われた研究を取り込んでいたところから、次第に、日本人向けに作成しなおした心理尺度や独自の手法を使い、死生観の構造や死に対する態度の研究、死生観の形成に影響を与える心理的要素などの研究などが行われるようになっていった。

2) 特定年齢、特定集団の研究

日本で多く行われている死生学研究の中に、特定の世代や集団に焦点を当て、それ特有の死生観の構造を明らかにしようとする研究分野がある。

特定集団の研究で比較的多く行われているのは年代別集団の研究で、人間の成長発達とともに死生観がどのように変化し、形成されていくのかを、発達の視点から解明しようとする研究である。年齢によって“死”の捉え方が変化していく様子や、どのような要因が死生観に影響を与えるのかを、年齢ごとに調査研究していくことで、その全体像を明らかにしようとするものである。

例えば、仲村（1994）は、幼児期、児童期の子どもを対象として個別にインタビュー調査を行った。その結果、幼児期の子どもは生と死が未分化であり、現実と非現実が区別されていないが、児童期頃になると死の普遍性、非可逆性を理解し、死後の世界への想像や、願望、希望などが目立つようになること、さらに年齢が高くなるにつれて“生まれ変わりの思想”が増加してくることを報告している。また宮本（1983）は、小学校4年生から中学

3年生を対象に、「死」という言葉から連想される語句の調査を行い、彼らの持つ死のイメージを捉えようと試みた。

青年期では、丹下 (1999; 2004a) が青年期における死に対する態度尺度を作成し調査を行った。その結果、“生に対して積極的でありつつ、死に対しても肯定的である”という点に到達するまでには、青年期前期・中期に一時的に、生に対する積極性と死に対する否定的な態度の両方が低下するのではないかと推察している。また松下・尾方 (2007) は、青年期を対象に行った死の不安尺度 (Templer の DAS) と単独 SD 法を用いての“死”“生”“自己”の概念距離の検討結果から、青年期では全体的傾向として“死”はネガティブなイメージで、“生”、“自己”はポジティブな、“死”とは異なるものと捉えていると報告している。また、死の不安の高い人は、生きていることに充足感や自分の成長可能性を感じており、死はそのような素晴らしい自己の生を奪い、有限性を与えるネガティブなものとして捉えているため、不安が高くなるのではないかと結論付けている。

大学生の死に関する自由記述を分析した今井 (1991) によると、死別体験は恐怖だけではなく、悲しみ、むなしさ、いのちの尊さ、自分の生き方の自覚、一種の感動など、多岐にわたる印象を含む事柄として回想されている。あるいは、海老根 (2011) は、青年期後期の死生観と認知的側面と感情・態度的側面の関連性、親しい者との死別体験の有無との関係を調査検討し、死別体験のある群はない群より“死への関心”が高いことや、死別体験が、ネガティブな心理的影響だけではなく、死を人生のゴール、集大成として意味づけ、故人との絆の永続性を信じること、死への関心が深まることへと繋がっているなど、ポジティブな心理的变化があったことを報告している。

老年期の研究では、河合ら (1996) が、高齢者の死に対する感情や態度、さまざまな要因が死への態度とどのような関連を持っているのかを調査し、解明しようとした。その結果、我が国の高齢者は、諸外国と比べて死への不安や恐怖が高く、死そのものよりも、死ぬ際の苦しみについての恐怖が大きいことや、また死後の世界に肯定的というよりは、現世からの回避という側面から、死を受け入れる傾向が認められたと報告している。

また、特定職業集団の死生観に着目した研究も行われている。例えば、柏木 (1999) は、医師、看護師、一般の人の、死のイメージを調査し、それぞれを比較検討した。また竹下ら (2001) は、看護学生のレポートを KJ 法によって分析した結果、実習体験を終えた高学年の方が死に対して不安感が強く、否定的に捉えながらも「生きることは死に近づくこと」

についてより肯定しており、「自分自身もいつかは死を迎える」という一人称で死を捉えていると推察した。新見 (2002) は、Crumbaugh らによって考案された Purpose in Life Test (PLT) の日本語版を用いて看護学生の死生観を測定した。その結果、多くの看護学生は感情的にも認知的にも、死を自分のこととして受け入れられておらず、死に対して否定的であったり、考えないようにしたり、一般的な死としてしか認識していない、と推察した。さらに大山・沖野 (2003) は、平井ら (2000) の死生観尺度を用いて看護職と看護学生の死生観の傾向を比較検討した結果、看護職、学生ともに“死への恐怖・不安”は高いが“死からの回避”傾向は低いこと、“死後の世界観”では学生が有意に高いことなどを報告している。

日本で行われている特定集団別の死生観の構造や特徴に焦点を当てた研究は、看護師や看護学生を対象としたものが多い。しかし、看護職だけが人間の死と向き合っているわけではなく、人の生死に直接深く関わる現場で働く医師やその他の医療従事者、あるいは高齢者福祉や障がい者福祉に携わる人々の死生観の育成は、重要な課題である。

さらに、人はいつか必ず自分、または他者の死と向き合うものであるから、一般の人々にとっても死生観の育成は大切であり、そのためにも今後もさまざまな年代や集団を対象とした死生観の研究が必要であろう。

3) 死生観と生きる意味に関する研究

死生観研究のもう一つの方向性として取り組まれているのが、死生観がその人の生き方に与える影響の研究である。死生観は、人が死をどのように捉えるかと同時に、生をどう捉えるかという問題も含まれており、私たちの生き方や現在の経験の意味づけに大きな影響を与えているからである。

例えば、丹下 (1995) は、自我の発達と死生観の関係を調査し、心的に発達した人は生と死の両方に対して、肯定的な姿勢を持つようになると推測した。つまり、死生観が形成されていくことで、“死に対する恐怖”が軽減されるだけでなく、自らの生き方に対しても意義や有用性を見出すといった肯定的な影響があり、人生に対して積極的な姿勢をもたらすのではないかという可能性を示唆している。また、中村・井上 (2001) の研究では、生に対しても死に対しても肯定的イメージを持つことが幸福感を高める要因の一つとしてあげられている。このように、死をどう捉えるかという“死観”と生をどう捉え、どう生きよ

うとするかという態度は、切り離すことのできないものであり、その両面を包括的に研究していくことが重要である。

死生観と生き方に影響を与えるものの一つとして、死別体験がある。隈元 (2003) は、身近な人の死によって、主観的な生きる意味がどう変化するかを半構造化面接で調査した。その結果、死別体験によって否応なく死に直面させられた人々は、苦しみながらもそのことを通して自分自身の生の意味を変化させていった、と報告している。つまり、死別体験を通して、他者の死でありながら、人は自分自身の死を経験的に知ることになり、それが自分の生き方を捉えなおす機会となるのであろう。

ただし、死別体験と死に対する態度の関連を検討する調査研究は多く行われているが、その結果は一致しておらず、死別体験の有無と死に対する態度の間には単純な関係性は見出されていない。つまり、単純に死別体験があったからといって、その人の死生観が変化するわけではない。当然、その人の心理発達の要因も関係するし、死別した人との関係性や社会的、環境的要因なども関わってくる。死別体験においては、その人が他者の死をどのように体験したのか、そして、その人が自分の生き方や大切な人との関係性を考え直す機会として意味づけたかどうか重要である、と考えられる。

また死生学研究の中には、自殺を研究テーマとし、自殺の危険性を予知しようとする目的の研究や、自殺の回避を狙いとした治療の効果を測る研究などが行われてきた (Kastenbaum & Costa, 1977)。松島 (2009) は、一般よりも自殺発生頻度の高いといわれるがん患者を対象として調査を行った結果、がん患者の自殺や希死念慮の背景には、精神疾患や身体状態、社会的問題などの要因の他に、絶望感や自己支配感の低下といったスピリチュアルな問題が含まれていることを指摘し、系統的、多角的な評価が重要になると提言している。

日本において死生学研究を行う際には、社会的背景、民族的、文化的背景を十分に考慮することが重要である。特に、現代の日本社会においては、毎年自殺者が 3 万人を超えるという事態があり、その背後には数倍の自死遺族たちがいることも覚えておかなければならない。

また社会的にも若年層の犯罪に対して、いのちの尊さに対する認識が薄れているのではないかという危機感や、青少年層の自殺率の増加に対して、安易にいのちを絶ってしまう

ことへの危惧もある。青少年の死生観と自殺観に関する研究をレビューした影山 (2003) は、青少年の数%から 1~2 割は希死念慮を抱いているとし、死別体験が青少年の死生観に大きく影響するという可能性を示唆した。また、“社会や人生の閉塞感”と“生まれ変わり思想”が短絡的に結びつくと、“ストレスが希死年慮を経て、自殺企図に至るまでの過程”が加速される可能性が考えられる、としている。また、クリスチャンユース (キリスト者の若者) に対して、死生観形成に関する質的研究を行った岡村 (2010) は、調査対象者のほとんどが死について真剣に深く考えておらず、死生観が希薄であると報告している。また自殺に関して、それを「よし」とはしない伝統的なキリスト教の自殺観を持ちつつも、自殺願望を持つ人に対し「できれば共感したい」「一方的に裁くことは避けたい」と感じていたとしている。核家族化が進み、子どもたちが身近に死別を体験することが少なくなっている中で、どのように、死を考え生きる意味を問う機会を設けるのか、といったことも日本独自の課題であろう。

このような日本社会において、宗教が死生観に果たす役割、あるいは、宗教に期待されることを研究し、それを社会に還元していくことの意味は大きいと考える。

第2節 宗教と死生観に関する研究の概観

1. 宗教と死に対する態度の研究

1) 信仰の有無による態度の差

宗教と死に対する態度の関連性に関しては、欧米諸国をはじめ、日本でもさまざまな年代を対象に研究が行われてきた。多くの研究は、宗教や死後の世界を信じることで、死に直面した時の不安が軽減されるかどうかに関心を当ててきた。その結果は一様ではなく、宗教のある側面が死の恐怖と正の相関を示すという研究結果もあれば、宗教によって死の恐怖が軽減するという結果も、軽減しないという結果もあった (Donahue, 1985b)。この研究結果の差は、定義の問題、方法論と尺度の問題、調査対象者の問題によって生じると考えられる。

定義の問題としては、“宗教”または“死の恐怖”という場合に何を指すのかをはっきりとさせることが重要である (Roff et al., 2002)。また、方法論という点では、Templer の DAS (1970) などの一次元尺度で測定した場合には、信仰の有無や、宗教的信念による死に対する態度の差異は示されていない (杉山, 1997; Rose & O'Sullivan, 2002)。しかし、MFODS

(Hoelster, 1979b) や Fear of death Scale (Collett & Lester, 1969)、DAP (Gesser et al., 1988) などの多次元尺度を用いた研究では、部分的にはあるが、信仰の有無による差意が示されている (Cicirelli, 2002; Florian & Kravetz, 1983; Hoelster, 1979a; Suhail & Akram, 2002)。日本においても、DAP、DAP-R を用いた研究 (河合ら, 1996; 隈部, 2003) では、同様の結果が得られた。

尺度の問題としては、何を測るのかということによっても結果は異なっている。例えば、死の不安ではなく、死の受容を測った場合には、無信仰者よりも有信仰者のほうが死を受容している、という研究結果が報告されている (小泉, 2000)。また、Thorson & Powell (1990) は、信仰は死への恐れを軽減するが、死にゆく過程に対する不快感、無力感や痛みは残り、それは信仰が有るか無いかに関係はないと述べている。

調査対象者の問題では、宗教によって死生観に違いがあるため、誰を対象に調査を行ったかということが、調査結果に関係してくる。例えば、Shneidman (1973) によれば、天国と地獄の概念を信じるユダヤ教の人々は 11%であったのに対し、プロテスタントは 44%、ローマ＝カトリックは 73%と、宗教的背景によって大きな差が見られた。そしてローマ＝カトリックとプロテスタントでは、宗教が自分の死に対する態度に対して大きな役割を果たしている、と報告している人たちが、他のグループよりも多かったと述べている。また、Bowker (1991) は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教、仏教の教義の中で死がどう理解されているかを考察し、死の理解に関しては“挫折や罰”といった考えから、“解放や機会”と捉えるところまで幅が広く、“宗教と死”というような単純な一般化はできないと述べている。

実際、有信仰者同士を比較した場合、信仰する宗教 (あるいは教派) によって死に対する態度に差異があることが示唆されている。Reimer & Templer (1995-96) は、カトリックの信者の方がプロテスタントの信者よりも、“死の不安” “死の抑鬱” “死の悲嘆” “死特有の苦悩” が強かったという調査結果を報告している。日本においても小泉 (2000) が、“死の恐怖” について、無宗教の学生とキリスト教を信仰する学生の間のみ群間の有意差があり、キリスト教の学生の方が死に対する恐怖が低かったが、仏教を信仰する学生と無宗教の学生では有意差が見られなかった、という結果を得ている。

このように、研究調査のさまざまな操作的問題によって信仰の有無と死の態度の関連性に一貫性は見られないが、宗教的な信念はどのような形であれ、生と死を繋ぐ役割を果た

しているといえよう (丹下, 2004b)。すなわち、死生観がその人の生き方に影響を与えるものであるならば、人の生き方に影響を与えると考えられる宗教とも何らかの関係性があるのではないだろうか。

2) 宗教的行動による態度の差

Fortner & Neimeyer (1999) は、高齢者を対象とした死への不安に関する過去の研究をレビューし、統計的な分析を行った。その結果、宗教的信念つまり“内発的な神への信仰”や“死後の世界の信念”を単独で指標として用いた方が、宗教的行動つまり“聖書研究の頻度”や“教会出席”と合わせた指標を用いたときも、“死の不安の軽減”とより大きな相関を示していることを明らかにした。そこから、宗教的信念と宗教的行動は分けて考えるべきである、と考察している。これは、Roff et al., (2002) の研究でも、同様の結果が得られている。これに関連して、Clements (1998) は、死の不安に対して宗教がどのような影響を与えるかを知るためには、その人が属する教派や教会に通う頻度などの表面的な尺度ではなく、もっと内面的な尺度から宗教というものを捉えなければならぬと述べている。

特に日本人の場合には、宗教行動とその人個人の信仰は必ずしも一致しないということも考慮しなければならないであろう。日本では、一人の人が、キリスト教の教会で結婚式を挙げ、子どもが生まれれば神社でお宮参りをし、人が亡くなればお寺で葬儀を行うといったように、多様な宗教にわたっての宗教行動がごく一般的に行われている。つまり、日本人に関しては、宗教行動をとっているからといって、その人がその宗教を信仰しているとは限らないのである。

丹下 (2004b) は、そのような日本特有の民族的、文化的宗教観に着目し、死に対する態度尺度と宗教観尺度 (金児, 1997) を用いて、日本人の宗教性と死に対する態度の関連性を検討した。その結果、向宗教性 (宗教に対する態度)、靈魂観念 (タタリ意識、応報観念)、加護観念 (風俗や年中行事としての軽い宗教との結びつき) が強い人ほど、死は人生に対して肯定的な意味を持つと考え、死後の存在についての信念が強い傾向にあり、また靈魂観念が強い人ほど死に対する恐怖が強かった、と報告している。そして、現代社会では宗教の主な役割が本来の“自己の死”という主題から離れ、現世利益のような部分に重点が置かれていながらも、宗教を背景とした民族文化的な信念・価値観は強く残っており、身近な他者の死への対処などに関しては依然として宗教的な要素が影響を与えていると考察し、その意味では現代の日本においても、宗教と死生観の関わりが部分的にはあるが存

在すると分析している。

2. 宗教における内発性、外発性と死生観の研究

1) 宗教の内発性、外発性による差

宗教の何をもって死生観との関連性を測るかは、きわめて重要な問題である。宗教の研究においては、一つの流れとして、宗教の内発性、外発性という側面が注目されるようになった。Allport & Ross (1967) は、人々の宗教的態度を内発的宗教性と外発的宗教性の二つに分け、信仰が内面化され、それに従って生きることを人生の目的としている場合を内発的宗教性、信仰を自分の得たいものを得るための道具として用いている場合を外発的宗教性と定義した。この、内発的・外発的宗教性は、宗教と死に対する態度の関係を研究する尺度としても多用されるようになった。

Allport & Ross (1967) の開発した Religious Orientation Scale は、21 の質問からなる内発的宗教性－外発的宗教性の尺度である。それを改訂した Religious Orientation Scale-Revised (Gorsuch & McPherson, 1989) は 14 の質問に絞り、外発的宗教性を、個人性と社会性の二つの下位カテゴリに分けたものである。これはさらに、単独でも内発的宗教性、外発的宗教性の指標となる質問項目が特定されている。Hoge (1972) の Scale of Intrinsic Religious Motivation (IRM) は 10 の質問からなり、信仰的行動の頻度や外発的動機ではなく、信仰心の深さを扱っており、違う文化、違う宗教的伝統の中でも利用出来るという利点がある。

Donahue (1985b) は、これらの尺度を用いて宗教の内発性・外発性という側面から行われた死生観研究をレビューした結果、概して内発的宗教性と死の恐怖は負方向、外発的宗教性と死の恐怖は正方向で相関するという結論に達している。1980 年代以降に発表された海外の研究でも (Clements, 1998; Feifel & Nagy, 1981; Roff et al., 2002)、日本国内における研究 (金児, 1994) でも同様の結果が示されており、内発的宗教性の傾向が強い人のほうが死への恐怖が少ない、という結果になっている。

ただしこれらの研究において、内発的宗教性・外発的宗教性も含めて、宗教的な信念が死に対する態度のすべての下位尺度と負方向で関連を持つというわけではなく、ものによっては関連性が示されない、あるいは逆に高い死への恐怖と関連するという結果が報告されていることにも注意しなければならない (Cicirelli, 2002; Clements, 1998; Florian & Kravetz, 1983; Hoelter, 1979a; Roff et al., 2002)。

第3節 死生観と宗教に関する研究の課題と展望

これまで見てきたように、死生学研究は多くの方法や尺度を用いて、さまざまな人々を対象に行われてきた。死生観は文化や時代の影響が色濃く出るものであると同時に、人間の普遍的な心理を含むものでもある。現代日本という文脈の中で、人間の死に対する意識や態度、死生観を研究するには、何が文化的あるいは時代的なもので、何が普遍的な人間の心理なのかを識別していくことが、一つの課題であると考えられる。

また、死生観と宗教の関係を解明しようとする研究も行なわれてきたが、宗教が無条件に死の恐怖を軽減するものではないし、「宗教は良いもの、宗教を信じれば人生はバラ色で、死ぬことも怖くない」といった、単純で独断的な認識にも注意をしなければならない。宗教にも死生観にもさまざまな側面があり、それらを包括的に捉えるのでなければ、宗教と死生観の関係を解明することは難しい。

死生観は、決して恐怖や不安といった否定的なものに限られてはおらず、「死があるからこそ生がいとおしく、今与えられているこの時を有意義に生きたいと思える」といった意義や有用性などの肯定的な内容を持ちうる。死生観は、死別体験などによって受動的に形成されていくのみならず、能動的にその問題を自己の内部で扱い、吸収しようとすることで、肯定的な死生観が形成され、その結果人生に対して積極的な姿勢を持つことにもつながっていく(丹下, 1995)。死を意識することにより生きる意味やいのちの尊さを認識するのであるとするならば、人間の生と死を正面から取り上げ、人間がいかに生きるべきかを主題とするキリスト教的見地から死生観を取り上げることは当然のことといえよう。

日本において、キリスト教的見地からの死生観研究はまだ十分に行われていない。今後の課題の一つは、キリスト教信仰を有する人々の死生観を調査研究し、信仰が人々の死の捉え方と生き方にどのような影響を与えているのかを心理学的見地から検証していくことだと考える。

第4節 本研究の研究目的と研究方法

1. 研究目的

本研究は、キリスト者として成熟して生きるということと死生観の関係性を明らかにする目的で行うものである。キリスト者の死生観とは、“キリスト者にとっての生と死の意味づけ”である。キリスト者として成熟して生きている人、すなわち、神、他者、そして自分との関係が修復され、良い関係を築いている人は、自らに与えられているこの世での時間を意識し、死とその先にある永遠の命に向かって歩いていくという、生も死も肯定的に受けとめる健全に発達した死生観をもつのではないかと考えられる。

そこで、キリスト者の成熟度と死生観の関係を量的調査によって検証し、死生観がどのようにキリスト者の生き方に影響を及ぼすのか、キリスト者にとっての“死”はどのような意味を持つのか、死生観の発達と信仰の成熟がどのような関係にあるのかを考察する。

2. 研究方法

本研究は、心理学的見地から、心理尺度を用いての量的研究を行うものである。心理尺度による研究調査結果は、すべての事象を網羅するとはいえないが、広く一般的な傾向を知るためには有効な手段であると考えられる。

調査に用いた心理尺度は以下のとおりである。

死観の測定方法として、死に対する個人の価値観や意味づけの構成概念を明らかにする死観尺度(金児, 1994)を用いる。これは Spilka の死観尺度 (Death Perspective Scale) を日本人向けに再尺度構成したもので、妥当性、信頼性ともに検証されており、多くの日本人の死生観研究に用いられてきたものである。“浄福な来世”“挫折と別離”“苦しみと孤独”“人生の試練”“未知”“虚無”の6つの下位因子からなり、31の設問に対して6件法で回答を求める。

また、キリスト者の成熟度を、神との関係と、自分自身と他者との関係という側面に分けて測定を試みる。神との関係を測定する尺度として、I/E-Revised Scale (Gorsuch & McPherson, 1989) を用いる。これは、個人の信仰の動機づけ、方向性を“内発性 (Intrinsic)” “社会的な外発性 (Extrinsic Social)” “個人的外発性 (Extrinsic Personal)” “倫理的な外発性 (Extrinsic Morality)” の4つの下位項目で測定する心理尺度である。この尺度は多様な年齢層 (Gorsuch & Venable, 1983) や、欧米のキリスト教以外の人々に対しても行われ (Gorsuch et al., 1997)、信頼性と妥当性が得られているもので、内発的・外発的宗教性と死生

観の関連性の研究に多く用いられているものである。

自分との関係、他者との関係の測定には、生き方尺度 (板津, 1992) を用いる。生き方尺度は、自分自身の生き方、生活態度を“能動的実践的態度”“自己の創造・開発”“こだわりのなさ・執着心のなさ”の3つの下位項目、他者との関係を“自他共存”“他者尊重”という2つの下位項目、合計5つの下位項目によって測定する心理尺度であり、28の設問に対して、5件法で回答を求めるものである。

その他、必要に応じて心理尺度や質問項目を加えて調査を行った。

調査Ⅰでは大学生を対象に、宗教の有無と死の捉え方(死観)の関連性を調査し、続く調査Ⅱでは宗教の有無が生と死の捉え方や生き方に影響を与えるものであるかを検討した。これらの調査では、死観尺度と生き方尺度がキリスト者の死生観を計るのに適切な心理尺度であるかどうかの検討も含めて行った。

調査Ⅲでは、内発的・外発的宗教性尺度を邦訳したものと、死観尺度、生き方尺度を用いて調査を行い、信頼性、妥当性のあるキリスト者の宗教性尺度の構成を試みたうえで、キリスト者の死生観、生き方についての検証を行った。

第 I 部 大学生の宗教と死生観に関する量的調査

第 2 章 調査 I : 大学生における宗教と死観に関する調査

第 1 節 調査目的

調査 I の目的は、宗教の有無によって、死観（死の捉え方）に差がみられるかどうかを調べることである。そこで、一般大学の学生を調査対象として死観尺度を用いて調査を行い、宗教の有無が死の捉え方に影響を与えるものであるかを検討する。

死生観は年齢、発達段階や家庭環境などによって影響を受けながら確立される。またそこに、その人の人生経験や社会環境が関わってくる（齋藤ら, 2002）ものである。大学生は、発達段階でいえば青年期にあたり、また、比較的類似した人生経験を持ち、社会環境におかれていると考えられ、成人を対象とするよりも、近似した集団で調査を行うことができると考えられる。

そこで、調査 I では大学生を対象とし、宗教の有無と死観の関連性の検証を試みた。

第 2 節 調査方法

1. 調査対象者

首都圏の大学に在籍する 463 名（男性 304 名、女性 159 名）を対象に、調査を行った。被調査対象者は 18 歳～28 歳に分布しており、平均年齢は 20.47 歳（SD=1.37）であった。

2. 調査方法

質問調査票は以下のものを含めた。

①死観尺度（金児, 1994）：死に対する個人の価値観や意味づけの構成概念を“浄福な来世”“挫折と別離”“苦しみと孤独”“人生の試練”“未知”“虚無”の 6 つの因子から明らかにするものである。また、どの程度死にたいと思ったことがあるかを問うため、「死にたいと思ったことがある」という質問項目を加えた。

②フェイスシート：性別、年齢、宗教（特になし、キリスト教、仏教、神道、イスラム教、その他）、死別体験の有無とその内容の自由記述を含めた。

3. 調査手続き

2008 年 7 月から 2010 年 7 月に、集団で調査を行った。

調査対象者には、実施前に調査の趣旨として「大学生の死に対する考え方を調査するも

のである」ことと、質問紙は無記名で個人が特定されないこと、回答拒否を出来ることを明示した。また、結果は統計的に処理をおこない、結果処理後は回答用紙をすべて破棄処分することを伝えた。

第3節 調査結果

調査対象者の属性は表 1-1 のとおりである。

表 1-1. 調査対象者の属性 (n=463)

	宗教なし	キリスト教	仏教	その他	無回答	合計
男	252(54.43%)	22(4.75%)	23(4.97%)	3(0.65%)	4(0.86%)	304(65.66%)
女	129(27.86%)	19(4.10%)	8(1.73%)	1(0.22%)	2(0.43%)	159(34.34%)
合計	381(82.29%)	41(8.86%)	31(6.70%)	4(0.86%)	6(1.30%)	463(100%)

宗教で、神道、イスラム教と回答した人はいなかった。その他の中には、「多宗教」「無神論」「何か」といった回答があった。

また、死観尺度の下位項目の平均点と信頼度の指標となる α 係数を、表 1-2 に示す。

表 1-2. 死観尺度の平均と α 係数

下位尺度	平均	標準偏差	α 係数
浄福な来世	2.703	1.147	.82
挫折と別離	4.234	0.921	.68
苦しみと孤独	3.336	1.195	.76
人生の試練	3.273	0.976	.56
未知	4.439	1.040	.53
虚無	3.060	1.156	.54

死観尺度は 6 つの下位尺度からなるものであるが、今回の調査では信頼性の指標となるクロンバックの α 係数が十分に高いと判断される“浄福な来世”“挫折と別離”“苦しみと

孤独”の3つの下位尺度を結果の検定に用いた。

1. 死観尺度と希死願望得点の男女差

男女間で、死観尺度と死にたいと思ったことがあるかという問いに対する答え（以下、希死願望得点）に有意差があるかを見るために、t検定を行った。

表 1-3 は、男女別の平均(M)、標準偏差(SD)、t 値および P 値をまとめたものである。なお、2 群の母分散が等しいと仮定されない場合は、Welch の方法を用いた t 検定を行った(表中では t 値に*をつけている)。

表 1-3. 男女別、死観尺度と希死願望の得点

	男(n=304) M (SD)	女(n=159) M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	2.72 (1.20)	2.67 (1.04)	0.501*	0.308
挫折と別離	4.27 (0.94)	4.17 (0.89)	1.059	0.145
苦しみと孤独	3.40 (1.23)	3.20 (1.12)	1.711	0.044*
希死願望	3.30 (2.04)	4.16 (1.85)	4.475	0.000**

* $p < .05$ ** $p < .01$

男女での、各項目の得点差について t 検定を行ったところ、男性の方が死観尺度の“苦しみと孤独”の得点が高く[t(461)=-1.711, $p < .05$]、女性の方が、希死願望が強い[t(461)= 4.475, $p < .001$]という結果であった。

2. 死観尺度と希死願望得点の宗教別の差異

宗教別にみた死観尺度と希死願望得点は以下の通りである。

表 1-4 は無宗教群とキリスト教を信仰する人（以下、キリスト教群）、表 1-5 は無宗教群と仏教を信仰する人（以下、仏教群）、表 1-6 はキリスト教群と仏教群を比較し、t 検定を行った結果である。

表 1-4. 無宗教群とキリスト教群の死観尺度と希死願望の得点

	無宗教(n=381)	キリスト教(n=41)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	2.65 (1.11)	3.24 (1.21)	3.201	0.001 **
挫折と別離	4.27 (0.87)	3.81 (1.23)	2.305**	0.013 *
苦しみと孤独	3.36 (1.20)	3.04 (1.23)	1.603	0.055
希死願望	3.56 (2.02)	3.32 (2.00)	0.738	0.231

* $p<.05$ ** $p<.01$

無宗教群とキリスト教群では、“浄福な来世”においてはキリスト教群が高く[t(420)=3.201, $p<.01$]、“挫折と別離”においては無宗教群の方が高かった[t(44.4)=-2.305, $p<.05$]。

表 1-5. 無宗教群と仏教群の死観尺度と希死願望の得点

	無宗教(n=381)	仏教(n=31)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	2.65 (1.11)	2.81 (1.33)	0.757	0.225
挫折と別離	4.27 (0.87)	4.29 (1.04)	0.140	0.444
苦しみと孤独	3.36 (1.20)	3.41 (1.12)	0.241	0.405
希死願望	3.56 (2.02)	4.06 (2.16)	1.326	0.093

* $p<.05$ ** $p<.01$

無宗教群と仏教群の比較では、どの項目においても統計的に有意な差は見られなかった。

表 1-6. キリスト教群と仏教群の死観尺度と希死願望の得点

	キリスト教 (n=41)	仏教 (n=31)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	3.24 (1.21)	2.81 (1.33)	1.430	0.079
挫折と別離	3.81 (1.23)	4.29 (1.04)	1.747	0.043*
苦しみと孤独	3.04 (1.23)	3.41 (1.12)	1.314	0.097
希死願望	3.32 (2.00)	4.06 (2.16)	1.520	0.067

* $p<.05$ ** $p<.01$

キリスト教群と仏教群の比較では、“挫折と別離”において仏教群の方が、得点が高い [t(70)=1.747, $p<.05$] という結果であった。

3. 死観尺度と希死願望得点の宗教別男女差

次に宗教別で、死観尺度及び希死願望得点に男女差があるかを検定した。表 1-7 は、その検定結果をまとめたものである。

表 1-7. 宗教別男女の死観尺度と希死願望の得点差

無宗教群	男 (n=252)	女 (n=129)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	2.66 (1.16)	2.63 (1.01)	0.230	0.308
挫折と別離	4.97 (0.92)	4.23 (0.77)	0.625*	0.266
苦しみと孤独	3.42 (1.23)	3.23 (1.13)	1.457	0.068
希死願望	3.22 (2.02)	4.24 (1.85)	4.800	0.000**

キリスト教群	男(n=22) M (SD)	女(n=19) M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	3.28 (1.37)	3.19 (1.04)	0.224	0.412
挫折と別離	4.06 (1.19)	3.53 (1.25)	1.366	0.090
苦しみと孤独	3.34 (1.28)	2.69 (1.11)	1.700	0.049*
希死願望	3.55 (2.15)	3.05 (1.82)	0.785	0.219

仏教群	男(n=23) M (SD)	女(n=8) M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	3.09 (1.30)	1.99 (1.09)	2.138	0.021*
挫折と別離	4.18 (1.02)	4.63 (1.07)	1.056	0.150
苦しみと孤独	3.21 (1.20)	3.99 (0.56)	2.444*	0.011*
希死願望	3.67 (2.32)	5.19 (1.00)	2.525	0.009**

* $p < .05$ ** $p < .01$

宗教別男女差の検定結果では、無宗教群では、男性よりも女性の方が、希死願望が強かった[t(379)=4.800, $p < .001$]。

また、キリスト教群では、死観尺度の“苦しみと孤独”において男性の方が、得点が高い[t(39)=-1.700, $p < .05$]という結果であった。

仏教群では、“浄福な来世”において、男性の方が高く[t(29)=-2.138, $p < .05$]、“苦しみと孤独”においては、女性の方が高かった[t(26.2)=2.444, $p < .05$]。また、希死願望得点においても、女性の方が高い[t(27.4)=2.525, $p < .01$]という結果であった。

4. 死観尺度と希死願望得点の男女別宗教差

次に、男女別に見たときに、宗教間で死観尺度及び希死願望得点に差があるかを検定した。表 1-8 は男性群、表 1-9 は女性群の検定結果をまとめたものである。

表 1-8. 男性の宗教群別、死観尺度と希死願望の得点差

男	無宗教(n=252)	キリスト教(n=22)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	2.66 (1.16)	3.28 (1.37)	2.366	0.009**
挫折と別離	4.97 (0.92)	4.06 (1.19)	1.107	0.135
苦しみと孤独	3.42 (1.23)	3.34 (1.28)	0.305	0.380
希死願望	3.22 (2.02)	3.55 (2.15)	0.730	0.233

男	無宗教(n=252)	仏教(n=23)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	2.66 (1.16)	3.09 (1.30)	1.698	0.045*
挫折と別離	4.97 (0.92)	4.18 (1.02)	0.548	0.292
苦しみと孤独	3.42 (1.23)	3.21 (1.20)	0.790	0.215
希死願望	3.22 (2.02)	3.67 (2.32)	1.003	0.153

男	キリスト教(n=22)	仏教(n=23)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	3.28 (1.37)	3.09 (1.30)	0.467	0.321
挫折と別離	4.06 (1.19)	4.18 (1.02)	0.368	0.357
苦しみと孤独	3.34 (1.28)	3.21 (1.20)	0.345	0.366
希死願望	3.55 (2.15)	3.67 (2.32)	0.192	0.424

男性では、死観尺度の“浄福な来世”においてのみ有意差があり、キリスト教群の方が無宗教群よりも得点が高く[t(272)=2.366, $p<.01$]、同じく仏教群の方が無宗教群よりも得点が高い[t(273)=1.698, $p<.05$]という結果であった。キリスト教群と仏教群の間では、死観尺度のどの項目においても有意差が見られなかった。

表 1-9. 女性の宗教群別、死観尺度と希死願望の得点差

女	無宗教(n=129)	キリスト教(n=19)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	2.63 (1.01)	3.19 (1.04)	2.259	0.013*
挫折と別離	4.23 (0.77)	3.53 (1.25)	2.369*	0.014*
苦しみと孤独	3.23 (1.13)	2.69 (1.11)	1.928	0.028*
希死願望	4.24 (1.85)	3.05 (1.82)	2.607	0.005**

女	無宗教(n=129)	仏教(n=8)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	2.63 (1.01)	1.99 (1.09)	1.733	0.043*
挫折と別離	4.23 (0.77)	4.63 (1.07)	1.371	0.086
苦しみと孤独	3.23 (1.13)	3.99 (0.56)	1.868	0.032*
希死願望	4.24 (1.85)	5.19 (1.00)	1.437	0.077

女	キリスト教(n=19)	仏教(n=8)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	3.19 (1.04)	1.99 (1.09)	2.701	0.006**
挫折と別離	3.53 (1.25)	4.63 (1.07)	2.153	0.021*
苦しみと孤独	2.69 (1.11)	3.99 (0.56)	3.097	0.002**
希死願望	3.05 (1.82)	5.19 (1.00)	3.096	0.002**

* $p<.05$ ** $p<.01$

女性では、無宗教群とキリスト教群を比較検定したところ、全項目に有意差が現れた。“浄福な来世”では、キリスト教群の方が高く[t(146)=2.259, $p<.05$]、無宗教群の方が“挫折と別離”[t(20.0)=-2.369, $p<.05$]、“苦しみと孤独”[t(146)=-1.928, $p<.05$]、希死願望得点[t(146)=-2.6072, $p<.01$]の得点が高いという結果であった。

女性の無宗教群と仏教群の比較検定したところ、“浄福な来世”では、無宗教群の方が高

く[t(135)=-1.733, $p<.05$]、仏教群の方が“苦しみと孤独” [t(135)=1.868, $p<.05$]において得点が高いという結果であった。

女性のキリスト教群と仏教群では、全項目に有意差が現れた。キリスト教群の方が“浄福な来世”において得点が高く [t(25)=-2.701, $p<.01$]、仏教群の方が“挫折と別離” [t(25)=2.153, $p<.05$]、“苦しみと孤独” [t(25)=3.097, $p<.01$]、希死願望得点[t(25)=3.096, $p<.01$]において得点が高いという結果であった。

第4節 考察

1. 死観尺度

死観尺度の“浄福な来世”においては、宗教間の比較検定で、キリスト教群が無宗教群よりも有意に得点が高かったが、無宗教群と仏教群、およびキリスト教群と仏教群の間では有意差が見られなかった。

さらに宗教の男女別に分析していくと、キリスト教群は男女共に無宗教群の男女よりも得点が高いが、仏教群では男女に有意差があり、仏教群の男性は無宗教の男性よりも得点が高いのに対し、仏教群の女性はキリスト教群女性、無宗教群女性よりも得点が低くなっている。つまり、キリスト教群は男女ともに“浄福な来世”を信じる傾向にあるが、仏教群では男女差が大きく、全般的に“浄福な来世”を信じているとはいえない。

これはキリスト教にとって、「天国」というものが、その教義の中心をなすものであること、教派や教団の違いはあっても、キリスト教としてはある程度共通理解のある事柄であることを示唆していると考えられる。

“挫折と別離”に関しては、全体としては、無宗教群と仏教群のそれぞれがキリスト教群よりも死を“挫折と別離”と捉える傾向にあるが、男女別に見ると、男性の間では有意差がなく、女性においてその傾向が認められている。つまり、全般的な宗教間での差というより女性の宗教間における差ということになる。

また、“苦しみと孤独”に関しては、男女間では、男性の方が女性よりも死を“苦しみと孤独”として捉えているが、宗教別に見るとその傾向が認められたのはキリスト教においてのみであり、仏教では逆に女性の方が死を“苦しみと孤独”と捉える傾向にあった。女性群だけで見ると、キリスト教群よりも無宗教群、無宗教群よりも仏教群に、その傾向が強く認められた。よって、このことは男女差であるというよりは、特にキリスト教群の女性が、死を“苦しみと孤独”と捉える傾向が低いために差が出たと考えるべきであろう。

死観尺度を男女別に、宗教間で比較検討したときに興味深かったのは、男女で傾向が大きく違ったことである。男性群では無宗教群とキリスト教群の“浄福な来世”、無宗教群と仏教群の“浄福な来世”という、2項目においてのみ有意差があったのに対し、女性群では無宗教群と仏教群の“挫折と別離”以外の8項目で宗教間の有意差があった。このことから、男性よりも女性のほうが、宗教によってその死生観に差が現れやすいということが考えられる。

以上の結果から、キリスト教群は全般的に“浄福な来世”を信じる傾向にあるといえる。さらに、男性では“浄福な来世”以外の宗教間の差は見られなかったが、女性では、キリスト教群の女性は比較的死を肯定的に捉える傾向にあり、仏教群の女性と無宗教群の女性は浄福な来世を信じず、死を“挫折と別離”、“苦しみと孤独”として捉えているという結果になり、宗教間の差が見られた。

2. 希死願望

希死願望に関しては、女性の方が男性よりも高い得点を示している。これは青少年の死生観と自殺観に関する研究をまとめた影山(2003)が出した、複数の研究で「男性よりも女性に希死念慮が多い」という調査結果とも合致する。

しかしこれを宗教別に比較すると、無宗教群、仏教群ではそのような傾向が認められたが、キリスト教群においては男女間に有意差が認められなかった。さらに、無宗教群、仏教群の女性は、それぞれキリスト教群の女性よりも有意に希死願望が高いという結果であった。つまり、単純に男性よりも女性の方に希死念慮が多いという結果ではなく、ここでも宗教による違いが現れたといえる。

それでは、死の捉え方だけでなく、生の捉え方、生き方にも宗教による違いがあるのだろうか。これを検証するために、調査Ⅱを行った。

第3章 調査Ⅱ：大学生における宗教と死生観に関する調査

第1節 調査目的

調査Ⅱの目的は、宗教の有無がその人の死生観と生き方に影響を与えるものなのかを調べることである。この調査においても、一般大学の学生を調査対象とし、死観尺度と生き方尺度を用いて調査を行い、宗教の有無が生と死の捉え方や生き方に影響を与えるものであるかを検討する。

第2節 調査方法

1. 調査対象者

調査は、首都圏の大学に在籍する330名（男性217名、女性113名）を対象に行った。被調査対象者の年齢は、18歳～28歳に分布しており、平均年齢は20.34歳（SD=2.44）であった。

2. 調査方法

質問調査票は以下のものを含めた。

①死観尺度（金児, 1994）：調査Ⅰと同じものである。

②生き方尺度（板津, 1992）：自分の生き方、生活態度を“能動的実践的態度”“自己の創造・開発”“自他共存”“こだわりのなさ・執着心のなさ”“他者尊重”の5因子によって測定するものである。

③フェイスシート：性別、年齢、宗教（特になし、キリスト教、仏教、神道、イスラム教、その他）、自分の死生観に影響を与えたと思われる出来事の内容の自由記述から構成されている。

3. 調査手続き

2009年7月から2011年2月に、集団で調査を行った。

調査対象者には、実施前に調査の趣旨として「大学生の生と死に対する考え方を調査するものである」ことと、質問紙は無記名で個人が特定されないこと、回答拒否を出来ることを明示した。また、結果は統計的に処理をおこない、結果処理後は回答用紙をすべて破棄処分することを伝えた。

第3節 調査結果

調査対象者の属性は表 2-1 に示す。

表 2-1. 調査対象者の属性 (n=330)

	宗教なし	キリスト教	仏教	その他	無回答	合計
男	166(50.30%)	12(3.64%)	24(7.27%)	13(3.94%)	2(0.60%)	217(65.76%)
女	85(25.76%)	17(5.15%)	6(1.82%)	4(1.21%)	1(0.30%)	113(34.24%)
合計	251(76.06%)	29(8.79%)	30(9.09%)	17(5.15%)	3(0.90%)	330(100%)

また、死観尺度、生き方尺度の下位項目の平均点と信頼度の指標となるクロンバックの α 係数を、それぞれ表 2-2 に示す。

表 2-2. 死観尺度と生き方尺度の平均と α 係数

死観尺度				生き方尺度			
下位尺度	平均	標準偏差	α 係数	下位尺度	平均	標準偏差	α 係数
浄福な来世	2.700	1.572	.80	能動的実践的態度	3.338	1.159	.80
挫折と別離	4.015	1.643	.71	自己の創造・開発	3.298	1.194	.78
苦しみと孤独	3.270	1.710	.78	自他共存	3.760	1.059	.72
人生の試練	3.196	1.640	.61	こだわりのなさ	2.915	1.207	.71
未知	4.469	1.611	.57	他者尊重	3.497	1.104	.38
虚無	3.183	1.759	.58				

今回の調査では、算出された α 係数をもとに、死観尺度では“浄福な来世”“挫折と別離”“苦しみと孤独”の3つの下位尺度、生き方尺度では“能動的実践的態度”“自己の創造・開発”“自他共存”“こだわりのなさ・執着心のなさ”の4つの下位尺度を結果の検定に用いる。なお、“こだわりのなさ・執着心のなさ”では、信頼性を低めた質問項目が一項目あったため（「自分自身にこだわりを持たない」）、その質問項目は除外した。

1. 死観尺度と希死願望得点、生き方尺度の男女差

死観尺度と希死願望得点、及び生き方尺度に男女差があるか、t検定を用いて比較検討を行った。表 2-3 はその検定結果をまとめたものである。なお、2 群の母分散が等しいと仮定されない場合は、Welch の方法を用いた t 検定を行った（表中では t 値に*をつけている）。

表 2-3. 男女別、死観尺度と希死願望得点、生き方尺度

	男(n=217)	女(n=113)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	2.63 (1.15)	2.83 (1.08)	1.501	0.067
挫折と別離	4.02 (1.06)	4.00 (0.89)	0.248*	0.402
苦しみと孤独	3.29 (1.27)	3.20 (1.20)	0.638	0.262
希死願望	3.62 (1.96)	4.08 (1.85)	2.049	0.021 *
能動的実践的態度	3.34 (0.82)	3.32 (0.71)	0.178	0.429
自己の創造・開発	3.30 (0.82)	3.30 (0.69)	0.047	0.481
自他共存	3.75 (0.77)	3.78 (0.66)	0.391	0.348
こだわりのなさ	3.02 (0.88)	2.75 (0.83)	2.641	0.004 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

男女での得点差について t 検定を行ったところ、死観尺度には男女差が見られなかったが、希死願望に関しては、女性の方が強い[t(324)=2.049, $p < .05$]という結果であった。生き方尺度では、男性の方が“こだわりのなさ・執着心のなさ”の得点が高かった[t(319)=-2.641, $p < .01$]。

2. 死観尺度と希死願望得点、生き方尺度の宗教別の差異

宗教別にみた死観尺度と希死願望、生き方尺度の比較検定は、以下の通りである。表 2-4 は無宗教群とキリスト教群、表 2-5 は無宗教群と仏教群、表 2-6 はキリスト教群と仏教群を比較し、t 検定を行った結果をまとめたものである。

表 2-4. 無宗教群とキリスト教群の死観尺度と希死願望の得点

	無宗教(n=251)	キリスト教(n=29)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	2.64 (1.10)	3.24 (1.14)	2.656	0.004 **
挫折と別離	4.07 (0.95)	3.60 (1.25)	1.937*	0.031 *
苦しみと孤独	3.34 (1.19)	2.84 (1.43)	2.051	0.021 *
希死願望	3.72 (1.91)	3.62 (2.09)	0.273	0.393
能動的実践的態度	3.30 (0.77)	3.48 (0.74)	1.205	0.115
自己の創造・開発	3.24 (0.76)	3.60 (0.68)	2.374	0.009 **
自他共存	3.70 (0.73)	4.00 (0.58)	2.196	0.014 *
こだわりのなさ	2.91 (0.85)	3.17 (0.84)	1.577	0.058

* $p<.05$ ** $p<.01$

無宗教群とキリスト教群では、死観尺度の“浄福な来世”においてキリスト教群の方が高く [t(275)=2.656, $p<.01$]、無宗教群の方が“挫折と別離” [t(30.61)=-1.937, $p<.05$]と“苦しみと孤独” [t(275)=-2.051, $p<.05$]、において得点が高かった。

生き方尺度では、キリスト教群が“自己の創造・開発” [t(271)=2.374, $p<.01$]と“自他共存” [t(271)=2.196, $p<.05$]において得点が高かった。

表 2-5. 無宗教群と仏教群の死観尺度と希死願望の得点

	無宗教(n=251) 仏教(n=30)		t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	2.64 (1.10)	3.10 (1.19)	2.127	0.017*
挫折と別離	4.07 (0.95)	4.17 (1.07)	0.506	0.307
苦しみと孤独	3.34 (1.19)	3.45 (1.35)	0.485	0.314
希死願望	3.72 (1.91)	4.21 (2.06)	1.278	0.101
能動的実践的態度	3.30 (0.77)	3.69 (0.74)	2.518	0.006 **
自己の創造・開発	3.24 (0.76)	3.49 (0.96)	1.601	0.055
自他共存	3.70 (0.73)	4.11 (0.42)	2.896	0.002 **
こだわりのなさ	2.91 (0.85)	2.98 (1.06)	0.436	0.332

* $p<.05$ ** $p<.01$

無宗教群と仏教群の比較では、死観尺度の“浄福な来世”においては仏教群の方が高かった[t(276)=2.127, $p<.05$]。生き方尺度では、仏教群の方が“能動的実践的態度”[t(270)=2.518, $p<.01$]と“自他共存”[t(270)=2.896, $p<.01$]において得点が高かった。

表 2-6. キリスト教群と仏教群の死観尺度と希死願望の得点

	キリスト教(n=29) 仏教(n=30)		t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	3.24 (1.14)	3.10 (1.19)	0.391	0.349
挫折と別離	3.60 (1.25)	4.17 (1.07)	1.845	0.035 *
苦しみと孤独	2.84 (1.43)	3.45 (1.35)	1.664	0.051
希死願望	3.62 (2.09)	4.21 (2.06)	1.078	0.143
能動的実践的態度	3.48 (0.74)	3.69 (0.74)	1.000	0.161
自己の創造・開発	3.60 (0.68)	3.49 (0.96)	0.460	0.324
自他共存	4.00 (0.58)	4.11 (0.42)	0.655	0.324
こだわりのなさ	3.17 (0.84)	2.98 (1.06)	0.739	0.232

* $p<.05$ ** $p<.01$

キリスト教群と仏教群では、死観尺度の“挫折と別離”において、仏教群の方が高い [t(55)=1.845, $p<.05$] という結果であった。希死願望得点と生き方尺度では、有意差は現れなかった。

3. 死観尺度と希死願望得点、生き方尺度の宗教別男女差

次に宗教別に見たときに、死観尺度及び希死願望得点、生き方尺度に男女差があるかを検定した。表 2-7 は、調査結果と検定結果をまとめたものである。

表 2-7. 宗教別男女の死観尺度と希死願望の得点差

無宗教群	男(n=166)	女(n=85)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	2.57 (1.16)	2.78 (1.10)	1.371	0.086
挫折と別離	4.06 (1.00)	4.10 (0.83)	0.263*	0.397
苦しみと孤独	3.34 (1.21)	3.32 (1.17)	0.130	0.449
希死願望	3.48 (1.89)	4.21 (1.86)	2.893	0.002 **
能動的実践的態度	3.30 (0.81)	3.28 (0.70)	0.215	0.415
自己の創造・開発	3.22 (0.80)	3.29 (0.69)	0.585	0.280
自他共存	3.67 (0.75)	3.74 (0.68)	0.684	0.247
こだわりのなさ	3.00 (0.87)	2.71 (0.79)	2.531	0.006 **

キリスト教群	男(n=12) M (SD)	女(n=17) M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	3.16 (1.28)	3.27 (1.06)	0.256	0.400
挫折と別離	3.59 (1.42)	3.61 (1.15)	0.052	0.479
苦しみと孤独	3.15 (1.61)	2.61 (1.29)	0.994	0.165
希死願望	3.58 (2.23)	3.65 (2.04)	0.080	0.469
能動的実践的態度	3.30 (0.60)	3.53 (0.74)	0.443	0.331
自己の創造・開発	3.71 (0.61)	3.51 (0.74)	0.776	0.222
自他共存	4.02 (0.54)	3.99 (0.62)	0.102	0.460
こだわりのなさ	3.58 (2.23)	3.15 (0.91)	0.168	0.434

仏教群	男(n=24) M (SD)	女(n=6) M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	3.17 (1.29)	2.78 (0.55)	0.652	0.260
挫折と別離	4.22 (1.12)	3.91 (0.81)	0.582	0.283
苦しみと孤独	3.34 (1.43)	3.98 (0.76)	0.964	0.172
希死願望	4.19 (2.25)	4.30 (0.67)	0.205*	0.420
能動的実践的態度	3.77 (0.87)	3.40 (0.74)	0.931	0.180
自己の創造・開発	3.70 (0.93)	2.74 (0.67)	2.375	0.013*
自他共存	4.27 (0.63)	3.53 (0.65)	2.527	0.009**
こだわりのなさ	3.18 (1.04)	2.25 (0.89)	2.003	0.028*

* $p<.05$ ** $p<.01$

その結果、無宗教群においては、死観尺度には男女差がなく、希死願望は女性の方が強い[t(248)=2.893, $p<.01$]という結果であった。生き方尺度では、男性の方が“こだわりのなさ・執着心のなさ”の得点が高かった[t(242)=-2.531, $p<.01$]。

キリスト教群では、いずれの項目においても男女差は見られなかった。

仏教群では、死観尺度と希死願望得点には男女差が見られなかった。しかし生き方尺度

では、男性の方が女性よりも“自己の創造・開発” [t(26)=-2.375, $p<.05$]、“自他共存” [t(26)=-2.527, $p<.01$]、“こだわりのなさ・執着心のなさ” [t(26)=-2.003, $p<.05$]において、得点が高かった。

4. 死観尺度と希死願望得点、生き方尺度の男女別宗教差

次に、男女別に見たときに宗教間で死観尺度、希死願望得点、生き方尺度に差があるかを検定した。表 2-8 は男性群、表 2-9 は女性群の調査結果と検定結果をまとめたものである。

表 2-8. 男性の宗教群別、死観尺度と希死願望の得点差

男	無宗教(n=166)	キリスト教(n=12)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	2.57 (1.10)	3.16 (1.28)	1.772	0.039*
挫折と別離	4.06 (1.00)	3.59 (1.42)	1.534	0.063
苦しみと孤独	3.44 (1.21)	3.15 (1.61)	0.524	0.300
希死願望	3.48 (1.89)	3.58 (2.23)	0.182	0.428
能動的実践的態度	3.30 (0.81)	3.30 (0.60)	0.019	0.492
自己の創造・開発	3.22 (0.80)	3.71 (0.61)	2.083	0.019*
自他共存	3.67 (0.75)	4.02 (0.54)	1.550	0.061
こだわりのなさ	3.00 (0.87)	3.20 (0.87)	0.780	0.218

男	無宗教(n=166) M (SD)	仏教(n=24) M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	2.57 (1.10)	3.17 (1.29)	2.440	0.008**
挫折と別離	4.06 (1.00)	4.22 (1.12)	0.715	0.238
苦しみと孤独	3.44 (1.21)	3.34 (1.43)	0.007	0.497
希死願望	3.48 (1.89)	4.19 (2.25)	1.672	0.048*
能動的実践的態度	3.30 (0.81)	3.77 (0.87)	2.497	0.007**
自己の創造・開発	3.22 (0.80)	3.70 (0.93)	2.583	0.005**
自他共存	3.67 (0.75)	4.27 (0.63)	3.527	0.000**
こだわりのなさ	3.00 (0.87)	3.18 (1.04)	0.900	0.185

男	キリスト教(n=12) M (SD)	仏教(n=24) M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	3.40 (0.68)	3.17 (1.29)	0.023	0.491
挫折と別離	3.71 (0.61)	4.22 (1.12)	1.463	0.076
苦しみと孤独	4.02 (0.54)	3.34 (1.43)	0.364	0.359
希死願望	3.58 (2.23)	4.19 (2.25)	0.761	0.226
能動的実践的態度	3.40 (0.68)	3.77 (0.87)	1.247	0.111
自己の創造・開発	3.71 (0.61)	3.70 (0.93)	0.043	0.483
自他共存	4.02 (0.54)	4.27 (0.63)	1.185	0.122
こだわりのなさ	3.20 (0.87)	3.18 (1.04)	0.057	0.477

宗教別に男性群を比較すると、死観尺度において有意差が現れたのは、“浄福な来世”のみであった。“浄福な来世”においては、キリスト教群の方が無宗教群よりも得点が高く[t(176)=1.772, $p<.05$]、同じく仏教群も無宗教群より得点が高い[t(188)=2.440, $p<.01$]という結果であったが、キリスト教群と仏教群の間には有意差はなかった。

また、希死願望得点は、仏教群の方が無宗教群よりも高かった[t(188)=1.672, $p<.05$]。

男性の宗教別生き方尺度の比較検定では、キリスト教群の方が無宗教群よりも“自己の

創造・開発” [t(175)=2.083, $p<.05$]が高いという結果であった。また、無宗教群と仏教群では、仏教群の方が“能動的実践的態度” [t(185)=2.497, $p<.01$]、“自己の創造・開発” [t(185)=2.583, $p<.01$]、“自他共存” [t(185)=3.527, $p<.001$]で高いという結果であった。キリスト教群男性と仏教群男性では、いずれの下位尺度でも有意差が認められなかった。

表 2-9. 女性の宗教群別、死観尺度と希死願望の得点差

女	無宗教(n=85) キリスト教(n=17)		t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	2.78 (1.10)	3.27 (1.06)	1.663	0.050*
挫折と別離	4.10 (0.83)	3.61 (1.15)	1.993	0.025*
苦しみと孤独	3.02 (1.38)	2.61 (1.29)	2.216	0.015*
希死願望	4.21 (1.86)	3.65 (2.04)	1.115	0.134
能動的実践的態度	3.28 (0.70)	3.53 (0.74)	1.302	0.098
自己の創造・開発	3.29 (0.69)	3.51 (0.74)	1.220	0.113
自他共存	3.74 (0.68)	3.99 (0.62)	1.415	0.080
こだわりのなさ	2.71 (0.79)	3.15 (0.91)	2.027	0.023*

女	無宗教(n=85)	仏教(n=6)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
浄福な来世	2.78 (1.10)	2.78 (0.55)	0.017	0.493
挫折と別離	4.10 (0.83)	3.91 (0.81)	0.476	0.317
苦しみと孤独	3.32 (1.17)	3.98 (0.76)	1.242	0.109
希死願望	4.21 (1.86)	4.30 (0.67)	0.109	0.457
能動的実践的態度	3.28 (0.70)	3.40 (0.74)	0.417	0.339
自己の創造・開発	3.29 (0.69)	2.74 (0.67)	1.885	0.031*
自他共存	3.74 (0.68)	3.53 (0.65)	0.729	0.234
こだわりのなさ	2.71 (0.79)	2.25 (0.89)	1.365	0.088

女	キリスト教(n=17) M (SD)	仏教(n=6) M (SD)	t値	P 値
浄福な来世	3.27 (1.06)	2.78 (0.55)	0.977	0.170
挫折と別離	3.61 (1.15)	3.91 (0.81)	0.539	0.298
苦しみと孤独	2.61 (1.29)	3.98 (0.76)	2.244	0.018*
希死願望	3.65 (2.04)	4.30 (0.67)	1.127*	0.137
能動的実践的態度	3.53 (0.74)	3.40 (0.74)	0.337	0.370
自己の創造・開発	3.51 (0.74)	2.74 (0.67)	2.258	0.017*
自他共存	3.99 (0.62)	3.53 (0.65)	1.547	0.068
こだわりのなさ	3.15 (0.91)	2.25 (0.89)	2.092	0.024*

* $p<.05$ ** $p<.01$

女性では、死観尺度において、キリスト教群の方が無宗教群より“浄福な来世”が高かった[t(97)=1.663, $p<.05$]。また、無宗教群の方がキリスト教群より“挫折と別離”[t(97)=-1.993, $p<.05$]、“苦しみと孤独”[t(97)=-2.216, $p<.05$]において高かった。さらに、キリスト教群と仏教群の比較では、“苦しみと孤独”において仏教群の方がキリスト教群より高かった[t(19)=2.244, $p<.05$]。無宗教群女性と仏教群女性では、死観尺度に有意差は見られなかった。

女性の生き方尺度では、キリスト教群が無宗教群より“こだわりのなさ・執着心のなさ”[t(94)=2.027, $p<.05$]において得点が高かった。また、“自己の創造・開発”においては無宗教群が仏教群より高く[t(83)=-1.885, $p<.05$]、同じくキリスト教群も仏教群より高いという結果であった[t(21)=-2.258, $p<.05$]。さらに、“こだわりのなさ”においてもキリスト教群は仏教群より高かった[t(26)=-2.092, $p<.05$]。

5. 宗教別の死観尺度と生き方尺度の相関係数

宗教群ごとに、死観尺度の3因子と生き方尺度の4因子について、それぞれ相関係数を求め、無相関の検定を行った。表 2-10 は無宗教群、表 2-11 はキリスト教群、表 2-12 は仏教群の相関係数と無相関の検定の結果である。

表 2-10. 無宗教群における死観尺度と生き方尺度の相関

	浄福な来世	挫折と別離	苦しみと孤独	希死願望	能動的態度	自己の創造	自他共存	こだわりのなさ
浄福な来世	-							
挫折と別離	0.04	-						
苦しみと孤独	0.21 **	0.58 **	-					
希死願望	-0.05	-0.02	-0.05	-				
能動的態度	0.09	0.29 **	0.23 **	-0.18 **	-			
自己の創造	0.12	0.22 **	0.09	-0.10	0.76 **	-		
自他共存	0.03	0.22 **	0.12	-0.13 *	0.69 **	0.70 **	-	
こだわりのなさ	0.04	0.04	-0.05	-0.31 **	0.46 **	0.54 **	0.37 **	-

* $p < .05$ ** $p < .01$

無宗教群では、“浄福な来世”は“苦しみと孤独” [$r = .21, p < .01$]と低い相関があった。“挫折と別離”は“苦しみと孤独” [$r = .58, p < .01$]と中程度の相関、“能動的実践的態度” [$r = .29, p < .01$]、“自己の創造・開発” [$r = .22, p < .01$]、“自他共存” [$r = .22, p < .01$]とそれぞれ低い相関があった。

また、“苦しみと孤独”は“能動的実践的態度” [$r = .23, p < .01$]と低い相関があった。

希死願望は、“こだわりのなさ・執着心のなさ” [$r = -.31, p < .01$]と低い負の相関があった。なお、“能動的実践的態度” [$r = -.18, p < .01$]と“自他共存” [$r = -.13, p < .05$]は、検定上は有意差が認められたが、相関係数は.20以下なので実際の相関関係は認められなかった。

“能動的実践的態度”は“自己の創造・開発” [$r = .76, p < .01$]、また“自他共存” [$r = .69, p < .01$]とそれぞれ高い相関があり、“こだわりのなさ・執着心のなさ” [$r = -.31, p < .01$]と低い相関が認められた。

“自己の創造・開発”は、“自他共存” [$r = .70, p < .01$]と高い相関があり、“こだわりのな

さ・執着心のなさ” [$r=.54, p<.01$]と中位の相関が認められた。

最後に、“自他共存”は、“こだわりのなさ・執着心のなさ” [$r=.37, p<.01$]と低い相関が認められた。

表 2-11. キリスト教群における死観尺度と生き方尺度の相関

	浄福な来世	挫折と別離	苦しみと孤独	希死願望	能動的態度	自己の創造	自他共存	こだわりのなさ
浄福な来世	-							
挫折と別離	0.07	-						
苦しみと孤独	0.14	0.73**	-					
希死願望	-0.02	-0.05	-0.01	-				
能動的態度	0.30	-0.07	-0.04	0.09	-			
自己の創造	0.34	-0.18	-0.06	0.06	0.81 **	-		
自他共存	0.09	-0.06	0.00	0.03	0.70 **	0.76 **	-	
こだわりのなさ	0.10	0.17	-0.04	-0.11	0.39 *	0.42*	0.37**	-

* $p<.05$ ** $p<.01$

キリスト教群の検定結果からは、“挫折と別離”は“苦しみと孤独”と高い相関が認められた [$r=.76, p<.01$]。

また、“能動的実践的態度”は“自己の創造・開発” [$r=.81, p<.01$]と、“自他共存” [$r=.70, p<.01$]とそれぞれ高い相関があり、“こだわりのなさ・執着心のなさ” [$r=-.39, p<.01$]と低い相関が認められた。

“自己の創造・開発”は、“自他共存” [$r=.76, p<.01$]と高い相関があり、“こだわりのなさ・執着心のなさ” [$r=.42, p<.01$]と中位の相関が認められた。

“自他共存”は、“こだわりのなさ・執着心のなさ” [$r=.37, p<.01$]と低い相関が認められた。

表 2-12. 仏教群における死観尺度と生き方尺度の相関

	浄福な来世	挫折と別離	苦しみと孤独	希死願望	能動的態度	自己の創造	自他共存	こだわりのなさ
浄福な来世	-							
挫折と別離	0.19	-						
苦しみと孤独	0.16	0.76**	-					
希死願望	0.11	0.01	0.01	-				
能動的態度	0.19	0.12	0.12	-0.03	-			
自己の創造	0.22	0.16	-0.07	-0.25	0.79**	-		
自他共存	0.14	0.21	-0.06	-0.05	0.61**	0.73**	-	
こだわりのなさ	0.22	-0.02	-0.05	-0.15	0.53**	0.68**	0.54**	-

* $p < .05$ ** $p < .01$

仏教群の相関係数の検定結果からは、“挫折と別離”は“苦しみと孤独”と高い相関が認められた [$r = .76, p < .01$]。

また、“能動的実践的態度”は“自己の創造・開発” [$r = .79, p < .01$]と高い相関が認められ、“自他共存” [$r = .61, p < .01$]と、“こだわりのなさ・執着心のなさ” [$r = .53, p < .01$]と中位の相関が認められた。

“自己の創造・開発”は、“自他共存” [$r = .73, p < .01$]と、“こだわりのなさ・執着心のなさ” [$r = .68, p < .01$]とそれぞれ高い相関が認められた。

“自他共存”は、“こだわりのなさ・執着心のなさ” [$r = .54, p < .01$]と中位の相関が認められた。

第4節 考察

1. 死観尺度と希死願望得点と生き方尺度

今回の調査では、死観尺度の“浄福な来世”において、キリスト教群と仏教群は共に無宗教群より有意に得点が高かった。しかし、キリスト教群と仏教群では有意差は見られなかった。

調査 I の結果と大きく違ったのは、死観尺度の“浄福な来世”において、仏教群に男女差がなかったことである。調査の結果に違いが出るのは、同じ仏教でも宗派によって“来

世”に関する教えが違ふといったことや、個人によっても“来世”の考え方、捉え方にはばらつきがあるのではないかといった可能性も考えられる。しかし、本調査では仏教群の女性が調査Ⅰで8名、調査Ⅱで6名と少数であり、何らかの結論を導き出すにはサンプルが少なすぎるので、ここではそのような可能性があるということにとどめておく。

また、“挫折と別離”“苦しみと孤独”においては、キリスト教群が全般的に低く、無宗教群が高いという結果であったが、これらは女性の宗教間での差が反映されたものであるという調査Ⅰの結果とほぼ同じような傾向であった。

調査Ⅰで死観尺度と希死願望得点を男女別に、宗教間で比較検討したときに、男性はあまり宗教間の差がなかったのに対し、女性では大多数の項目で有意差が現れていた。今回の調査Ⅱにおいては、男性で宗教間の差が現れたのは調査Ⅰの項目と同じであったが、女性は無宗教群と仏教群、キリスト教群と仏教群の間での差はあまり見られなかった。よって、調査Ⅰの考察、男性よりも女性のほうが宗教によってその死生観に差が現れやすいということは今回示唆されなかった。

しかし、調査Ⅰ、Ⅱともに、無宗教群女性とキリスト教群女性の死観尺度はすべてにおいて有意差が認められた。ということは、少なくとも女性においては、キリスト教を信仰しているかどうかは、死観に影響を与えるといえるであろう。

“希死願望”に関しては、調査Ⅰと同様、調査Ⅱでも女性の方が男性よりも高かったが、今回は女性の宗教間での有意差は見られなかった。また、仏教の男性が一番低かった無宗教の男性よりも有意に高く、よって調査Ⅱでは、“希死願望”に関して、男性の宗教間の差があったといえる。

生き方尺度を見ていくと、“能動的実践的態度”で仏教群と無宗教群に有意差が現れたが、これは仏教群男性が無宗教群男性よりも有意に高かったために現れたもので、キリスト教群、無宗教群では男女差も、宗教間の差も認められなかった。

“自己の創造・開発”においては、キリスト教群が無宗教群より有意に高かったが、男女別に見るとその傾向が認められたのは男性のみであった。この項目に関しては、キリスト教群内、無宗教群内や、全体としての男女差がなかったのに対し、仏教群の男女差が顕著で、男性が特に高く、女性が低い傾向にあった。

“自他共存”においては、仏教群、キリスト教群が共に無宗教群より有意に高かったが、キリスト教群には男女差はなかったのに対し、仏教群では男性が女性よりも有意に高く、仏教群男性の得点の高さが全体にも反映された結果となった。

“こだわりのなさ・執着心のなさ”は生き方尺度で唯一男女差が見られた因子で、男性の方が有意に高かった。これは無宗教群、仏教群共に見られた傾向であるが、キリスト教群では男女差はなく、女性の中ではキリスト教群が無宗教群、仏教群よりも高いという結果であった。

先行研究では、女子学生の方が男子学生よりも日々の充実感や満足感が高いという研究結果もある(大石ら, 2007)。しかし、今回の結果では単純な男女差というよりは、男女差と共に、宗教の有無によって死観尺度、希死願望、生き方尺度に差が現れた。

キリスト教群は男女差が少なく、概して、男女共に「“浄福な来世”を信じ、死を肯定的に捉え、自分をより良くしようと努力し、自分と他者を大切にしている」といえる。特に女性は、他宗教群の女性と比較した場合に、その傾向が強く現れていた。

一方、仏教群、無宗教群では男女差が大きい項目があった。概して、仏教群の男性は「“浄福な来世”を信じて、他のグループよりも、自分のやることに最善を尽くし、自分の良い面を伸ばそうとし、自分と他者を大切にしている」が、希死願望はやや強い。それに対して仏教群の女性は、「死を苦しみや孤独と捉える傾向にあり、自分をより良くしようとする反面、過去にこだわる傾向」があり、希死願望も強い。

無宗教群の男性は、「あまり“浄福な来世”を信じておらず、積極的な生き方をするわけでもなく、かといって生と死に対して否定的になっているわけでもない」。無宗教群の女性は、「死を“苦しみと孤独”“挫折と別離”と捉える傾向にあり、希死願望も強く、他のグループと比べると、自分を良くしていこうとか、自分と他者を大切にしようとする部分は低く、過去にこだわる傾向」が見られた。

このように、宗教別にそれぞれの群の特徴や傾向が現れており、宗教がその人の死生観に何らかの影響を与える要因であること示唆されたといえるだろう。

2. 宗教別の死観尺度と生き方尺度の相関係数

死観尺度と生き方尺度の相関係数からは、どの群でも死を“挫折と別離”と捉えることと、“苦しみと孤独”と捉えることの関連性が強いことが認められた。また、自分の最善を尽くそうとすることと、自分の良いところを伸ばし、他者と共に生きようとする姿勢や、過去に執着しない姿勢が、それぞれに関わっているという点は、相関の強弱はあったが、どの群でも認められた。

ところがキリスト教群、仏教群にはなく、無宗教群にのみ認められた相関関係が大きく分けて3点あった。一つは、“浄福な来世”と“苦しみと孤独”の相関関係で、すなわち死を否定的に捉えることと来世に希望を持つことが関連していた。もう一つは、“挫折と別離”が、“能動的実践的態度”、“自己の創造・開発”、“自他共存”のそれぞれと相関関係があったことと、“苦しみと孤独”と“能動的実践的態度”の相関関係があったことである。つまり、死を挫折や別離、苦しみや孤独といった否定的なものとして捉えることと、積極的に自分を生かし、他者と共に生きようとする姿勢が関連していた。最後に、希死願望の強さと、過去へのこだわりやすさにも相関が認められた。

つまり、宗教を持つ人と持たない人の差は、浄福な来世と死の捉え方の関係、死を否定的に捉えることと、積極的に生きようとする姿勢の関連性、希死願望と過去へのこだわりやすさに現れたといえる。

第5節 まとめと今後の課題

宗教と死に対する態度の関連性は、諸外国や日本においてもさまざまな年代を対象に研究が行われており、その結果は用いた指標によって異なっている(丹下, 2004b)。

今回の大学生を調査対象とした宗教と死生観に関する量的調査では、宗教別に見るといくつかの点において有意差が見られ、宗教の特色が表れた結果となった。小泉(2000)の行った研究では、仏教・キリスト教を信仰する大学生は、共に無宗教の学生よりも比較的死を受容しやすく、死後にも何らかの形で生命が存続すると思うという結果であった。しかし今回の調査Iでは、仏教群の男女差が大きく、仏教群が無宗教よりも死後の存在の存続を信じているという結果にはならなかった。

一方、キリスト教群は無宗教群よりも“浄福な来世”を信じる傾向にあり、死を“挫折と別離”と捉える人が少なかった。これは、キリスト教の教理において「死んだ後には天国に行き、そこで先に死んだ人との再会が約束されている」ということが説かれているこ

と関係していると考えられる。

死別体験でどのような影響を受けたかに関する自由記述の部分を見てみると、キリスト教群は、死を実感することで天国を意識する、あるいは前向きに生きようとするものが見られたが、むなしさや無常観といった記述は見られなかった。

「今までただ単に生きていたが、本当に死というものがあることがよくわかった。また、宗教的に言えば、本当に神様のもとへ帰っていったんだということが身にしみてわかった。」(キリスト教、男子)

「祖母が亡くなったとき、初めて人の死に触れ生きることについて考えました。自分の存在についても考えました。ショックも大きかったので影響があったと思います。少し前向きになりました。祖母の人生を見て。」(キリスト教、女子)

また生き方においては、キリスト教群の方が無宗教群よりも、自分に与えられている能力を発揮し、さらに向上させていこうとする傾向にあることが示唆された。このことは、丹下 (1995) が述べた、宗教の有無は“生を全うさせる意思”と関連しており、青年が宗教に求めている役割は、“日常生活や人生における判断・行動の指針”や“自己投入の対象”なのではないか、という考察を支持するものであろう。つまり今回の調査結果からも、キリスト教は死の捉え方のみならず、どう生きるかという生に対する態度にも影響を与えているといえるだろう。

それに対して、仏教群では来世に関する記述はなく、死に対するあきらめや割り切りといった記述が見られた。

「どのような人生を過ごしても死という終着駅があり、皆死んでしまうことを再認識させられて怖くなった。」(仏教、男子)

「ありのまま受け止めてしまい、死はすごく悲しい出来事ではありますが、人生観に大きな影響があったという感覚はありません。」(仏教、女子)

「人はある年になったら病気や高齢なので原因で必ず死ぬから、死んだ時は周りの人達は寂しく悲しく感じられる。しかし、時間をかけて人の気持ちは治る。」(仏教、男子)

仏教群においては、調査Ⅰと調査Ⅱで、死観尺度の“浄福な来世”の得点傾向が一致し

ていなかった。すなわち、被調査者によって得点に差があった。したがって、ここから、仏教群としての一般的な傾向を考察することは出来ない。

今後、仏教の死観に対する影響を解明する研究を行うときには、各宗派の教える内容を考慮すること、また、その教えに個人がどの程度影響を受けているかを調べた上での検討が必要であろう。

無宗教群では、「死を“苦しみ”や“孤独”であると感じているから来世に希望を持つ」、あるいは「来世があることを信じてはいるが、死は苦しくて孤独なものであると感じる」傾向が認められた。さらに、自分の人生を積極的に生きようとするのと、死を“挫折”や“苦しみ”、“別離”、“孤独”など、否定的なイメージで捉えることの間に関連関係が見られた。これは、生に対して充足感や、自分が成長する可能性を感じている人ほど、死はそのような自分の可能性を奪い、生に対して有限性を与えるネガティブなものとして捉えているため、死の不安の高さに結びついているという、松下・尾方 (2007) の研究考察や、青年期後期においても、自らの人生、生きることへの積極性といった、健康的側面から死への恐怖・不安感情が表出されることがあるという、海老根 (2011) の調査結果を支持するものである。

死別体験の影響に関する自由記述からも、積極的に生きようとする人ほど、死を自分の可能性を奪う否定的なものとして捉える、あるいは死を通して世の中の無常観に気付いたからこそ、今を大切に生きようとする姿勢がうかがえる。

「昨日まで学校に来ていた友達が、急に亡くなりました。やりたいことがまだまだあったので悔しさでいっぱいでした。一分一秒も無駄にはできないと感じました。」(無宗教、女子)

「前日は元気だった人が次の日には死んでしまい、人間はこんな簡単に死んでしまうものなんだと思った。だから私は毎日を充実させて、いつ死んでもしょうがないと思うようになった。」(無宗教、男子)

「とても大切な祖父だったから、彼の死はショックだった。人間は脆弱だと思う。だからこそ限りある人生の中で、有意義なことをするのは大切だと思う。」(無宗教、男子)

「人は死んだら本当に冷たくなってしまふことを知った。人生の終わり方を見た。自分も精一杯生きなきゃいけないと思った。」(無宗教、女子)

また無宗教群は、死にたいと思う人ほど過去にこだわる傾向にある、あるいは過去にこだわり、そこから逃れる手段として死を選びたがる傾向が認められた。

丹下ら (2000) は、心理社会的に発達している人ほど生きることにに対して積極的でありつつ、死に対して肯定的な見方を持っていると述べている。であるとすれば、無宗教群の死生観は、死の否定的な側面を強調して捉えるか、死を現実からの逃げ道として考える傾向が強く反映されており、そのどちらも心理社会的には未発達な死の捉え方であるといえよう。

その点、キリスト教群と仏教群では、その傾向が見られなかった。よって、今回の調査対象者の間では、宗教が健全に発達した死生観、すなわち「死をただ否定的に捉えるのではなく、肯定的に受け止めつつ、死があるからこそ生を大切にする」という、積極的に自分の生を全うする態度につながる死生観の形成に、何らかの役割を果たしているといえるだろう。

今回の調査では、調査対象者に「あなたの宗教は何ですか？」と聞いたに過ぎず、その宗教との関わりの深さを測定してはいない。したがって、この結果をもって、宗教の死生観に対する影響をすべて語ることはできない。しかし逆に言えば、宗教の有無だけで、結果に有意差が出たということには意味があると考えられる。

今後、宗教が成熟した死生観の形成にどのような役割を果たしているのかを解明する調査研究のためには、どの程度その教義に親しんでいるか、宗教的な体験の有無や内容、宗教的行動の有無や内容など、その人の宗教性に関する問いや尺度を用いての研究が必要となるであろう。

調査ⅠおよびⅡで用いた死観尺度と生き方尺度は、ともに宗教の有無に関わりがあることが認められたことから、調査Ⅲの、キリスト者の死生観を計る心理尺度として用いることとする。特に、死観尺度は、“浄福な来世”という宗教的側面と、“別離”という他者との関係性の側面から死を捉えていること、また生き方尺度は、“自他共存”“他者尊重”といった他者との関係性を視野に入れており、キリスト者として成熟することが、「神、他者、そして自分との関係を修復し、より良い関係を築いていくことである」と考えるならば、キリスト者の成熟と死生観を検討するのに適した尺度であると考えられる。

そこで、調査ⅠとⅡの結果を踏まえて、調査Ⅲでは、キリスト者のもつ信仰とその成熟度が、死生観にどのように影響しているのかを調査する。

第Ⅱ部 キリスト者の宗教と死生観に関する量的調査

第4章 調査Ⅲ キリスト者における信仰と死生観に関する調査

第1節 調査目的

調査Ⅲの目的は、キリスト者のもつ信仰とその成熟度が、死生観にどのように影響しているのかを量的に調査することである。

調査ⅠとⅡでは、大学生を調査対象として、宗教と死生観の関連性を調査し、宗教が健全に発達した死生観、すなわち「死をただ否定的に捉えるのではなく、肯定的に受け止めつつ、死があるからこそ生を大切にするという、積極的に自分の生を全うする態度につながる死生観」の形成に、何らかの役割を果たしているという結論を得た。

そこで調査Ⅲでは、日本人キリスト者の死生観を心理学的に研究するため、宗教と死生観の先行研究で多く用いられ、比較的死生観に影響を与えると思われる内発的・外発的宗教尺度、および調査Ⅰ、Ⅱで使用した死観尺度、生き方尺度を用いて、キリスト者の死生観の調査を行い、キリスト者の成熟度と死生観についての検定、検討を行った。調査研究を行う際、因子分析によって、各心理尺度を日本人キリスト者向けに心理尺度を構成し直し、日本人キリスト者の死観尺度と生き方尺度の尺度構成を行った。

なお本研究では、内発的宗教性を「信仰を内在化させ、それを中核として、人生や生活を送ろうとする志向性」、外発的宗教性を「信仰によって間接的に得られる利益（安心感や加護、倫理道徳的基準、社会的関わりなど）を期待し、それを得る道具として信仰を用いようとする志向性」（Allport & Ross, 1967）と定義した。

第2節 調査方法

1. 調査対象者

調査は日本人キリスト者およびキリスト教に親和的な人 354 名（男性 125 名、女性 229 名）を対象に行った。対象者は 18 歳～86 歳に分布し、平均年齢は 52.98 歳（SD=18.62）であった。

2. 調査方法

質問調査票は以下のものを含めた。

① I/E-R scales の質問項目 42 項目をバック・トランスレイション方式で和訳したもの。

I/E-R scales（内発的宗教性・外発的宗教性の心理尺度）は邦訳されておらず、日本人独

自の内発的・外発的宗教性の尺度も開発されるに至っていない。したがって、“内発的・外発的宗教性”を指標とした日本人の死生観研究も、まだ十分に行われているとはいえない。そこで本研究では、Gorsuch が I/E-Revised Scale の開発の際に用いた質問項目の原版 (Gorsuch & McPherson, 1989) を邦訳し、日本人キリスト者に対して用いるための再尺度構成を試みた。なお、この研究に際して、Gorsuch 博士 (フラー神学大学) に質問項目の原版使用の許可を快諾していただいた。

バック・トランスレイション方式とは、日本語に翻訳したものを再度英語に訳し、原文と比較検討しながら翻訳する方法である。本調査では、性差による言語の違いを考慮して、男性 1 名と女性 1 名に、それぞれ別個に質問項目を翻訳してもらったものをひとつにまとめ、その日本語版についてアメリカ人翻訳家に再び英語に翻訳を依頼した。その結果、元の文章に戻らなかった項目の訳文を改めたものをまとめ、内発的・外発的宗教性尺度の日本語版 (5 件法) を作成した。

原文では多宗教に対応した尺度を作るために、「宗教・信仰」は個人的な信仰 (例: 仏教、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教など)、「礼拝場所」とは教会やモスク、神社、シナゴークなど」と教示している。このため、今回の邦訳でも今後多宗教に応用することができるよう、同じ教示を行うこととした。

② 調査 I、II で使用したのと同じ、死観尺度 (金児, 1994) と生き方尺度 (板津, 1992)。

③ また、尺度構成の信頼性、妥当性の検討のため、以下の質問紙も調査票に加えた。

価値志向性尺度 (酒井ら, 1998) の下位尺度“宗教”の質問項目 12 個: 5 件法で回答を求め、個人が宗教にどれだけの価値を置いているかを測る尺度である。

自尊感情尺度 (山本ら, 1982): 10 の設問に対して、5 件法で回答を求め、自己の能力や価値についての評価的な感情を尺度化したものである。

達成動機測定尺度 (堀野, 1987): 23 の質問に対して 7 件法で回答を求め、達成動機を個人的達成欲求と社会的達成欲求の二つの側面から捉える尺度である。

ベック絶望感尺度 (Tanaka et al., 1998): Beck Hopelessness Scale(BHS)の日本語版で、絶望感を測定する尺度である。

④ 死に対する意識調査を加えた。そこでは、「どのようなときに自分の死を意識するか」、「自分、または家族が病気になったときの病名告知、脳死、臓器提供をどう考えるか」「教会やメッセージの中で死が語られるか」「死の備えができていないか」(5 件法、自由記載含む)などを質問した。(付録 A、参照。)

フェイスシートでは、性別、年齢、宗教（カトリック、プロテスタント）、教派・教団（自由記載）、信仰歴を聞いた。また、調査対象者にとっての信仰の重要度を測るために「あなたにとって信仰や信仰心はどのくらい大切なものですか？」「あなたはどのくらいの頻度で礼拝場所（教会など）に行きますか？」という2つの質問に対して、5件法で回答してもらった。

3. 調査手続き

2011年3月から2011年7月に、複数教会の関係者、超教派団体の講演会やセミナー参加者などに質問紙を配布し、手渡しまたは郵送で回収を行った（回収率70.8%）。調査対象者には、実施前に調査の趣旨として、これはキリスト者の死生観に関する調査の一環で行われる研究であることと、質問紙は無記名で個人が特定されないこと、回答拒否を出来ることを明示した。また、結果は統計的に処理をおこない、結果処理後は回答用紙をすべて破棄処分することを伝えた。

第3節 調査結果1

調査対象者の属性は、表3-1に示す。

表3-1. 調査対象者の属性 (N=354)

	プロテスタント	カトリック	その他	合計
男性	92 (26.0%)	6 (1.7%)	27 (7.6%)	125 (35.3%)
女性	177 (50.0%)	43 (12.1%)	9 (2.5%)	229 (64.7%)
合計	269 (76.0%)	49 (12.8%)	36 (10.2%)	354 (100%)

“その他”は、「教会に行ってはいるが、まだ個人的な信仰告白を行っていない」という分類である。

また、キリスト者の信仰歴（信仰年数）は、表3-2のとおりである。

表 3-2. 調査対象者の属性（信仰年数別） (N=318)

	5年以下	6～10年	11～20年	21年～30年	30年以上	合計
男性	7 (2.2%)	11 (3.5%)	21 (6.6%)	17 (5.4%)	42 (13.2%)	98 (30.8%)
女性	9 (2.8%)	15 (4.7%)	47 (14.8%)	43 (13.5%)	106 (33.3%)	220 (69.2%)
合計	16 (5.0%)	26 (8.2%)	68 (21.38%)	60 (18.9%)	148 (46.5%)	318 (100%)

キリスト者の宗教と死生観の調査研究を進めるために、内発的・外発的宗教尺度の尺度構成のための因子分析と、その信頼性、妥当性の検討、および死観尺度生き方尺度の因子分析により、再尺度構成を行った。

1. 内発的・外発的宗教尺度の尺度構成のための因子分析

得られた 42 項目の質問に対する回答について、主因子法による因子分析を行った。その結果、本研究では解釈可能性から 5 因子が妥当であると判断した（固有値 1.8 以上、累積寄与率 49.63%）。

そこで、5 因子を想定した因子分析を行い（主因子法、プロマックス回転）、その結果因子負荷量が 0.4 に満たなかった 10 項目を除外し、残った 32 項目で再度因子分析を行った。第 5 因子の回転前固有値は 0.96 であったため、第 5 因子の 2 項目を除外した。

また、内的整合性を検討するために各因子のクロンバックの α 係数を算出した。その結果、因子ⅢとⅣにおいて、信頼性を低めた質問項目があったため計 3 項目を除外した。よって、最終的には、因子Ⅰ 10 項目、因子Ⅱ 8 項目、因子Ⅲ 5 項目、因子Ⅳ 4 項目の合計 27 項目となった。因子分析の結果は表 3-3 のとおりである。

表 3-3. 内発的・外発的宗教尺度の因子分析結果

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
I27	.74	-.10	.07	.15
I10	.71	-.05	.07	.01
I22	.69	.06	.21	-.04
I35*	.66	-.03	-.23	.04
I18	.64	.10	-.04	.00
I2	.64	-.05	-.05	.01
I14	.61	-.04	.00	.09
I25	.57	.24	.17	-.01
I6*	.56	-.02	-.18	-.04
I41*	.54	-.05	-.16	.05
Ep24	.19	.70	.02	-.08
Ep19	.15	.68	.06	-.12
Ep7	-.20	.64	-.18	.06
Ep23	.03	.62	.10	-.02
Ep15	-.32	.59	.01	.20
Ep28	.08	.43	.22	.04
Ep8	.25	.42	.06	.06
Ep3	-.12	.41	-.09	.13
Em42	-.01	-.10	.71	.03
Em37	-.39	-.10	.60	.07
Em16	.13	.07	.51	.00
Em40	-.07	.13	.50	.04
Em33	-.17	.02	.46	.10
Es5	.06	.01	.09	.73
Es21	-.02	.03	.01	.67
Es13	-.03	.16	-.10	.67
Es30	-.02	.09	.07	.60
累積寄与率	17.70%	34.21%	38.84%	42.56%

*は逆転項目。

原版 I/E-R scales は、“内発性 (Intrinsic, I)” “個人的外発性 (Extrinsic Personal, Ep)” “倫理的な外発性 (Extrinsic Morality, Em)” “社会的な外発性 (Extrinsic Social, Es)” の 4 つの下位項目が設定されており、今回の因子分析の結果も原版と同様であった。内発的・外発的宗教性尺度の日本語版は、付録 B として添付した。

表 3-4 は、各因子の平均と標準偏差、および α 係数である。因子 I は“内発性 (I)” $\alpha=.87$ 、因子 II は“個人的外発性 (Ep)” $\alpha=.78$ 、因子 III は“倫理的な外発性 (Em)” $\alpha=.76$ 、因子 IV は“社会的な外発性 (Es)” $\alpha=.79$ となった。このことから、内発的・外発的宗教性尺度の日本語版に関して、ある程度の信頼性が得られたといえる。

表 3-4. 内発的・外発的宗教性の各下位尺度の平均と α 係数

下位尺度	平均	標準偏差	α 係数
内発性(I)	4.110	1.110	.87
個人的外発性(Ep)	3.046	1.276	.78
倫理的な外発性(Em)	2.571	1.299	.76
社会的な外発性(Es)	1.538	0.840	.79

次に、内発的・外発的宗教性尺度の各因子と、信仰の重視度（「あなたにとって信仰や信仰心はどのくらい大切なものですか？」という質問に対する回答）と、礼拝出席の頻度（「あなたはどのくらいの頻度で礼拝場所（教会など）に行きますか？」に対する回答）、価値志向性尺度の“宗教”得点との相関係数をそれぞれに算出し、表 3-5 に示した。

なお、価値志向性尺度の“宗教”得点は、宗教に価値を置く度合いを示したもので、この調査では平均 4.44、(SD=0.35) $\alpha=.73$ であった。

表 3-5. 信仰重視度、礼拝出席、“宗教”得点と各因子の相関係数

	信仰重要性	礼拝出席	“宗教”	I	Ep	Em	Es
信仰重視性	-						
礼拝出席	0.66**	-					
“宗教”得点	0.18	0.08	-				
I	0.75**	0.60**	0.44**	-			
Ep	0.09	0.06	0.09	0.19	-		
Em	-0.12	-0.11	0.04	-0.01	0.42**	-	
Es	-0.13	-0.15	-0.12	-0.11	0.34**	0.42**	-

* $p < .05$ ** $p < .01$

その結果、信仰重視度と礼拝出席頻度 [$r = .66, p < .01$]、信仰重視度と I [$r = .75, p < .01$]と、礼拝出席と I [$r = .60, p < .01$]に比較的高い相関が見られ、“宗教”得点と I [$r = .44, p < .01$]、Ep と Em [$r = .42, p < .01$]、Ep と Es [$r = .34, p < .01$]、Em と Es [$r = .42, p < .01$]に、中位の相関が見られた。

2. 信仰重視度と礼拝出席による差異の検定

信仰重視度で「信仰心はない」「信仰は持っているがあまり大切ではない」「どちらともいえない」と回答した人を非重視群、「大切である」「非常に大切である」と回答した人を重視群として、内発的・外発的宗教性尺度に関して t 検定を行った。

また、礼拝に「まったく行かない」「あまり行かない」「時々行く」を少出席群、「ほぼ毎週行く」「週に 2 回以上行く」を多出席群として t 検定を行った。それぞれの検定結果は、表 3-6 のとおりである。

表 3-6. 信仰重視度と礼拝出席に内発的・外発的宗教性尺度の得点差

信仰重視度	非重視群(n=40)	重視群(n=314)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
内発性(I)	2.56 (0.54)	4.21 (0.52)	17.934	0.000 **
個人的外発性(Ep)	2.76 (0.77)	3.08 (0.75)	2.402	0.001 **
倫理的な外発性(Em)	2.82 (0.93)	2.55 (0.71)	1.769	0.039 *
社会的な外発性(Es)	1.85 (0.78)	1.50 (0.37)	2.333*	0.012 *

礼拝出席	少出席群(n=72)	多出席群(n=272)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
内発性(I)	3.16 (0.81)	4.25 (0.51)	10.530*	0.000 **
個人的外発性(Ep)	2.93 (0.81)	3.08 (0.74)	1.414	0.008
倫理的な外発性(Em)	2.74 (0.93)	2.54 (0.83)	1.750	0.040 *
社会的な外発性(Es)	1.65 (0.77)	1.51 (0.61)	1.348*	0.091

* $p < .05$ ** $p < .01$

その結果、信仰重視度と内発的・外発的宗教性尺度はどの項目においても有意差が現れた。信仰重視群は、内発性[t(349)=17.934, $p < .001$]、個人的外発性[t(348)=2.402, $p < .01$]において非重視群よりも高く、非重視群は、倫理的な外発性[t(349)=-1.769, $p < .05$]、社会的な外発性[t(38.9)=-2.333, $p < .05$]において、重視群よりも高かった。

また礼拝出席度別では、多出席群が内発性[t(80.2)=10.530, $p < .001$]において少出席群よりも高く、少出席群は倫理的な外発性[t(349)=-1.750, $p < .05$]において多出席群よりも高かった。

3. キリスト者の死観尺度と生き方尺度の因子分析

死観尺度と生き方尺度を、キリスト者向けの死観尺度と生き方尺度としてそれぞれ因子分析を行い、再尺度構成を行った。

死観尺度 31 項目の質問に対する回答について、主因子法による因子分析を行った結果、本研究では解釈可能性から 4 因子が妥当であると判断した（固有値 1.0 以上、累積寄与率 34.20%）。

そこで、4 因子を想定した因子分析を行い（主因子法、プロマックス回転）、その結果因子負荷量が 0.4 に満たなかった 6 項目を除外し、残った 25 項目で再度因子分析を行った。第 4 因子の回転前固有値は 0.88 であったため、再度 3 因子を想定した因子分析を行い、二つの因子に負荷するとされた 1 項目と因子負荷量が 0.4 に満たなかった 5 項目を除外した。

また、内的整合性を検討するために各因子のクロンバックの α 係数を算出した。その結果、因子 I と II において、信頼性を低めた質問項目があったため計 3 項目を除外した。よって、最終的には、因子 I 4 項目、因子 II 6 項目、因子 III 6 項目の合計 16 項目となった。

因子分析の結果、および各因子の平均点と α 係数は表 3-7、表 3-8 のとおりである。

表 3-7. キリスト者の死観尺度、因子分析結果

	因子 I	因子 II	因子 III
1	.66	-.16	.01
2	.65	-.02	.01
3	.62	.05	.10
4	.50	.07	.11
5	-.15	.72	.06
6	-.17	.69	-.01
7	-.09	.60	.01
8	.05	.47	.31
9	.19	.43	.14
10	.14	.42	.21
11	.06	-.19	.56
12	.20	.00	.55
13	-.03	.11	.54
14	-.18	.19	.52
15	.02	.07	.50
16	.29	-.18	.47
累積寄与率	17.24%	27.43%	32.33%

因子Ⅰは、『死んでしまえば一人ぼっちである』『今死ねば残された家族を世の中の試練にさらさねばならない』など、死を他者との関係において捉える因子であると推測される。よって、因子Ⅰは下位尺度“他者との別離、挫折”とした。

因子Ⅱは、『人は死んでも極楽（天国）へ行き、幸せに暮らすことができる』『死ぬときになって人は完成するものだ』など、死の希望的側面を強調する因子であると推測される。よって下位尺度“希望的受容”とした。

因子Ⅲは『死んでしまえば、もう人生の意義を追求できなくなる』『死については誰もが「わからない」という』など、死が終わりであることやそれは予測できないことであると捉えている。よって、下位尺度“未知と終焉”とした。

表 3-8. キリスト者の死観尺度、各下位尺度の平均と α 係数

下位尺度	平均	標準偏差	α 係数
他者との別離、挫折	2.154	1.389	.75
希望的受容	3.494	1.805	.72
未知と終焉	3.826	1.803	.71

なお、キリスト者の死観尺度の下位尺度に属する質問項目は、付録 C として添付した。

これと同様に、生き方尺度 28 項目の質問に対する回答に関しても、主因子法による因子分析を行い、解釈可能性から 3 因子が妥当であると判断した（固有値 1.0 上、累積寄与率 40.36%）。

そこで、3 因子を想定した因子分析を行い（主因子法、プロマックス回転）、因子負荷量が 0.4 に満たなかった 8 項目を除外、残った 20 項目で再度因子分析を行い、二つの因子に負荷するとされた 1 項目と因子負荷量が 0.4 に満たなかった 1 項目を除外した。

また、内的整合性を検討するために各因子のクロンバックの α 係数を算出した。その結果、因子Ⅰにおいて、信頼性を低めた質問項目があったため計 1 項目を除外した。よって、最終的には、因子Ⅰ 8 項目、因子Ⅱ 5 項目、因子Ⅲ 4 項目の合計 17 項目となった。

因子分析の結果、および各因子の平均点と α 係数は表 3-9、表 3-10 のとおりである。

表 3-9. キリスト者の生き方尺度、因子分析結果

	因子 I	因子 II	因子 III
1	.72	.12	-.09
2	.71	-.07	.06
3	.62	-.22	.27
4	.61	.09	-.01
5	.55	.29	-.11
6	.55	.10	.18
7	.50	.15	.04
8	.47	.219	.04
9	-.11	.89	-.11
10	-.14	.76	.09
11	.10	.76	-.11
12	.03	.57	.22
13	.08	.43	.22
14	-.01	-.10	.59
15	-.04	.15	.54
16	.19	.03	.53
17	-.05	.34	.49
累積寄与率	33.41%	40.89%	44.95%

因子 I は、『自分のやるべきことは責任を持ってやり遂げる』『他者との関わりを大事にする』と、他者との関わりを大切にしつつ、自分の分をしっかりと果たそうとする姿勢を示している。そこで下位尺度“自他共存”とした。

因子 II は、『自分の持っている潜在的可能性を追求し続ける』『何事にも興味と好奇心をもって接する』など、積極的に自分の能力を高めていこうとする姿勢を現している。よって、下位尺度“自己の向上”とした。

因子 III は『何かに失敗しても混乱したり、絶望したりしない』『自分自身の行為に自信を持っている』などと、あまり過去や失敗にこだわらずに進んでいこうとする姿勢を現して

いる。よって、下位尺度“こだわりのなさ”とした。

表 3-10. キリスト者の生き方尺度、各下位尺度の平均と α 係数

下位尺度	平均	標準偏差	α 係数
自他共存	3.912	0.889	.85
自己の向上	3.358	1.045	.82
こだわりのなさ	3.152	0.996	.68

なお、キリスト者の生き方尺度の下位尺度に属する質問項目は、付録 D として添付した。

次に、キリスト者の死観尺度と生き方尺度の相関係数を算出した。結果は、表 3-11 のとおりである。

表 3-11. キリスト者の死観尺度と生き方尺度の相関係数

	別離、挫折	希望的受容	未知と終焉	自他共存	自己の向上	こだわりのなさ
別離、挫折	-					
希望的受容	0.04	-				
未知と終焉	0.39**	0.01	-			
自他共存	-0.11	0.30**	0.06	-		
自己の向上	0.06	0.22**	0.08	0.55**	-	
こだわりのなさ	-0.10	0.07	0.01	0.50**	0.42**	-

* $p < .05$ ** $p < .01$

“他者との別離、挫折”と“未知と終焉” [$r = .39, p < .01$]、“希望的受容”は“自他共存” [$r = .30, p < .01$]、“自己の向上” [$r = .22, p < .01$]のそれぞれと、弱い相関が認められた。また、“自他共存”は“自己の向上” [$r = .55, p < .01$]、“こだわりのなさ” [$r = .50, p < .01$]と中位の相関、“自己の向上”と“こだわりのなさ”は弱い相関 [$r = .42, p < .01$]が見られた。

その他の尺度の平均と標準偏差は、以下の通りである。

『死にたいと思ったことがあるか』という問いに対する答え（以下、希死願望得点）は、平均 3.23(SD=1.92) であった。自尊感情尺度は、50 点満点で平均 33.68(SD=7.05) であった。達成動機測定尺度は、個人的達成欲求を示す“自己充實的達成動機”は、平均 63.80(SD=9.44)、社会的達成欲求を示す“競争的達成動機”は、平均 41.22(SD=11.39) であった。ベック絶望感尺度は 20 点満点で、平均 6.73(SD=3.68) であった。

キリスト者の死観尺度、生き方尺度と各尺度の相関係数を求めた結果が、表 3-12 である。

表 3-12. 死観尺度、生き方尺度と各尺度の相関係数

	別離、挫折	希望的受容	未知と終焉	自他共存	自己の向上	こだわりのなさ
希死願望	0.10	0.00	0.05	-0.07	-0.03	-0.22**
自尊感情	-0.08	0.01	-0.07	0.24**	0.35**	0.42**
自己充實的達成動機	0.03	0.19	-0.02	0.36**	0.58**	0.26**
競争的達成動機	0.26**	-0.02	0.08	-0.16	0.16	-0.06
絶望感尺度	0.15	-0.17	0.31**	-0.26**	-0.31**	-0.24**

* $p < .05$ ** $p < .01$

死観尺度の“他者との別離、挫折”が“競争的達成動機” [$r = .26, p < .01$]と、“未知と終焉”が絶望感尺度 [$r = .31, p < .01$]と低い相関があった。

また、生き方尺度の“自他共存”が“自尊感情” [$r = .24, p < .01$]、“自己充實的達成動機” [$r = .36, p < .01$]のそれぞれと低い相関があり、絶望感尺度と負の低い相関があった [$r = -.26, p < .01$]。“自己の向上”は、“自尊感情” [$r = .35, p < .01$]と弱い相関、“自己充實的達成動機” [$r = .58, p < .01$]と中位の相関があり、絶望感尺度と負の低い相関があった [$r = -.31, p < .01$]。“こだわりのなさ”は、希死願望得点 [$r = -.22, p < .01$]、絶望感尺度 [$r = -.24, p < .01$]のそれぞれと負の低い相関があり、“自尊感情” [$r = .42, p < .01$]、および“自己充實的達成動機” [$r = .26, p < .01$]のそれぞれと低い相関があった。

第4節 考察1

1. 内発性・外発性宗教尺度

I/E-R scales の質問項目を邦訳して、日本人キリスト者およびキリスト教に親和的な成人に対して行い、因子分析を行った結果、27項目から4因子が抽出され、原版と同じ下位尺度が構成された。すなわち、“内発性 (I)”、“個人的外発性 (Ep)”、“倫理的外発性 (Em)”、“社会的外発性 (Es)” の4下位尺度である。内的整合性もあり、各質問項目は原版と同じ下位尺度に属したことから、翻訳の問題はほぼないと考えられる。

“内発性 (I)” は、『私の人生はすべて、私の信じる宗教に基づいている。』『私は神の存在を強く感じるものがよくある。』『宗教がなければ、自分の生きる目的を探すのに苦勞するだろう。』などの質問項目に代表されるように、信仰が内面化され、信仰に基づいて生きようとするものであり、神との関係を求め、その中で生きていこうとする姿勢であるといえる。

“個人的外発性 (Ep)” は『宗教が私に一番多く与えてくれるのは、悲しみや不幸に襲われた時の慰めである。』『私が祈る一番の理由は、困ったときに守ってほしいからである。』などのように、宗教、信仰によって、慰めや安心感などを得ようとするものである。

また“倫理的外発性 (Em)” は、『正しい行いを教えてくれることが、私の宗教の一番重要な側面である。』『私の宗教の一番の強みは、道徳的な基準があることである。』など、宗教を倫理道徳的なツールとして捉える姿勢である。これら2つは、自分自身のあり方、生き方の指針を求める姿勢といえよう。

“社会的外発性 (Es)” は『私が「礼拝場所」に行く一番の理由は、新しい友達を作れるからだ。』などのように、人との出会いや関わりを求めて、礼拝場所に行くという姿勢である。

相関係数からは、信仰を重要視していることと、頻繁に礼拝出席すること、そしてIの間に高い相関が見られ、信仰を重視し、礼拝に回数多く出席する人は内発的宗教性が高いことがわかった。また、Ep、Em、Esの間には相関関係があり、外発的宗教性という面での共通因子であるということも示唆された。

また、t検定の結果からも、礼拝出席別ではIとEmのみで有意差が出たが、信仰重視度別では、4つの下位尺度とも有意差が出ており、この尺度がその人にとっての信仰の重要性を測定しているという妥当性を確認できるであろう。

よってこの内発性・外発性宗教尺度は、日本版 I/E-R scales として、ある程度の信頼性、妥当性が得られたといえる。

この尺度の使用方法であるが、各下位尺度の得点が 3.0 よりも高い場合には、母集団に占める割合に関わらず、I 群、Ep 群、Es 群、Em 群などのように分けることができる。逆に、母集団の平均得点に関係なく、各尺度の得点が 3 以下の場合にはその傾向は認められないということになる。

なお、今回の調査対象者は、キリスト者もしくはキリスト教に親和的な人であった。よって、この結果をもって、これが日本人の内発的・外発的宗教性尺度であると結論付けることはできない。日本人の内発的・外発的宗教性尺度の開発のためには、今後はその他の宗教、また無宗教者に対しても幅広く調査を行うことが必要である。

2. キリスト者の死観尺度と生き方尺度

死観尺度と生き方尺度を、因子分析により、キリスト者の死観尺度と生き方尺度として再尺度構成を行った。

キリスト者の死観尺度は、3 因子が抽出され、“他者との別離、挫折” “希望的受容” “未知と終焉” の下位尺度によって構成された。キリスト者の生き方尺度も、同じく 3 因子で、“自他共存” “自己の向上” “こだわりのなさ” という下位尺度となった。

キリスト者の死観尺度に関しては、“他者との別離、挫折” と “未知と終焉” に相関関係が見られ、“未知と終焉” とベック絶望感尺度との間に相関が見られた。このことから “他者との別離、挫折” と “未知と終焉” は、死を否定的な側面から捉えるものであるといえよう。さらに、“他者との別離、挫折” は、達成動機測定尺度の “競争的達成動機” と相関関係があり、他者との関係において死を捉える下位尺度であることの妥当性が確認できたといえよう。また、“希望的受容” と、生き方尺度の “自他共存”、“自己の向上” のそれぞれに相関関係が見られたことから、“希望的受容” は積極的な生き方に通じる死の捉え方であると考えられる。

興味深いのは、金児の死観尺度においては “人生の試練” に分類された質問項目『死んで初めてその人の人生価値がわかる。』と、『死とはその人を試す人生最後のテストである。』が、キリスト者の死観尺度では、死後の幸福と同じ下位尺度に分類されていることである。このことから、キリスト者は死を必ずしも「試練」や「苦難」とは捉えていないことが示

唆される。

また、生き方尺度において、“自他共存”と“自己の向上”、“こだわりのなさ”の間に相関関係が見られ、自尊感情、自己充實的達成動機と正の相関関係、ベック絶望感尺度とは負の相関関係にあった。よって、生き方尺度の下位尺度はいずれも積極的に生を全うしようとする姿勢を測定していると考えられ、尺度としての妥当性も得られたものと考えられる。

そこで、信頼性と妥当性を得られたと仮定できる内発性・外発性宗教尺度、およびキリスト者の死観尺度、生き方尺度を用いて、キリスト者の成熟度と死生観との関連性を検証していく。

今回の調査研究では、心理的側面から、成熟したキリスト者は、神、他者、自分に対して調和した関係を築いていると考え、その尺度として、内発的・外発的宗教尺度の“内発性”を神との調和した関係、生き方尺度の“自他共存”を他者との調和した関係の尺度とした。また、自己との調和は自尊感情に現れると考え、先ほどの結果において自尊感情と相関が認められた生き方尺度“こだわりのなさ”を尺度とした。

もちろん、キリスト者の成熟度を心理尺度で計測しようとするには限界がある。今回採用した心理尺度はキリスト者の成熟度を一定方向から測っているに過ぎず、そもそも心理的成熟度と霊的成熟度は必ずしも一致するわけではない。しかし、霊的側面は何らかの形で心理的側面に現れるものと考えられる。よってここでは一つの方法として、前述の心理尺度によってキリスト者の成熟度を測ることを試みた。

第5節 調査結果 2

調査Ⅲの結果 1 で因子分析を行い、信頼性妥当性が確認された、キリスト者の内発的・外発的宗教尺度、および死観尺度、生き方尺度を用いて、キリスト者の成熟度と死生観の関連性を検討した。

1. 内発的・外発的宗教尺度と死観尺度、生き方尺度

内発的・外発的宗教尺度をもとに、キリスト者の死観尺度と生き方尺度の検定を行った。各下位尺度において、3.0 を境として 2 群に分け、t 検定を行った。その結果は、表 3-13 にまとめたとおりである。“内発性”は以下 I、“個人的外発性”は以下 Ep、“倫理的な外発性”

は以下 Em、“社会的発性”は以下 Es とする。

表 3-13. 内発的・外発的宗教性による死観尺度、生き方尺度の t 検定

内発性	非 I 群(n=40)	I 群(n=314)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
別離、挫折	3.38 (1.21)	1.97 (0.87)	6.946*	0.000 **
希望的受容	2.87 (1.06)	3.58 (1.10)	3.770	0.001 **
未知と終焉	4.55 (1.02)	3.74 (1.08)	4.493	0.000 **
自他共存	3.57 (0.75)	3.96 (0.59)	3.066*	0.002 **
自己の向上	3.27 (0.78)	3.27 (0.77)	0.727	0.234
こだわりのなさ	2.86 (0.80)	3.19 (0.68)	2.714	0.004 **

個人的外発性	非 Ep 群(n=173)	Ep 群(n=174)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
別離、挫折	1.97 (0.95)	2.29 (1.05)	3.032	0.001 **
希望的受容	3.19 (1.14)	3.80 (1.00)	5.317	0.000 **
未知と終焉	3.79 (1.08)	3.87 (1.13)	0.708	0.240
自他共存	3.91 (0.63)	3.91 (0.60)	0.062	0.475
自己の向上	3.35 (0.80)	3.36 (0.75)	0.121	0.452
こだわりのなさ	3.23 (0.73)	3.08 (0.67)	1.939	0.027 *

倫理的外発性	非 Em 群(n=252)	Em 群(n=95)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
別離、挫折	2.01 (0.92)	2.43 (1.19)	3.106*	0.001 **
希望的受容	3.42 (1.14)	3.73 (1.04)	2.343	0.009 **
未知と終焉	3.68 (1.10)	4.21 (1.02)	4.037	0.000 **
自他共存	3.91 (0.59)	3.92 (0.70)	0.143*	0.443
自己の向上	3.33 (0.75)	3.42 (0.83)	0.931	0.176
こだわりのなさ	3.17 (0.67)	3.11 (0.77)	0.728	0.233

社会的な外発性	非 Es 群(n=334)	Es 群(n=13)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
別離、挫折	2.10 (1.00)	2.94 (0.99)	2.837	0.002 **
希望的受容	3.49 (1.12)	3.68 (0.99)	0.585	0.280
未知と終焉	3.83 (1.12)	3.82 (0.62)	0.063*	0.475
自他共存	3.91 (0.62)	3.89 (0.54)	0.107	0.458
自己の向上	3.37 (0.77)	3.02 (0.86)	1.623	0.052
こだわりのなさ	3.15 (0.70)	3.13 (0.63)	0.102	0.459

* $p < .05$ ** $p < .01$

“内発性”の高いI群と低い非I群の間には、死観尺度のすべての下位尺度に関して有意差があった。非I群の方が“他者との別離、挫折” $[t(41.8)=-6.946, p<.001]$ と“未知と終焉” $[t(345)=-4.493, p<.001]$ において高く、I群は“希望的受容” $[t(345)=3.770, p<.01]$ において高かった。また、生き方尺度では、I群の方が“自他共存” $[t(42.7)=3.066, p<.01]$ と“こだわりのなさ” $[t(345)=2.714, p<.01]$ において高かった。

“個人的外発性”の高いEp群の方が非Ep群よりも、“他者との別離、挫折” $[t(344)=3.032, p<.01]$ と“希望的受容” $[t(345)=5.317, p<.001]$ において高く、非Ep群の方が“こだわりのなさ” $[t(344)=-1.939, p<.05]$ が高かった。

“倫理的外発性”の高い Em 群は、死観尺度の三つの下位尺度どれにおいても非 Em 群よりも高かった(“他者との別離、挫折”[t(138.3)=3.106, $p<.01$]、“希望的受容”[t(345)=2.343, $p<.01$]、“未知と終焉”[t(345)=4.037, $p<.001$])。生き方尺度には有意差は現れなかった。

そして、“社会的外発性”の高い Es 群と非 Es 群で優位差が現れたのは、死観尺度の“他者との別離、挫折”のみで、Es 群の方が非 Es 群よりも高かった[t(344)=2.837, $p<.01$]。

次に、生き方尺度の各下位尺度において、平均値を境として 2 群に分け、t 検定を行った。結果は、表 3-14 にまとめたとおりである。

表 3-14. 生き方尺度による死観尺度、内発的・外発的宗教性の t 検定

自他共存	非自他群(n=158) M (SD)	自他群(n=189) M (SD)	t値	P 値
別離、挫折	2.24 (1.06)	2.05 (0.98)	1.671	0.047 *
希望的受容	3.24 (1.05)	3.71 (1.14)	3.974	0.000 **
未知と終焉	3.78 (1.13)	3.88 (1.08)	0.808	0.210
I	3.86 (0.77)	4.20 (0.65)	4.366*	0.000 **
Ep	3.01 (0.81)	3.09 (0.71)	0.919	0.179
Em	2.54 (0.86)	2.61 (0.85)	0.761	0.224
Es	1.59 (0.65)	1.51 (0.65)	1.134	0.129

自己の向上	非向上群(n=178) M (SD)	向上群(n=169) M (SD)	t値	P 値
別離、挫折	2.10 (1.02)	2.18 (1.02)	0.717	0.237
希望的受容	3.33 (1.04)	3.67 (1.18)	2.804	0.003 **
未知と終焉	3.73 (1.09)	3.94 (1.11)	1.742	0.041 *
I	3.97 (0.72)	4.13 (0.72)	2.168	0.015 *
Ep	3.04 (0.76)	3.06 (0.76)	0.270	0.394
Em	2.45 (0.81)	2.71 (0.88)	2.894	0.002 **
Es	1.54 (0.69)	1.55 (0.61)	0.193	0.423

こだわりのなさ	こだわり群(n=160)	こだわり無群(n=187)	t値	P 値
	M (SD)	M (SD)		
別離、挫折	2.23 (1.03)	2.05 (1.00)	1.656	0.049 *
希望的受容	3.41 (1.04)	3.57 (1.18)	1.351	0.089
未知と終焉	3.76 (1.05)	3.89 (1.15)	1.136	0.128
I	3.95 (0.76)	4.13 (0.68)	2.329	0.010 *
Ep	3.14 (0.73)	2.98 (0.77)	1.972	0.025 *
Em	2.66 (0.84)	2.50 (0.86)	1.790	0.037 *
Es	1.58 (0.64)	1.51 (0.66)	0.960	0.169

* $p < .05$ ** $p < .01$

生き方尺度の“自他共存”が低かった非自他共存群は、死観尺度の“他者との別離、挫折” $[t(344)=-1.671, p < .05]$ が高く、自他共存群は、死観尺度の“希望的受容” $[t(344)=3.974, p < .001]$ と、内発的宗教性 I $[t(344)=4.366, p < .001]$ において有意に高かった。

“自己の向上”の高かった向上群は非向上群よりも、“希望的受容” $[t(344)=2.804, p < .01]$ 、“未知と終焉” $[t(344)=1.742, p < .05]$ 、I $[t(344)=2.168, p < .05]$ 、Em $[t(344)=2.894, p < .01]$ において高かった。

“こだわりのなさ”が低かったこだわり群は、“他者との別離、挫折” $[t(344)=-1.656, p < .05]$ と、Ep $[t(344)=-1.972, p < .05]$ 、Em $[t(344)=-1.790, p < .05]$ が高く、こだわり無し群は、I $[t(344)=2.329, p < .01]$ が高かった。

2. キリスト者の成熟度による死観尺度の検定

次にキリスト者のみを対象とし、キリスト者の成熟度の指標とした内発的・外発的宗教性尺度の I、生き方尺度の“自他共存”、“こだわりのなさ”で、I が 3.0 以上、かつ“自他共存”“こだわりのなさ”がどちらも平均以上だった群を成熟群、それ以外を非成熟群とした。成熟群は 126 名、平均年齢 61.02 歳 (SD=15.29)、非成熟群は 180 名、平均 48.70 歳 (SD=18.65)であった。

成熟度と年齢が関係していることも考えられたため、キリスト者を平均年齢 (56.62 歳)

で2群に分け、I、“自他共存”、“こだわりのなさ”について、t検定を行った結果が表 3-15 である。

表 3-15. 年齢と成熟度の尺度

	低年齢群(n=136)	高年齢群(n=182)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
I	4.12 (0.61)	4.24 (0.56)	1.837	0.034 *
自他共存	3.75 (0.66)	4.07 (0.52)	4.790**	0.000 **
こだわりのなさ	2.92 (0.72)	3.38 (0.56)	6.187**	0.000 **

* $p<.05$ ** $p<.01$

キリスト者の成熟度の尺度としたいずれの項目においても、高年齢群が低年齢群よりも有意に高いという結果であった (I [$t(316)=1.837, p<.05$]、 “自他共存” [$t(247.33)=4.790, p<.001$]、 “こだわりのなさ” [$t(243.78)=6.187, p<.001$])。

この成熟群と非成熟群について、死観尺度、および自尊感情尺度、達成動機測定尺度、ベック絶望感尺度の t 検定を行った。その結果が表 3-16 である。

表 3-16. キリスト者の成熟度と死観尺度、自尊感情尺度、達成動機測定尺度、絶望感尺度

	非成熟群(n=180)	成熟群(n=126)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
別離、挫折	2.27 (1.07)	1.89 (0.87)	3.546*	0.000 **
希望的受容	3.37 (1.07)	3.72 (1.16)	2.868	0.002 **
未知と終焉	3.83 (1.09)	3.82 (1.13)	0.152	0.440
自尊感情	32.50 (6.56)	35.40 (7.41)	3.622	0.000 **
自己充實的達成動機	61.70 (8.21)	66.86 (10.29)	4.679*	0.000 **
競争的達成動機	41.90 (11.07)	40.23 (11.82)	1.262	0.104
絶望感尺度	7.31 (3.88)	5.87 (3.19)	3.551*	0.000 **

* $p<.05$ ** $p<.01$

有意差が認められたのは、以下の項目である。成熟群の方が非成熟群よりも死観尺度の“希望的受容” [t(308)=2.868, $p<.01$]と、“自尊感情” [t(308)=3.622, $p<.01$]、“自己充實的達成動機” [t(226.49)=4.697, $p<.01$]において高く、非成熟群の方が“他者との別離、挫折” [t(311.12)=-3.546, $p<.001$] “絶望感尺度” [t(292.83)=-3.551, $p<.01$]において高かった。

成熟群と非成熟群の死に対する意識調査に関してt検定を行った結果が、表3-17である。

表 3-17. 成熟群と非成熟群の死に対する意識調査 (1)

	非成熟群(n=218)	成熟群(n=129)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
死を意識するのは？				
事故や事件の報道	3.41 (1.33)	3.56 (1.32)	1.020	0.154
知人、友人の葬儀	4.03 (1.13)	4.22 (1.05)	1.473	0.070
家族の入院	3.81 (1.12)	3.88 (1.17)	0.561	0.304
自分の入院	4.18 (1.09)	4.26 (1.05)	0.561	0.288
家族の看取り	4.20 (1.10)	4.33 (1.05)	0.986	0.162
誰かと「死」について話す	3.82 (1.10)	4.06 (1.15)	1.859	0.032 *
法事や記念会	3.33 (1.23)	3.74 (1.24)	2.846	0.002 **
日常生活のふとしたとき	3.48 (1.29)	3.84 (1.17)	2.484	0.007 **
自分の病名告知	4.44 (0.89)	4.58 (0.90)	1.331	0.092
自分の余命宣告	4.26 (0.92)	4.49 (0.96)	2.106	0.018 *
自分の延命措置	1.98 (1.12)	1.78 (1.11)	1.539	0.062
自分の積極的安楽死	3.37 (1.35)	3.37 (1.26)	0.060	0.476
家族の病名告知	3.41 (1.06)	3.49 (1.13)	0.636	0.263
家族の余命宣告	3.10 (1.03)	3.06 (1.25)	0.266*	0.395
家族の延命措置	2.84 (1.15)	2.79 (1.23)	0.327	0.372
家族の積極的安楽死	3.18 (1.16)	3.20 (1.11)	0.152	0.440

* $p<.05$ ** $p<.01$

表 3-17. 成熟群と非成熟群の死に対する意識調査 (2)

	非成熟群(n=218)	成熟群(n=129)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
自分の脳死は「死」である	3.77 (1.20)	3.97 (1.32)	1.388	0.083
自分がドナーになってもよい	3.43 (1.28)	3.44 (1.47)	0.047	0.481
家族の脳死は「死」である	3.18 (1.25)	3.20 (1.32)	0.109	0.457
家族がドナーになってもよい	2.96 (1.20)	2.89 (1.34)	0.473	0.318
会話で「死」が話題になる	2.63 (1.04)	2.98 (1.21)	2.667	0.004 **
会話で「天国、復活」が話題になる	2.92 (1.09)	3.18 (1.16)	2.012	0.022 *
クリスチャンの葬儀は希望を感じる	4.17 (0.90)	4.53 (0.71)	3.860**	0.000 **
死ぬ準備ができていると思う	2.86 (1.17)	3.19 (1.14)	2.451	0.007 **
明日死んでもいいと思う	2.56 (1.30)	2.79 (1.32)	1.566	0.059
クリスチャン前後の考え方の変化	3.84 (1.09)	4.12 (1.15)	2.055	0.020 *

* $p<.05$ ** $p<.01$

「どのようなときに自分の死を意識するか」という質問に対して、「テレビなどの事故や事件の報道」「知人、友人の葬儀に参列したとき」「家族が入院したとき」「自分が入院したとき」「家族を看取ったとき」に関しては、有意な差は見られなかった。しかし、「誰かと“死”について話しているとき」[$t(293)=1.859, p<.05$]、「法事や記念会に参列したり、墓参りをしたとき」[$t(298)=2.846, p<.01$]、「日常生活の中で、ふとしたとき」[$t(298)=2.484, p<.01$]に関しては、成熟群が有意に高いという結果であった。

さらに、自分または家族への病名告知、余命宣告、延命措置、積極的安楽死について聞いたところ、成熟群が「自分自身が大きな病気になった場合、どんなに短くても余命宣告をしてほしい」に関して、有意に高いという結果であった[$t(303)=2.106, p<.05$]。

その他には、「クリスチャンの会話で死がよく話題になる」[$t(303)=2.667, p<.01$]、「クリスチャンの会話で、天国、復活がよく話題になる」[$t(302)=2.012, p<.05$]、「クリスチャンのお葬儀には、希望が感じられる」[$t(298.28)=3.860, p<.001$]、「自分は死ぬ準備ができていると思う」[$t(304)=2.451, p<.01$]、「クリスチャンになった前と後で死に対する考えが変わった」[$t(293)=2.055, p<.05$]という質問において、いずれも成熟群の方が有意に高いとい

う結果であった。

3. 死の意識度と死の受容度による、キリスト者の成熟度と死観尺度の検定

(1) 死の意識度

キリスト者の中でも、自らの死を意識することが多い人と少ない人に分け、内発的・外発的宗教尺度の I、生き方尺度の“自他共存”、“こだわりのなさ”、死観尺度、死の意識調査に関して t 検定を行った。

「以下のような時、あなたは自分の死を意識しますか」という質問に対し、8つの想定された場面（「テレビなどの事故や事件の報道」「知人、友人の葬儀に参列したとき」「家族が入院したとき」「自分が入院したとき」「家族を看取ったとき」「誰かと“死”について話しているとき」「法事や記念会に参列したり、墓参りをしたとき」「日常生活の中で、ふとしたとき」）の答え（5件法）を平均し、その平均値が3以下の人を低意識群、4以上を高意識群とした。低意識群は、平均年齢 57.08 歳（SD=17.27）、高意識群は 57.17 歳（SD=15.48）であった。

表 3-18. 自分の死の意識とキリスト者の成熟度、死観尺度、死に対する意識調査 (1)

	低意識群(n=60)	高意識群(n=163)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
キリスト者の成熟度				
I	3.90 (0.70)	4.31 (0.47)	4.148**	0.000**
自他共存	3.71 (0.69)	4.05 (0.57)	3.709	0.000**
こだわりのなさ	2.96 (0.75)	3.28 (0.66)	3.079	0.002**
死観尺度				
別離、挫折	1.88 (0.95)	1.97 (0.85)	0.671	0.251
希望的受容	3.14 (1.15)	3.73 (1.03)	3.635	0.000**
未知と終焉	3.73 (1.15)	3.83 (1.06)	0.580	0.281

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 3-18. 自分の死の意識とキリスト者の成熟度、死観尺度、死に対する意識調査 (2)

	低意識群(n=60)	高意識群(n=163)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
自分の病名告知	4.42 (0.95)	4.60 (0.88)	1.236	0.109
自分の余命宣告	4.24 (0.97)	4.52 (0.89)	2.004	0.023*
自分の延命措置	1.98 (1.27)	1.88 (1.11)	0.569	0.285
自分の積極的安楽死	3.20 (1.45)	3.48 (1.29)	1.390	0.083
家族の病名告知	3.31 (1.24)	3.53 (1.04)	1.334	0.092
家族の余命宣告	3.10 (1.27)	3.12 (1.10)	0.131	0.448
家族の延命措置	2.73 (1.34)	2.91 (1.18)	0.961	0.169
家族の積極的安楽死	3.17 (1.37)	3.25 (1.08)	0.393*	0.348
自分の脳死は「死」である	3.88 (1.35)	3.84 (1.28)	0.207	0.418
自分がドナーになってもよい	3.15 (1.45)	3.57 (1.33)	2.044	0.021*
家族の脳死は「死」である	3.24 (1.42)	3.17 (1.26)	0.381	0.352
家族がドナーになってもよい	2.61 (1.29)	2.99 (1.26)	1.994	0.024*
会話で「死」が話題になる	2.32 (1.13)	3.02 (1.11)	4.177	0.000**
会話で「天国、復活」が話題になる	2.77 (1.25)	3.12 (1.09)	2.042	0.021*
クリスチャンの葬儀は希望を感じる	3.98 (1.03)	4.43 (0.79)	3.068**	0.001**
死ぬ準備ができていると思う	2.60 (1.18)	3.15 (1.17)	3.117	0.001**
明日死んでもいいと思う	2.75 (1.41)	2.69 (1.29)	0.314	0.377
クリスチャン前後の考え方の変化	3.88 (1.07)	4.03 (1.15)	0.885	0.189

* $p<.05$ ** $p<.01$

自分の死を意識することの多い高意識群は、キリスト者の成熟度の尺度とした I [t(79.19)=4.148, $p<.001$]、 “自他共存” [t(219)=3.709, $p<.001$]、 “こだわりのなさ” [t(219)=3.079, $p<.01$]のいずれにおいても、低意識群より有意に高かった。また死観尺度の “希望的受容” [t(220)=3.635, $p<.001$]においても高かった。

また、「どのような病名であっても告知してほしい」という項目には有意な差が見られなかったが、「どんなに短くても余命宣告してほしい」では、高意識群が有意に高かった

[t(220)=2.004, $p<.05$]

さらに、「自分あるいは家族の脳死は死であると思う」という項目には差がなかったが、「脳死になった場合、臓器移植のドナーになってもよい」に対しては「自分」の場合も [t(219)=2.044, $p<.05$]、「家族」の場合も [t(220)=1.994, $p<.05$]、高意識群の方が高かった。

他には、「クリスチャンの会話で死がよく話題になる」 [t(220)=4.177, $p<.001$]、「クリスチャンの会話で、天国、復活がよく話題になる」 [t(219)=2.042, $p<.05$]、「クリスチャンのお葬儀には、希望が感じられる」 [t(85.92)=3.068, $p<.01$]、「自分は死ぬ準備ができていると思う」 [t(221)=3.117, $p<.01$]という項目で、いずれも成熟群の方が有意に高いという結果であった。

(2) 死の受容度

「自分は死ぬ準備ができていると思う」「自分は明日死んでもいいと思う」のいずれに対しても4か5（まあそう思う、そう思う）と答え、自分の死を受容していると思われる受容群と、1か2（そう思わない、あまりそう思わない）と答えた未受容群とに分け、t検定を行った。未受容群は平均年齢52.97歳（SD=16.42）、受容群は63.58歳（SD=14.20）であった。検定の結果は表3-19のとおりである。

表3-19. 死の受容とキリスト者の成熟度、死観尺度、死に対する意識調査（1）

	未受容群(n=60)	受容群(n=163)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P値
キリスト者の成熟度				
I	4.01 (0.57)	4.46 (0.42)	5.554*	0.000**
自他共存	3.72 (0.75)	4.18 (0.48)	4.527**	0.000**
こだわりのなさ	2.98 (0.76)	3.41 (0.68)	3.583	0.000**
死観尺度				
別離、挫折	2.16 (1.04)	1.72 (0.76)	3.011**	0.002**
希望的受容	3.25 (1.03)	3.94 (1.17)	3.793	0.000**
未知と終焉	3.94 (1.07)	3.40 (1.16)	2.985	0.002**

* $p<.05$ ** $p<.01$

表 3-19. 死の受容とキリスト者の成熟度、死観尺度、死に対する意識調査 (2)

	未受容群(n=60)	受容群(n=163)		
	M (SD)	M (SD)	t値	P 値
死を意識するのは？				
事故や事件の報道	3.55 (1.33)	3.65 (1.42)	0.436	0.332
知人、友人の葬儀	4.07 (1.09)	4.32 (1.09)	1.383	0.085
家族の入院	3.85 (1.20)	3.84 (1.23)	0.058	0.477
自分の入院	4.23 (1.09)	4.09 (1.26)	0.649	0.259
家族の看取り	4.23 (1.10)	4.31 (1.19)	0.396	0.346
誰かと「死」について話す	3.80 (1.16)	4.32 (1.09)	2.771	0.003 **
法事や記念会	3.23 (1.32)	3.84 (1.25)	2.884	0.002 **
日常生活のふとしたとき	3.38 (1.28)	3.95 (1.26)	2.733	0.004 **
自分の病名告知	4.33 (0.99)	4.78 (0.60)	3.535**	0.001 **
自分の余命宣告	4.13 (1.02)	4.71 (0.72)	4.097**	0.000 **
自分の延命措置を希望	2.31 (1.23)	1.42 (0.83)	5.360**	0.000 **
自分の積極的安楽死を希望	3.08 (1.34)	3.48 (1.49)	1.711	0.046 *
家族の病名告知	3.39 (1.08)	3.69 (1.13)	1.673	0.048 *
家族の余命宣告	2.88 (1.11)	3.45 (1.26)	2.904	0.002 **
家族の延命措置を希望	3.09 (1.29)	2.50 (1.15)	2.912	0.002 **
家族の積極的安楽死を希望	2.95 (1.21)	3.39 (1.30)	2.119	0.018 *
自分の脳死は「死」である	3.59 (1.40)	4.28 (1.24)	3.116	0.001 **
自分がドナーになってもよい	3.31 (1.34)	3.69 (1.49)	1.610	0.005
家族の脳死は「死」である	2.89 (1.34)	3.59 (1.31)	3.194	0.001 **
家族がドナーになってもよい	2.72 (1.25)	3.22 (1.31)	2.369	0.0096 **
会話で「死」が話題になる	2.47 (1.10)	3.09 (1.22)	3.305	0.001 **
会話で「天国、復活」が話題になる	2.78 (1.07)	3.34 (1.22)	3.003	0.002 **
クリスチャンの葬儀は希望を感じる	4.01 (1.03)	4.59 (0.70)	4.107**	0.000 **
クリスチャン前後の考え方の変化	3.79 (1.21)	4.45 (1.00)	3.481	0.000 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

受容群は、キリスト者の成熟度の尺度とした I [t(147.82)=5.554, $p<.001$]、 “自他共存” [t(143.86)=4.527, $p<.001$]、 “こだわりのなさ” [t(148)=3.583, $p<.001$]のいずれにおいても未受容群より有意に高かった。

また死観尺度のすべての下位尺度においても差があり、未受容群は “他者との別離、挫折” [t(147.72)=-3.011, $p<.01$]、 “未知と終焉” [t(148)=-2.985, $p<.01$]において高く、受容群は “希望的受容” [t(148)=3.793, $p<.001$]において高かった。

「どのようなときに自分の死を意識するか」という質問に対して、受容群が「誰かと “死” について話しているとき」 [t(144)=2.771, $p<.01$]、 「法事や記念会に参列したり、墓参りをしたとき」 [t(146)=2.884, $p<.01$]、 「日常生活の中で、ふとしたとき」 [t(147)=2.733, $p<.01$] に関して、有意に高いという結果であった。

さらに、自分または家族への病名告知、余命宣告、延命措置、積極的安楽死に関しては、すべてにおいて有意差が見られた。受容群が有意に高かったのは、「自分の病名告知」 [t(142.94)=3.535, $p<.01$]、 「自分の余命宣告」 [t(148.53)=4.097, $p<.001$]、 「自分の積極的安楽死」 [t(149)=1.711, $p<.005$]、 「家族の病名告知」 [t(148)=1.673, $p<.05$]、 「家族の余命宣告」 [t(149)=2.904, $p<.01$]、 「家族の積極的安楽死」 [t(148)=2.119, $p<.05$]であった。未受容群が高かったのは「自分の延命措置」 [t(147.18)=-5.360, $p<.01$]と「家族の延命措置」 [t(148)=-2.912, $p<.01$]であった。

脳死と臓器移植に関しては、「自分が脳死になった場合、それは死である」 [t(149)=3.116, $p<.01$]、 「家族が脳死になった場合、それは死である」 [t(147)=3.194, $p<.01$]、 「家族が脳死になった場合、臓器移植のドナーになってもよい」 [t(147)=2.369, $p<.01$]の3つの項目に関して、受容群が有意に高いという結果であった。

その他には、「クリスチャンの会話で死がよく話題になる」 [t(150)=3.305, $p<.01$]、 「クリスチャンの会話で、天国、復活がよく話題になる」 [t(149)=3.003, $p<.01$]、 「クリスチャンのお葬儀には、希望が感じられる」 [t(147.91)=4.107, $p<.001$]、 「クリスチャンになる前と後では死に対する考え方が変わった」 [t(142)=3.481, $p<.001$]という項目で、いずれも受容群の方が有意に高いという結果であった。

第6節 考察2

1. 内発的・外発的宗教性と死生観

内発的・外発的宗教性による、死観尺度と生き方尺度のt検定から、宗教性による死観と生き方の違いが明らかになった。

まずIの高い人、すなわち信仰が内面化され、信仰に基づいて生きようとする人ほど、“自他共存”、“こだわりのなさ”が両方とも高かった。“自他共存”と“こだわりのなさ”は、調査結果1において相関関係にあることも確認されており、この三つの尺度はお互いに関連性があるといえる。したがって、本研究において、これらをキリスト者の成熟度の尺度（内発的・外発的宗教尺度のIを神との調和した関係、生き方尺度の“自他共存”を他者との調和した関係、生き方尺度の“こだわりのなさ”を自分との調和した関係）として利用することに、ある程度の妥当性が得られたと考えられるであろう。

死観尺度に関しては、Iの高い人は、死を希望的に受容しており、“他者との別離、挫折”、“未知と終焉”といった否定的な捉え方をしない傾向にあった。

Epの高い人は、過去や失敗にこだわる傾向や、他者との別離や挫折など、死に対する否定的なイメージが強く、宗教、信仰によって、あるいは死に希望を見出すことで、慰めや安心感などを得ようとするのではないかと考えられる。

Emの高い人、すなわち倫理道徳的なツールとして宗教を捉える人は、死が“他者との別離、挫折”であり、“未知と終焉”であると否定的に捉えるからこそ、教義的な「かくあるべき」という考えから、死を希望的に受容しようとするのではないかと考えられる。

最後に、Esの高い人は宗教や礼拝に人との出会いや関わりを求め、人とつながることを重視する人であり、死を“他者との別離、挫折”という側面から捉える傾向にあった。

キリスト者の生き方尺度による死観尺度の検定からも、キリスト者の生き方によって死観に違いがあることが明らかになった。

まず、“自他共存”の高い人、すなわち自分と他者を大切にする人が、死を“他者との別離、挫折”として捉えていないということは注目に値する。これは死の希望的受容と関係しており、キリスト者が「この世での別れは永遠の別れではない」と信じているからであろう。また、これらの人々は、内発的宗教性が高く、神との関係をも重視している姿勢がうかがえた。

“自己の向上”が高く、自分自身の向上を目指す人は、内発的宗教性も高いが倫理的な外

発性も高く、死を希望的に捉えながらも、死が“終わり”であり、自己の可能性を奪うものであるという否定的な捉え方も併せ持っていた。

“こだわりのなさ”が低く、過去や失敗にとらわれやすい人は、宗教を個人の生き方の指針や倫理的判断を仰ぐ材料として捉える傾向にあり、死を“他者との別離、挫折”と捉えていた。逆に、“こだわりのなさ”が高い、過去や失敗に対してこだわりのない人は内発的宗教性が高い傾向にあった。

以上のことから、内発的・外発的宗教性と生き方、および死観は密接に関係しており、内発的宗教性の高い人は、死を肯定的に捉えつつ、過去や失敗にとらわれずに、自分と他者を大切にするなど積極的に生きる姿勢を示しているが、外発的宗教性が高い人は、過去や失敗にこだわるの傾向があったり、死を否定的に捉えていたり、あるいは死に対して両価的な感情を持っていたりするなど、生と死の両方に対して肯定的で積極的であるとはいえないことが示唆された。

2. キリスト者の成熟度と死生観

次に「神、他者、自分との調和した関係を築いている度合い」をキリスト者の成熟度として、死生観との関係を検討したところ、成熟度によって違いが見られた。

キリスト者として成熟した人は、死を他者との別離や挫折であるとは捉えておらず、より希望的に受け止めていた。また生きることにしても絶望感が低く、自尊感情が高く、他人との比較よりも自分なりに精一杯生きていきたいという態度を示している。すなわち、成熟したキリスト者は、より健全に発達した死生観を持っていることが示唆された。ただし、死を“未知と終焉”として捉える点では、成熟度による違いは見られなかった。

成熟した人の死に対する意識を調査した結果からは、死を積極的に受け止めるための要素として、普段から会話の中で“死”や“天国”の話題があり、日常生活の中でも死を意識すること、あるいは法事や記念会などの時にも自分の死を意識すること、などが挙げられる。

また、成熟した人は、大病の場合には余命宣告を受け、自分に残されている時間を知りたいという思いが、より強いことがうかがえた。

今回の調査では、キリスト者の成熟度は年齢と対応しており、高齢者ほど成熟度が高く、

若い人ほど成熟度が低いという結果であった。一方、大学生を対象とした調査Ⅰ、Ⅱでは、同年代の中でもキリスト者と無宗教者の間に相違が見られた。したがって、年齢は成熟度を上げる一つの要素であると考えられるが、どの程度の影響があるのかを知るためには、さらに年齢と成熟度の関係に関する調査研究が期待される。

3. 死の意識度、受容度とキリスト者の成熟度

検定の結果からは、自分の死を意識している人ほど、キリスト者としての成熟度が高く、死に対して希望を持っているということが明らかになった。また、「自分は死ぬ準備が出来ていると思う。明日死んでもいい」と答えた人も、キリスト者としての成熟度が高く、死に対する希望を持っており、さらに死を“他者との別離、挫折”あるいは“未知と終焉”といった否定的な捉え方をしていない、という結果であった。

これらの検定結果は、成熟度による検定結果と同じような傾向を示しており、よって「自分がいつかは死ぬ存在である」という自分自身の命の有限性を意識していること、そして「自分の命がいつ終わってもよい」と死を受け入れていることが、キリスト者として成熟することと関係していると考えられる。

一方で、キリスト者の成熟度ではなく、自分の死の意識と死の受容の度合いで有意差が見られた項目がいくつかあった。キリスト者の成熟度から見たときには、「自分の余命宣告」でしか差が見られなかったのに対し、自分の死の意識が高い人とそうではない人で有意差が見られたのは、「臓器移植のドナーになること」に関する項目であった。すなわち、自分の死を意識している人の方が意識していない人よりも、自分自身と家族が臓器移植のドナーになってもよいと考える傾向にあった。これは、自分の死を自覚しているからこそ、死後に臓器移植のドナーになる事に関して意識が高いという結果であり、それは必ずしもキリスト者の成熟度とは関係のないことであると考えられる。

また、死の受容の度合いが高い人と低い人の有意差は、病名告知、延命措置、積極的安楽死に対する考え方に現れた。すなわち、自分自身がドナーになることに関しては、死の受容度による差は見られなかったが、そのほかの点では、死を受け入れている人ほど、自分も家族に関しても、病名告知を希望し、延命措置は望まず、耐え難い苦痛があるときには積極的安楽死を希望するという結果であった。つまり、自分自身および家族の病気や生命の期限、死に対する態度という点では、キリスト者として成熟しているかどうかではな

く、死を受容しているかどうかに関係していると考えられる。

なお、本調査では、キリスト者を対象とした調査結果に限定されているため、一般層との比較検定は行っていない。今後、年齢と成熟度の関係を調査すると共に、宗教に関わらず、死の意識度や受容度によって、余命宣告、延命措置、積極的安楽死、脳死、臓器提供のドナーになることなどに関して差が出るかどうかを検証する研究も期待される。

第7節 キリスト者の死生観に関するまとめと今後の課題

“生”と“死”は、キリスト教の教義から決して切り離すことのできない主題であり、聖書にはキリスト者がどう生き、どう死ぬべきかが書かれている。今回の調査研究の結果から、キリスト教信仰を持つことが死に対する否定的なイメージを減らし、死を肯定的に捉え、生きることに對しても積極的であろうとする姿勢と関連していることがわかった。

調査Ⅲの質問項目の一つに「(あなたは) クリスマンになって、死に対する考え方が変わったと思いますか?」という設問とその内容の自由記述欄を設けた。その項目を見ると、有効回答数 295 のうち、「変わらなかった」「あまり変わらなかった」と回答したのは 32 名 (10.8%)、「どちらともいえない」56 名 (19.0%)、「まあ変わった」「変わった」と回答したのは 207 名 (70.2%) で、7 割の人がキリスト者になったことで死生観が変わったと回答していた。

「変わらなかった」「あまり変わらなかった」あるいは、「どちらともいえない」と回答した人々の中には、子どものときからキリスト教に慣れ親しんでいたため、キリスト者になる前と後の差がないと回答している人が多かった。

「子どもの頃から教会に通っていたので、死に対する考え方は昔からあまり変わっていない。」(36 歳女性、信仰歴 21~30 年)

「若いときにクリスマンになったので、死に対することは考えなかったと思う。」(68 歳男性、信仰歴 30 年以上)

「クリスマンホームで育ったので、考え方が変わるということは特にはないのですが、死に対する恐れはないです。」(49 歳女性、信仰歴 30 年以上)

このような人々は、キリスト教的な死生観しか知らない、あるいはそれを当たり前のものとして受け止めてきたので、自分の信仰が死生観には影響したという回答にはならなかった。ここに分類される人々が調査対象者の中にどの程度いたのかを正確に知ることはで

きないが、このような人々を除いた場合には、信仰が死生観に影響を与えたという人の割合は7割よりもさらに増加する。

一方で、「変わらなかった」「あまり変わらなかった」あるいは、「どちらともいえない」と回答した人々の中には、キリスト者になったからといって死に対して楽観的になったわけではないと述べた人々もいた。

「キリストにある復活の希望は持てたが、自分に昔からある死への恐れは解消的できていない。」(54歳男性、信仰歴11~20年)

「以前は、死はまったくの終わりで暗黒のイメージでしたが、信仰によって、一筋の光が遠くにさしているような気持ちを持つことができました。しかしいまだに死という仕事は永遠のなぞです。」(48歳女性、信仰歴21~30年)

「親しい友(クリスチャン)が亡くなったときもただ悲しいだけで終わらず、再会の希望を持てたのは感謝でした。ただ自身の死は苦しいのかと不安になるときが今でもあります。信仰歴は長いのに恥ずかしいですが。」(59歳女性、信仰歴30年以上)

死は未知のものであり、痛みや苦しみを伴うものと考えられ、天国の希望があったとしても、できれば避けたいものとするのは、自然なことであるように思われる。これは、Ray & Najman (1974)が、死の受容と死の不安は矛盾せず、死を受容していてもなお死に対する不安を持っていることがあると示していることに通じるであろう。それは、キリスト者といえども、例外ではない。

「まあ変わった」「変わった」と回答した人々の自由記述は、言葉に違いはあるが、いずれも信仰を持ったことで、死を肯定的に受け止めることができるようになったという回答であった。以下に、そのいくつかを簡単に紹介する。

多かった回答は、信仰を持ってから死に対する恐怖が軽減した、あるいは安心感が得られたという内容の記述であった。

「死に対する恐怖心がなくなった。死を積極的に捉えることができるようになった。」(61歳男性、信仰歴30年以上)

「恐れ、不安が少なくなった。」(65歳女性、信仰歴21~30年)

「今まではとても死が怖いと思っていた。でもクリスチャンになってから、怖さも不安もあるが、それをすべて抱えて安心できる神様が、いつもどんなときもそばにいてくださ

る。安心感がもてるようになった。」(44歳男性、信仰歴6~10年)

ある人々は、キリスト者になる以前は、“死”を終わり(無)と捉えていたのが、キリスト者になってからは、その先も続きがある、と考えるようになったと回答していた。

「今までは死んだらそれですべてが終わりだと考えていて、だからまず今を楽しく生きようと思っていたが、今は死後の永遠の命への希望を持ってその準備をしようと思って生きている。」(26歳、男性、信仰歴5年未満)

「肉体が減ったらそれで終わりではないという考え方に変わった。だから生かされている間は一生懸命生きよう、神様の御心にかなった生き方をしようと思うようになった。死が怖くないといえようそになるが、死の向こう側に希望があることを信じている。」(52歳女性、信仰歴30年以上)

「死は終わりではなく通過点であることを知るようになった。」(43歳女性、信仰歴30年以上)

そして、“死”とともに“生”にも言及した回答もいくつか見られた。

「死は終わりではなく、将来的に新天地への希望につながることを教えられている。平安な思いと日常を生きる意味が与えられたと思う。」(55歳女性、信仰歴30年以上)

「私自身がいまこうしていられるのは神様のおかげ。人との出会いも神様が決めたもので大切にしなければいけない。時間も命も大切にしなければいけない。」(21歳男性、信仰歴11~20年)

「聖書を通し、新しい命に生まれるのだと希望を持つことで、今を生きる糧になっているように思います。」(48歳男性、信仰歴30年以上)

これらの人々は、“死”と“生”を対立するもの、対極にあるものという概念ではなく、連続的なものとして捉えているといえるだろう。

そして、キリスト教の教義でも重要な部分を占める、「天国」、「永遠の命」、「復活」といったことに触れた記述も多く見られた。

「クリスチャンにとって死は終わりではなく天国への門。だからクリスチャンの死には、悲しみの中にも希望がある。」(57歳女性、信仰歴30年以上)

「以前は死んだら無になると思っていました。しかし、クリスチャンになってからは死んだらイエス様の憐れみによって天国に入れていただけ、永遠の命が与えられると信じて

います。」(58歳女性、信仰歴30年以上)

「以前は、死は暗黒の世界だと思っていたが、クリスチャンになってからは、復活して主の備えられた場所に住むことだと考える」(66歳男性、信仰歴30年以上)

あるいは、天国で先に亡くなった人と再会する、あるいは神と交わりを持てることを楽しみにしているという記述もあった。

「復活の望みがあり、愛する人、主との再会。」(23歳男性、信仰歴11～20年)

「死ぬのが怖かったが、天国を信じるようになってから、死んで行く場所があると思えるようになった。死んだ父母や身近な人に会える楽しみもある。」(56歳女性、信仰歴30年以上)

「死は天国への出発点であり、主にお目にかかれることを最も楽しく思う日々です。」(81歳女性、信仰歴30年以上)

このように、キリスト教の信仰を持つことで、死生観が変わり、生き方にも影響を与えたと回答した人が多くいた。しかし、キリスト者であるということは、自らの死を受け止めて、生を十分に生きていくための「初めの一步」であり、そこが終着点というわけではない。そこからさらにキリスト者としての成長を重ね、神、他者、自分との良い関係を築き、成熟していくことで、“死”をいわずらに恐れるのではなく、自らの有限性を意識した上で、与えられている“生”を生き抜くという「質の高い生き方」をすることができるのである。あるいは逆の言い方をすれば、自分の有限性を知り、受け入れることで、キリスト者として成熟していくことができるのである。

成熟のためには年齢も大きな要素であるが、すべてではない。むしろ自分の有限性をさまざまな場面で意識することや、自分がいつ死んでもいいように心の準備を重ねていくことが重要である。そのことがキリスト者としての「質の高い生き方」につながるといえよう。

なお、本研究は量的研究であったが、今後、キリスト者となってどのように死生観が変わったかに関する内容的な分析、質的研究が望まれる。また、この調査研究で用いたキリスト者の成熟度の心理尺度は、神と他者と自分との調和した関係という側面から測ったに過ぎず、完全なものではない。今後の質的研究のためにも、キリスト者の成熟度を多面的に計る心理尺度の開発が望まれる。

また今回の調査結果では、キリスト者として成熟した人ほど、丹下ら (2000) のいう「心理社会的に発達している人」すなわち「生きることに對して積極的でありつつ、死に對して肯定的な見方を持っている人」であるという結果が得られた。しかし、この場合の心理社会的な発達度合いとキリスト者の成熟度との関連性、つまり、信仰の成熟と心理社会的な発達の間になんらかの因果関係があるのか、信仰が成熟している人ほど心理社会的に発達しているのか、あるいは心理社会的に発達している人ほど信仰が成熟しているのか、といったことは明らかにされていない。

Allport (1950) は、*The individual and his religion* (和訳『個人と宗教』) の中で、成熟したパーソナリティは必ずしも宗教的ということではないが、常に何らかの統一された人生哲学を持っていると述べている。キリスト者の場合は、その統一された人生哲学はキリスト教に基づいたものとなるであろうが、今後は、キリスト者の成熟度を心理社会的な発達という側面からも研究していくことが望まれる。

さらに、心理社会的に発達している人で信仰を持っていない人や他宗教の信仰を持っている人の信仰成熟度などを研究することで、キリスト者の成熟度に関する研究もさらに進められていくものと思われる。

終章 キリスト者の信仰と死生観

第1節 信仰が死生観に与える影響

1. 信仰と死生観

本研究は、キリスト者のもつ信仰が、死生観にどのように影響しているのかを量的に調査し、キリスト者の信仰の成熟度と死生観の関連性について検討するものである。そのために3つの質問紙調査を行った。

その結果、大学生を調査対象とした調査ⅠとⅡにおいては、男女差と共に、宗教の有無によって死観尺度、希死願望、生き方尺度に差が現れた。その結果を見ていくと、各群の特徴や傾向が現れており、宗教が死生観に影響を与えるものであることが確認された。さらに宗教（本調査では、仏教とキリスト教）が、健全に発達した死生観、すなわち「死をただ否定的に捉えるのではなく、肯定的に受け止めつつ、死があるからこそ生を大切にするという、積極的に自分の生を全うする態度につながる死生観」の形成に、何らかの役割を果たしていること示唆された。

それをふまえて、調査Ⅲは、キリスト者のもつ信仰が、死生観にどのように影響しているのか、キリスト者の成熟度と死生観の関連性を検定、検討する目的で行われた。その結果、キリスト教信仰はその人の死生観に影響を与えるものであること、またキリスト者として成熟した人、すなわち、神、他者、自分に対して調和した関係を築いている人は、死を肯定的に捉えつつ、自分の生に対しても積極的にこれを全うしようとする、より健全に発達した死生観を持つことが示唆された。さらに、自分の死の意識度と受容度という点から見ても、成熟したキリスト者は自分の命の有限性を意識しており、自分が死ぬという事実を受け入れていることが示唆された。

2. 死生観の形成

では、信仰は死生観の形成にどのような影響を与えているのだろうか。それはキリスト者が、自分が有限の存在であることを意識することと関係しているように思われる。斉藤(2011)は、死生観の形成について、「死生観は日常的に問われ意識されることはないでしょう。人の一生や歴史を振り返っても、順調なときや繁栄の時代は人生を深く考えません。ところが皮肉なことに、個人も時代もその危機と困難な状況の中で深く生と死を思いめぐらせます。そのとき、人は時代や民族を問わず、自らの挫折や喪失体験を通して、それぞれ固有な死生観を形成してゆきます。誰しも喪失体験、挫折体験から生死を越えてより確

かな価値観、あるいは人間の弱さを支え、生きる勇気を与えてくれる超越的な存在を求め
るものです」(p.99)と述べている。

「自分が何のために生きるのか」「死んだらどうなるのか」そういった問いに対する答
えを求めて教会に足を運ぶ人々も少なくない。実際、75歳の女性(信仰歴30年以上)は、
調査質問紙に「私の入信のきっかけ(20代前半)が母の死でした。死への問いと答えを求
めてでした。」と記述していた。そういう点からも、信仰と“生と死”をどう捉えるかと
いう死生観は、密接に関係しているのであろう。

高齢者の死への態度に影響を与える要因を調査した中木(2011)は、宗教は死後の世界を
信じることで死の受容に対処する信念の枠組みを提供していると考えられ、有信仰者は死
後の世界を信じることによって肯定的に死の受容をしているのではないかと推察した。そ
のように考えるとすれば、キリスト教の示す死の受容に対処する信念枠組みとは、斉藤
(2011)が述べているように、「キリスト教的な死の理解は、死と向き合いつつもさらに愛と
信仰、さらに希望に生きることです。ただ死に向かって投げ出された存在ではないのです。
生きるにも死ぬにも、人間はキリストによって受け止められている存在であることこそ究
極の慰めなのです」(p.117)ということになるであろう。また、生に対しては、大柴(2011)
は、私たちが生きる根拠は自分自身の中には見出せず神との関係において与えられるのだ
と述べている。このように、キリスト者は、“死は終わりではなく、苦難や絶望ではない。
神からの希望があり、その神との関係の中で今の生を生きていくのである”という、特有
の死生観を持って生きる者といえるであろう。キリスト者にとって、生は死で終わるもの
ではなく、その先にある永遠のいのちに続くものであり、神との関係は今も死んだ後も永
続的に続くのであるから、いたずらに死を恐れる必要はないのである。

本調査でも、金児が日本人対象に尺度構成した死観尺度とキリスト者対象に尺度構成し
た死観尺度では、質問項目がまったく違う下位尺度に分類されており、キリスト者は死を
必ずしも“試練”や“苦難”とは捉えていないことが示唆された。また、多くの調査回答
者が、キリスト者になったことで「希望」が与えられたと述べていた。それは「永遠の命
の希望」「天国へ行く希望」「死に対しての希望」「復活の希望」「再会の希望」「生き
ることへの希望」など言葉はさまざまであったが、希望を持って歩むということがキリス
ト者の特徴であるといえるであろう。

ただし、繰り返しになるが、天国への希望があったとしても、死やそれに伴う苦痛を恐

れることはなんら矛盾することではない。そこを忘れ、死を恐れるのは信仰が足りないからだというような短絡的な結論を導き出してはならない。熊澤 (2005) は、長年、信仰生活を送った人々は、死に直面しても、うろたえたり恐れたりして気持ちを乱すことなく、落ち着いて最後を迎えるものだと多くの人は考えるが、そのような願いと期待の背後には、いつの間にか信仰が行為義認とすり変わっている場合があるのではないかと警告している。そのような危険性があることは、注意をしておかなければならないだろう。

第2節 キリスト者としての成熟

1. 信仰の成熟と死生観

聖書にはキリスト者がどう生き、どう死ぬべきかが書かれており、キリスト教信仰を“生”と“死”抜きに語ることはできない。しかし、その教えを理解することと自らの死を自覚することは別のものであり、信仰を持つことと自分の死を受容することは別のものである。キリスト者にとって、信仰を告白することは出発点であり、終着点ではない。そこから成熟すること、すなわち「神、他者、そして自分との関係を修復し、より良い関係を築いていくという、神が本来造られた人間の姿を保ちつつ、自らに与えられているこの世での時間を意識し、死とその先にある永遠の命に向かって歩む」ことが重要となる。つまり、信仰を告白したか、していないか、ではなく、信仰に何を求めどのように生きようとしているかという姿勢が大切なのである。

賀来 (2011) は、自分の知恵では理解できない不可知なものやあいまいさの残るものを受け入れ、かつ乗り越えるためには、“包括的かつ統合的な生き方”が求められ、「自己中心的で自分が主役となる」外発的信仰ではなく、「神中心で自分が主役とならない」内発的信仰が必要である、と述べている。人間の死、あるいは死後の世界は、まさに不可知なものであり、私たちがそれを受け入れて乗り越えるためには内発的信仰が必要なものであり、どのように生きようとしているかが大きく関わってくるのである。

本調査でも、内発的宗教性の高い人と外発的宗教性の高い人では死生観に違いがあり、どのような生き方をしているかによっても相違が見られた。すなわち、内発的宗教性の高い人は、神との関係を大切にし、自分と他者を大切にする生き方をしており、死を肯定的に捉えつつ、過去や失敗にとらわれずに積極的に生きる姿勢を示していた。これらの人々が死を希望的に受容しており、“他者との別離、挫折”、“未知と終焉”といった否定的な捉え方をしない傾向にあったのは、死の希望的受容と関係しており、キリスト者が「この世

での別れは永遠の別れではない」と信じているからだと考えられる。

一方、外発的宗教性の中でも“個人的外発性”の高い人は、過去や失敗にこだわる傾向や、他者との別離や挫折など、死に対する否定的なイメージを持つ傾向にあった。これらの人々は、自分ではどうにもできないこと、例えば“死”や過去の失敗などに対処するために、「何かにすがりたい」という思いを持っているようにも見える。ゆえに、宗教、信仰によって、あるいは死に希望を見出すことで、慰めや安心感などを得ようとするのではないかと考えられた。

外発的宗教性の中で“倫理的外発性”の高い人、すなわち宗教を倫理道徳的なツールとしている人にとっては、死は他者との別離、挫折であり、未知と終焉であるからこそ、教義的な捉え方で死を希望的に受容しようとするのではないかと推測された。これらの人々は、信仰を自らの生き方の指針、あるいは倫理的な判断の基準として信仰を捉え、それに基づいて生きようとしていると考えられる。

また生き方尺度の“自己の向上”が高く、自分自身の向上を目指す人は、“内発性”も高いが“倫理的外発性”も高く、死を希望的に捉えながらも、死が“終わり”であり、自己の可能性を奪うものであるという否定的な捉え方も併せ持ち、死に対して両価的な感情を持っていた。

外発的宗教性の中でも“社会的な外発性”の高い人は、宗教や礼拝に人との出会いや関わりを求める人であり、死を“他者との別離、挫折”という側面から捉える傾向にあった。これらの人々は、人とつながっていることを重要視しており、“死”によってそのつながりが切れてしまうように思われるのだと考えられる。

このように内発的・外発的宗教性と生き方、および死観は密接に関係しており、信仰の有無だけではなく、そこからどのように、その人が自分の信仰を生きようとしているかが重要である。内発的宗教性の高い人は、神、自分、他者との関係を大切にし、死も生も肯定的に受け止めていたが、外発的宗教性が高い人は、過去や失敗にこだわる傾向があったり、死を否定的に捉えていたり、あるいは死に対して両価的な感情を持っていたりするなど、生と死の両方に対して肯定的で積極的であるとはいえなかった。

これらのことから、“内発性”“自他共存”“こだわりのなさ”というキリスト者の成熟度の指標が高かった人、すなわちキリスト者として成熟していると考えられる人は、より健全な死生観を持っており、「神、他者、そして自分との関係を修復し、より良い関係を築い

ていくという、神が本来造られた人間の姿を保ちつつ、自らに与えられているこの世での時間を意識し、死とその先にある永遠の命に向かって歩む」生き方をしているということができる。神と自分と他者を大切に生きていくことが、自らの死を意識し、受け入れていくことにつながり、信仰の成熟は、より健全に発達した死生観につながっていくのである。

73歳の女性（信仰歴30年以上）は、キリスト者になって「死を見据えての生を考えるようになった」と回答している。あるいは、21歳男性（信仰歴11～20年）は「私自身がまこうしてられるのは神様のおかげ。人との出会いも神様が決めたもので大切にしなければいけない。時間も命も大切にしなければいけない。」と記述している。このように、自分自身の命の有限性を意識し、「自分の命がいつ終わってもよい」と死を受け入れ、“死を見据えた生き方” “自分に与えられたものを大切に生きる生き方” をすることがキリスト者にとって重要なのではないだろうか。

2. 成熟を促すもの

それでは、信仰者として成熟し、自らの死を意識して受け入れつつ、積極的に生きていくために必要なことは何であろうか。成熟のためには年齢も大きな要素であるが、それ以外にも成熟を促す要因があると考えられる。

中木（2011）の高齢者の死への態度と状況要因に関する研究では、死について「ほとんどいつも考える」群と「まったく考えない」群が死の恐怖が低かったという結果を報告している。そして、「ほとんどいつも考える」群は自分自身の死に対して直面化できているので死の恐怖が低く、逆に「まったく考えない」群は死について考えることを避けることにより、死の恐怖を低めているのではないだろうかと推察している。しかし、死について考えることを避けるというのは、自分の有限性を受け入れているということではない。むしろ自分の有限性を直視せず、自分の命は無限であるかのように振舞っているものであり、それは本来キリスト者が目指すべき姿ではない。つまり、自らの死を受け入れ、死に対する恐怖心にとどまることなく、今与えられている生を精一杯生きるためには、死について考え、語る事が大切だと考えられる。

本調査では、死の意識の高い人、死の受容がなされている人はそうではない人たちに比べて、「クリスチャンの会話で死、天国、復活がよく話題になる」と回答しており、死を自分のものとして意識することや受容していくために、“死”について話すことの重要性がうかがえる。あるいは、キリスト者の成熟度が高い人は、普段から会話の中で“死”や“天

国”の話題があり、日常生活の中でも死を意識すること、あるいは法事や記念会などの時にも自分の死を意識する傾向にあった。つまり、“死”について考える機会や話す機会が大切なのである。

であるとすれば、礼拝の説教（メッセージ）やキリスト者の会話の中で、もっと“死”や“天国”が話題にあげられてもいいのではないだろうか。普段の生活の中では、私たちは“死”について語ることはほとんどない。むしろ、“死”は語るものがタブー視されている話題であろう。しかし、キリスト者にとって、“生”と“死”は正反対のものではなく、“死”を語ることは“生”を語ることであり、“キリスト者の生き方”を語ることである。とすれば、教会の中やキリスト者の交わりの中では、“死”について語る機会があつていいはずである。キリスト者にとっては“死”を話題にすることはタブーではなく、むしろ声を大にして語るべきことなのではないだろうか。

キリスト教会における葬儀や召天者の記念会も、キリスト者が死を身近に感じる機会である。そこは、先に天に召された故人をしのぶと共に、自らの死について考え、死後の復活、永遠の命の希望を再確認する場でもある。55歳女性（信仰歴21～30年）は、「日々主を賛美し、礼拝できるという、具体的な天国のイメージを体験することで死への不安感が薄らいた」と回答している。毎週の礼拝、あるいは葬儀や記念会などの特別礼拝の中で、キリスト者が天国での礼拝を疑似体験することも“死”の受容を促すものである。

あるいは教会の中で、自分の死の準備をすることについて、どのくらい語られているだろうか。遺言の書き方、身辺整理の仕方、葬儀や埋葬方法の希望など、信徒の教育的プログラムの中にそのようなテーマを取り入れ、積極的に死の準備を考える機会を設けることも可能であろう。

脳死、臓器移植、病名告知、延命措置、積極的安楽死など、自分の“死に方”を考える機会も必要なのではないだろうか。このような生命倫理の問題に関して、聖書は直接的には多くを語らないし、礼拝の説教（メッセージ）において牧師や説教者が話題にすることも少ないであろう。しかし、これらの問題は生と死に直接関わるものであり、聖書的な生命倫理の理解や、神学的見解が議論される必要があるのではないだろうか。例えば、熊澤(2005)は、体外受精などの生の操作と安楽死などの死の操作に触れ、「委ねられている人生の終局の方式を選択する自由と責任は人間に与えられているが、死そのものは生と共に神に委ねられるべきである。生と死をデザインするのは神だけである。人間に委ねられているのはその神のデザインの中でのごく一部に過ぎない」と結論付けている。また同書の後

半には、「福祉の神学」として、「障害者」を神学的にどう理解し、どう捉えて行くべきなのかをまとめた「障害者神学」や、教会が人間福祉にどう取り組むことができるのかを推考した「ディアコニア学としての人間福祉学」などが載せられている。このような人間の生と死に関わる問題に対する神学的見解がもっと盛んに議論されることを願う。と同時に、キリスト者一人一人が自分の問題として「実際に自分が、あるいは家族がそのような状況になったときにどうするのか」を考えておくことは重要である。そのことを通して、自らの有限性を認め、与えられている命をどう生きるかを考えることができるからである。教会が、そのようなテーマで行われる講演会やセミナー、シンポジウムやディスカッションなどを提供することは可能であろう。

第3節 本研究の意義と課題

1. 本研究の意義

本研究は、キリスト者の“人間の死と生をどのように捉えるかという、生と死にまつわる価値や目的に関する考え方”である死生観と、キリスト者として成熟して生きるということに、なんらかの関係があるかを心理学的に明らかにしようと試みた、キリスト者の死生学研究である。

死生学の意義について、日野原 (2011) は、『私の死生観—死の刻印のもとに生きることの意義—』の中で、「私たち人間は、生まれたときにすでに死の刻印を押された存在であるからこそ、生きる意味を問い続けなければならないのです。だからこそ死生学の存在する意味もあるのです。死を考えるためには生を考えなければなりませんし、生を考えるためには死を考えなくてはなりません。」(p.10)と述べている。宗教は人間の“生と死”に深く関わるものであり、特定宗教に特化した死生学研究は人間の生き方を探る上で重要なものであると思われる。しかし、日本で行われている特定宗教を取り上げた研究は多くはなく、その中でも日本のキリスト者を対象とした先行研究は少なく、また、日本のキリスト者を対象に尺度構成した研究もあまり行われてこなかった(杉山・松島, 2011)。

本研究の意義の一つ目は、I/E-R scales (内発的宗教性・外発的宗教性の心理尺度)を邦訳、尺度構成し、日本人キリスト者対象の内発的・外発的宗教尺度を作成したことであると考えられる。欧米諸国においては、宗教の内発性、外発性という側面からの研究が盛んであるのに対し、日本ではそのような研究はあまり行われてこなかった。したがって、これを日本人キリスト者対象に作成したことは、日本のキリスト教の心理学的研究を進める上で

も意味のあることであると考える。

二つ目は、死観尺度、および生き方尺度に因子分析をかけて、キリスト者対象に尺度構成しなおしたことである。このことにより、キリスト者の死生観を、心理学的側面から量的に研究するツールが得られた。

特に、キリスト者の死観尺度は金児が翻訳、尺度構成した日本人向けの死観尺度とは異なる下位尺度構成となり、キリスト者とそうではない人々の相違点を見ると、キリスト者の死生観の特徴が浮かび上がってくる。金児 (1994) の死観尺度では、“浄福な来世” “挫折と別離” “苦しみと孤独” “人生の試練” “未知” “虚無” の 6 つの因子を抽出したのに対し、今回キリスト者に対して行った死観尺度で抽出されたのは、“他者との別離、挫折” “希望的受容” “未知と終焉” の 3 下位尺度であった。キリスト者の下位尺度からは、虚無や人生の試練、苦しみといった尺度は抽出されなかったのである。このように、同じ日本人であってもキリスト者にとっての死はそうではない人にとっての死とは異なる意味を持つことが示唆される。宗教、宗教はその効果や影響を客観的に推し量ることが難しいものではあるが、今後それが広がることを期待する。

最後に、本研究はキリスト者の成熟度という観点から死生観を捉えたことに意義があると考えられる。宗教心理学的研究の中では、発達心理学の観点から年代別に研究が行われていたり、社会心理学的観点から特定集団における研究が行われていたりする。しかし、特定宗教の中での成熟度という観点からの心理学的研究はあまり行われてこなかった。本研究では、キリスト者の成熟を心理尺度化し、数量的に測定することを試みた。すなわち、成熟したキリスト者とは、神、他者、自分に対して調和した関係を築いている者であると考え、その尺度として、内発的・外発的宗教尺度の“内発性”を神との調和した関係の尺度、生き方尺度の“自他共存”を他者との調和した関係の尺度、生き方尺度“こだわりのなさ”を自己との調和した関係の尺度とした。このように心理学的側面から捉えた成熟度は、霊的成熟度と一致するとはいえないであろうが、ある程度相関はあるのではないかとと思われる。

2. 今後の課題

日本人キリスト者の心理学的研究は数が少なく、これから発展が望まれる分野である。その中で、今回作成した日本人キリスト者対象の内発的・外発的宗教尺度をさらに発展、検証していくことが課題であると考えられる。例えば、複数の年代の日本人キリスト者に対し

て、あるいは他の宗教グループを対象として実施し、さらに尺度としての精度を上げることができるであろう。Kaneko (1990) は、日本はキリスト教が根付いている欧米と異なり、宗教性を内発的、外発的というように二分できないと述べている。しかし、宗教の特色や文化を超えて、人間が持っている宗教性の尺度として用いられるものを作ることができたら、宗教心理学の研究に大いに役立つであろう。

キリスト者の死観尺度、および生き方尺度に関しては、キリスト者と他宗教を持つ人々、無宗教の人々との比較検討がさらに行われていくことも課題の一つである。そのような研究により、キリスト教の特色やキリスト者の死生観がさらに浮き彫りになってくるであろう。

また、キリスト者の成熟度の尺度を完成させることが望まれる。本研究で用いた心理尺度は既存の尺度の中から、キリスト者の成熟度の指標となりそうな下位尺度を利用した。よって、これらを用いてキリスト者の成熟度を測定するには限界がある。より妥当性、信頼性の高い心理尺度を作成するためには、本研究の結果を元にした質問紙調査などを行い、心理尺度を開発していくことが必要になるであろう。

<付録 A: 死に対する意識調査>

◆あなたの死の捉え方について それぞれについてあなたはどのように思いますか？

	そう 思わない	あまり そう 思わない	どちら とも いえない	まあ そう 思う	そう 思う	が ない	その よう な 状 況 に な っ た こ と
1. 以下のような時、あなたは「自分もいつかは死ぬのだ」と思いますか？							
1) テレビや新聞で、悲惨な事件や事故のニュースを見聞きしたとき	1	2	3	4	5	N	
2) 知人、友人の葬式に参列したとき	1	2	3	4	5	N	
3) 家族が病気や事故などで入院したとき	1	2	3	4	5	N	
4) 自分が病気や事故などで入院したとき	1	2	3	4	5	N	
5) 家族を看取ったとき	1	2	3	4	5	N	
6) 誰かと「死」について話しているとき	1	2	3	4	5	N	
7) 法事や記念会に参列したり、墓参りをしたとき	1	2	3	4	5	N	
8) 日常生活の中で、ふとしたとき							
2. あなた自身が病気になった場合	1	2	3	4	5		
1) どんな病名であっても告知してほしい。	1	2	3	4	5		
2) どんなに短くても余命宣告をしてほしい。	1	2	3	4	5		
3) 積極的な治療法がなくても、できるだけ延命措置をしてほしい。	1	2	3	4	5		
4) 脳死になった場合には、自分は死んでいると思う。	1	2	3	4	5		
5) 脳死になったら、臓器移植のドナーになってもよい。	1	2	3	4	5		
3. あなたの家族(配偶者、子ども、両親)が病気になった場合	1	2	3	4	5		
1) どんな病名であっても本人に告知したい。	1	2	3	4	5		
2) どんなに短くても本人に余命宣告をしたい。	1	2	3	4	5		
3) 積極的な治療法がなくても、できるだけ延命措置をしてほしい。	1	2	3	4	5		
4) 耐え難い苦痛がある場合には、積極的安楽死を希望する。	1	2	3	4	5		
5) 脳死になったら、その人が臓器移植のドナーになってもよい。	1	2	3	4	5		

- | | | | | | |
|--------------------------------------|---|---|---|---|---|
| 4. 脳死について | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 1) 自分が脳死になった場合、それは自分の死であると思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2) 自分が脳死になった場合、臓器移植のドナーになってもよい。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3) 家族が脳死になった場合には、その人は死んでいると思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4) 家族が脳死になった場合、臓器移植のドナーになってもよい。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| | | | | | |
| 5. あなたの教会、礼拝メッセージについて | | | | | |
| 1) メッセージの中で、死についてよく語られると思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2) メッセージの中で、天国、復活についてよく語られていると思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3) メッセージは死後のことよりも今どう生きるかに焦点が当てられている。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4) クリスチャンの会話で、死がよく話題になると思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5) クリスチャンの会話で、天国、復活がよく話題になると思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6) 教会での葬儀は、希望があると思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| | | | | | |
| 6. あなた自身について | | | | | |
| 1) 自分は死ぬ準備ができていると思いますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2) クリスチャンになって、死に対する考え方が変わったと思いますか？ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

<付録 B 内発的・外発的宗教性尺度の日本語版>

以下の文についてあなたがどう思うかを教えてください (1. そう思わない 2. あまり
そう思わない 3. どちらともいえない 4. まあそう思う 5. そう思う)。「宗教・信仰」
はあなたのもつ、個人的な信仰のことです (例：仏教、キリスト教、ユダヤ教、イスラム
教など)「礼拝場所」とは教会やモスク、神社、シナゴグなどです。

<内発性(I)>

- I27. 私の人生はすべて、私の信じる宗教に基づいている。
- I10. 私は神の存在を強く感じるがよくある。
- I22. 信仰は人生の意味についての答えをたくさん与えてくれるので重要である。
- I35*. 私が持っている信仰も、私の人生の目的を与えてはくれない。
- I18. 宗教がなければ、自分の生きる目的を探すのに苦労するだろう。
- I2. 自分ひとりで黙想と祈りの時間を過ごすことは、私にとって大切である。
- I25. 信仰の一番の目的は、自分の人生の意味を強く感じられるようになることである。
- I14. 私はずっと自分の信仰に基づいて生きようと努力してきた。
- I6*. 私が良い人である限り、私が何を信じているかはさほど重要ではない。
- I41*. 私には自分の信じる宗教があるが、それよりも大切なものが人生にはたくさんある。

<個人的外発性(Ep)>

- EP24. 宗教が私に一番多く与えてくれるのは、悲しみや不幸に襲われた時の慰めである。
- Ep19. 宗教が私にもたらしてくれる最大のものは、悩みや悲しみのときの慰めである。
- Ep7. 私が神仏の愛を一番思い出すのは、私が困った状況にあるときである。
- Ep23. 私は主に、自分が脅かされていると感じるときに、信仰に頼る。
- Ep15. 私が祈る一番の理由は、困ったときに守ってほしいからである。
- Ep28. 私が祈る一番の理由は、加護を祈り求めるためである。
- Ep8. 宗教の一番の利点は、この危険な世の中で私に安心感を与えてくれることである。
- Ep3. 祈るのに一番いい時は、あなたが本当に必要を覚えた時である。

<倫理的な外発性(Em)>

- Em42. 正しい行いを教えてくれることが、私の宗教の一番重要な側面である。
- Em37. 私は宗教に、自分の道徳的判断基準しか求めていない。
- Em16. 宗教は、主によい規律の基礎として必要である。
- Em40. 私の宗教の一番の強みは、道徳的な基準があることである。

Em33. 宗教は人が道徳的に生きる手助けとなるという理由のみにおいて、社会は宗教を奨励すべきである。

<社会的外発性(Es)>

Es5. 私が「礼拝場所」に行く一番の理由は、新しい友達を作れるからだ。

Es21. 私が「礼拝場所」に行く一番の理由は、新しい人と出会うためである。

Es13. 私が「礼拝場所」に行く一番の理由は、同世代の人と出会うためである。

Es30. 私が「礼拝場所」に行く一番の理由は、将来の伴侶(夫・妻)と出会うためである。

*は逆転項目。番号は Gorsuch & McPherson の I/E-Revised Scale の原版による。

<付録C キリスト者の死観尺度>

“他者との別離、挫折”

1. 死んでしまえば一人ぼっちである。
2. 死ぬことは愛する人たちを見捨てることになる。
3. 死とは最後の不幸な出来事である。
4. 今死ねば残された家族を世の中の試練にさらさねばならない。

“希望的受容”

5. 人は死んでも極楽（天国）へ行き、幸せに暮らすことができる。
6. 死ぬと人は最も満ち足りたところへ行くことができる。
7. 死んで初めてその人の人生価値がわかる。
8. 死ぬと仏（神）との結合であり、永遠の幸福である。
9. 死ぬときになって人は完成するものだ。
10. 死とはその人を試す人生最後のテストである。

“未知と終焉”

11. 死んでしまえば、もう人生の意義を追求できなくなる。
12. 死んでしまえば、自分の力を十分に生かすことができなくなる。
13. 死については誰もが「わからない」という。
14. 死とは何にもまして予測しがたいことである。
15. 死とは未知の事柄である。
16. 死んでしまえばもう希望を実現することができない。

<付録D キリスト者の生き方尺度>

“自他共存”

1. 自分のやるべきことは責任を持ってやり遂げる
2. 他人には誠実な心をもって接する。
3. 他人をないがしろにしない。
4. 何事も自分のことは自分でやる
5. かけがえのない命を精一杯生きる。
6. 今というときを大切にする
7. 何事も人間一人の力でできるものではないからお互いの協力を大事にする。
8. 他者との関わりを大事にする。

“自己の向上”

9. 自分の持っている潜在的可能性を追求し続ける。
10. 自らを創造開発していく。
11. 努力を惜しまずに、自分のできることに向かって完全燃焼する。
12. 何事にも興味と好奇心をもって接する。
13. できるだけ多くの物事を見聞きしようとする。

“こだわりのなさ”

14. 自分自身にこだわりを持たない
15. 何かに失敗しても混乱したり、絶望したりしない。
16. 事実をわだかまりなくさっぱり受け入れる。
17. 自分自身の行為に自信を持っている。

引用文献

- Allport, G. W. (1950). *The individual and his religion*. New York: The Macmillan. 原谷達夫 (訳)
(1953). 個人と宗教. 岩波書店.
- Allport, G. W., & Ross, J. M. (1967). Personal religious orientation and prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **5**, 432-443.
- Bayly, J. (1969). *The view from a hearse: A Christian view of death*. Elgin, Illinois: David C. Cook.
- Bowker, J. (1991). *The meanings of death*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Cicirelli, V. G. (2002). Fear of death in older adults: Predictions from terror management theory. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, **57B**, 358-366.
- Clements, R. (1998). Intrinsic religious motivation and attitudes toward death among the elderly. *Current Psychology*, **17**, 237-248.
- Collett, L., & Lester, D. (1969). The fear of death and the fear of dying. *Journal of Gerontology*, **72**, 179-181.
- Collins, G. R. (1993). *The biblical basis of Christian counseling for people helpers*. Colorado Springs: Navipress.
- Conte, H. R., Weiner, M. B., & Plutchik, R. (1982). Measuring death anxiety: Conceptual, psychometric, and factor-analytic aspects. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**(4), 775-785.
- デーケンアルフォンス (1996). 死とどう向き合うか. 日本放送出版協会.
- Donahue, M. J. (1985b). Intrinsic and extrinsic religiousness: Review and meta-analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 400-419.
- Douglas, J. D. (1982). *New Bible dictionary*. (2nd Ed.) Wheaton, Illinois: Tyndale.
- 海老根理絵 (2008). 死生観に関する研究の概観と展望. 東京大学大学院教育研究科紀要, **48**, 193-202.
- 海老根理絵 (2011). 青年期後期の死のとらえ方における認知的側面と感情・態度的側面の関係性—死別体験を絡めて—. 臨床死生学, **16**(1), 46-54.
- Elwell, W. A. (Ed.) (1988). *Encyclopedia of the Bible*. Grand Rapids, Michigan: Baker.
- Erickson, M. J. (1985). *Christian Theology*. Grand Rapids, Michigan: Baker.
- Feifel, H., & Nagy, V. G. (1981). Another look at fear of death. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **49**, 278-286.
- Florian, V., & Kravetz, S. (1983). Fear of personal death: Attribution, structure, and relation to religious

- belief. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 600-607.
- Fortner, B. V., & Neimeyer, R. A. (1999). Death anxiety in older adults: A quantitative review. *Death Studies*, **23**, 378-411.
- 藤本欣也・本多妙 (2003). Death Competencyの構造と尺度作成. 臨床死生学年報 臨床死生学研究分野, **8**, 12-29.
- Gesser, G., Wong, P. T. P., & Reker, G. T. (1988). Death attitudes across the life-span: The development and validation of the Death Attitude Profile (DAP). *Omega: Journal of Death and Dying*, **18**, 113-128.
- Gorsuch, R. L., & Venable, G. D. (1983). Development of an "age universal" I-E scale. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **22**, 181-187.
- Gorsuch, R. L., & McPherson, S. E. (1989). Intrinsic/extrinsic measurement: I/E-revised and single-item scales. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **28**(3), 348-354.
- Gorsuch, R. L., Mylvaganam, G., Gorsuch, K., & Johnson, R. (1997). Perceived religious motivation. *International Journal for the Psychology of Religion*, **7**(4), 253-261.
- 日野原重明 (2011). 私の死生観 - 死の刻印のもとに生きることの意義. 臨床死生学, **16**(1), 5-10.
- 平井啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫 (2000). 死生観に関する研究 死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証. 死の臨床, **23**(1), 71-76.
- 平山正実 (1991). 死生学とはなにか. 日本評論社.
- Hoelter, J. W. (1979a). Multidimensional treatment of fear of death. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 996-999.
- Hoelter, J. W. (1979b). Religiosity, fear of death and suicide acceptability. *Suicide and Life-threatening Behavior*, **9**, 163-172.
- Hoge, D. R. (1972). A validated intrinsic religious motivation scale. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **11**, 396-378.
- Holcomb, L. E., Neimeyer, R. A., & Moore, M. K. (1993). Personal meanings of death: A Content analysis of free-response narratives. *Death Studies*, **17**, 299-318.
- 堀野緑 (1987). 達成動機の構成因子の分析—達成動機の概念の再検討. 教育心理学研究, **35**, 148-154.
- 今井孝太郎 (1991). 死別体験の意義—「死」の心理と教育(IV)—. 龍谷大学論集, **437**, 2-20.
- 石坂昌子 (2003). 死の意味づけの質的検討と量的検討—死に対する心理の理解(1)—. 日本心理

- 学会第67回大会, 300.
- 板津裕己 (1992). 生き方の研究—尺度構成と自己態度との関わりについて. *カウンセリング研究*, **25**, 85-93.
- Jeffers, F. C., Nichols, C. R., & Eisdorfer, C. (1961). Attitudes of older persons toward death. *Journal of Gerontology*, **16**, 53-56.
- Jones, S. L., & Butman, R. E. (1991). *Modern Psychotherapies: A comprehensive Christian appraisal*. Downers Grove, Illinois: InterVarsity.
- 影山隆之 (2003). 最近20年間の日本における青少年の死生観・自殺観に関する研究. *こころの健康: 日本精神衛生学会誌*, **18**(2), 70-76.
- 金児暁嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観. *人文研究 大阪市立大学*, **46**(10), 537-564.
- 金児暁嗣 (1997). *日本人の宗教性—オカゲとタタリの社会心理学—*. 新曜社.
- Kaneko Satoru (1990). Dimensions of religiosity among believers in Japanese folk religion. *Journal for the Scientific of Religion*, **29**(1), 1-18.
- 柏木哲夫 (1999). 死とストレス. *現代のエスプリ別冊 現代的ストレスの課題と対応*. 至文堂, pp. 227-237.
- Kastenbaum, R. J., & Costa, P. T. (1977). Psychological perspectives on death. *Annual Review of Psychology*, **28**, 225-249.
- Kastenbaum, R. J. (2000). *The Psychology of death. (3rd Ed)* New York: Springer.
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治 (1996). 老年期における死に対する態度. *老年社会科学*, **17**, 107-116.
- 川喜田二郎 (1967). *発想法—創造性開発のために*. 中公新書, 中央公論社.
- 小泉晋一 (2000). 大学生の信仰する宗教と死生観との関連. *日本性格心理学会大会発表論文集 日本パーソナリティ心理学会*, **9**, 64-65.
- 河野由美 (2011). 宗教と死. 金児 暁嗣 (監修). *宗教心理学概論*. ナカニシヤ出版, pp. 167-184 (第8章).
- 隈部知更 (2003). DAP-R 日本語版の内容的妥当性 -死への態度と信仰の関係. *心理臨床学研究 日本心理臨床学会*, **20**(6), 601-607.
- 隈元みちる (2003). 死別による生の意味の変化に関する一考察 —「異界」との関わりのなかから—. *心理臨床学研究*, **21**(1), 25-33.
- 熊澤義宣 (2005). *キリスト教死生学論集*. 教文館.

- Lewis, C. S. (1976). *A grief observed*. New York: Bantam Books.
- Liston, O. M. (Ed.) (1969). *Perspectives on death*. Nashville, Tennessee: Abingdon.
- 松下姫歌・尾方綾 (2007). 青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージ —DASとSD法を用いて—. 広島大学心理学研究, **7**, 325-337.
- 松島英介 (2009). 現代精神科臨床と死生観. 臨床精神医学, **38**(7), 905-913.
- McGrath, A. (1997). *Christian theology -An introduction. (2nd Ed.)* Blackwell: Oxford.
- Milne, B. (1982). *Know the truth*. Downers Grove, Illinois: InterVarsity.
- 宮本一史 (1983). 現代の子どもは死をどう考えているか —3 死に対する感じ方・考え方—. 稲村博・小川捷之 (編). 死の意識. 共立出版, pp. 65-84.
- 中木里美 (2011). 高齢者の死への態度に影響を与える要因. 臨床死生学, **16**(1), 67-78.
- 中村雅彦・井上実穂 (2001). 死生観が心理的幸福感に及ぼす影響. 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学, **47**(2), 59-99.
- 仲村照子 (1994). 子どもの死の概念. 発達心理学研究, **5**(1), 61-71.
- Neimeyer, R. A., Fontana, D. J., & Gold, K. (1983). A manual for content analysis of death constructs. *Death Education*, **7**, 299-320.
- Nelson, L. D., & Nelson, C. C. (1975). A factor analytic inquiry into the multidimensionality of death anxiety. *Omega: Journal of Death and Dying*, **6**(2), 171-178.
- Neuringer, C. (1979). The semantic perception of life, death and suicide. *Journal of Clinical Psychology*, **35**(2), 255-258.
- 新見明子 (2002). 看護学生の死生観 —Purpose in Life Test分析より—. 川崎医療短期大学紀要, **22**, 25-30.
- Noppe, I. C., & Noppe, L. D. (1997). Evolving meanings of death during early, middle, and later adolescence. *Death Studies*, **21**, 253-275.
- 大石和男・安川通雄・濁川孝志・飯田史彦 (2007). 大学生における生きがい感と死生観の関係 PILテストと死生観の関連性. 健康心理学研究, **20**(2), 1-9.
- 岡村直樹 (2010). クリスマスニュースの死生観形成に関する質的研究:自殺予防教育の観点から. キリストと世界: 東京基督教大学紀要, **20**, 40-65.
- 岡村達也 (1984). 「死に対する態度」の研究: 青年と成人との比較. 東京大学教育学部紀要, **23**, 331-343.
- 大柴譲治・賀来周一 (2011). 聖書におけるスピリチュアリティ—スピリチュアルケア—キリス

- ト教カウンセリングブックレット6. キリスト出版社.
- 大山由紀子・沖野良枝 (2003). 看護職と看護学生の死生観の傾向に関する比較研究. 日本看護学会論文集, **34**, 75-77.
- Ray, J. J., & Najman, J. (1974). Death anxiety and death acceptance: A preliminary approach. *Omega: Journal of Death and Dying*, **5**, 311-315.
- Reimer, W., & Templer, D. I. (1995-96). Death anxiety, death depression, death distress, and death discomfort differential: Adolescent-parental correlations in Filipino and American populations. *Omega: Journal of Death and Dying*, **32**, 319-330.
- Richardson, A. (Ed.) (1960). *A theological word book of the Bible*. New York: Macmillan.
- Roff, L. L., Butkeviciene, R., & Klemmack, D. L. (2002). Death anxiety and religiosity among Lithuanian health and social service professionals. *Death Studies*, **26**(9), 731-742.
- Rose, B. M., & O'Sullivan, M. J. (2002). Afterlife beliefs and death anxiety: An exploration of the relationship between afterlife expectations and fear of death in an undergraduate population. *Omega: Journal of Death and Dying*, **45**, 229-243.
- 齋藤英子・林かおり・藤野文代 (2002). 大学生の死のイメージに関する研究 ～TEG・Self-Esteem・身近な人の死の経験による分析～. 群馬保健学紀要, **23**, 49-53.
- 斉藤友紀雄 (2011). 老いとそのケア キリスト教カウンセリングブックレット5. キリスト出版社.
- 酒井恵子・山口陽弘・久野雅樹 (1998). 価値志向性尺度における一次元的階層性の検討—項目反応理論の適用. 教育心理学研究, **46**, 153-162.
- Shneidman, E. S. (1973). *Deaths of man*. New York: Quadrangle. 白井徳満・白井幸子・本間修 (訳) (1980). 死にゆく時—そして残されるもの. 誠信書房.
- Spilka, B., Minton, B., Sizemore, D., & Stout, L. (1977). Death and personal faith: A psychometric investigation. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **16**(2), 169-178.
- 杉山あけみ (1997). 死の不安測定 -DAQの日本語版試作と検討. 中京大学文学部紀要 中京大学文学, **32**, 129-138.
- 杉山幸子・松島公望 (2011). 宗教心理学の歴史. 金児 暁嗣 (監修). 宗教心理学概論. ナカニシヤ出版, pp. 27 -57 (第2章) .
- Suhail, K., & Akram, S. (2002). Correlates of death anxiety in Pakistan. *Death Studies*, **26**, 39-50.
- Swenson, W. M. (1961). Attitude toward death in an aged population. *Journal of Gerontology*, **16**, 49-52.

- 竹下美恵子・魚住郁子・渡辺弥生 (2001). 看護学生の死生観に関する研究 (第3報) 領域別臨地実習前後の比較. 日本看護学会論文集, **32**, 76-78.
- Tanaka, E., Sakamoto, S., Ono, Y., Fujihara, S., & Kitamura, T. (1998). Hopelessness in a community population: Factorial structure and psychosocial Correlates. *The Journal of Social Psychology*, **138**(5), 581-590.
- 丹下智香子 (1995). 死生観の展開. 名古屋大学教育學部紀要 教育心理学科, **42**, 149-156.
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討. 心理学研究, **70**(4), 427-332.
- 丹下智香子・坪井さとみ・福川康之・新野直明・安藤富士子・下方浩史 (2000). 成人中・後期における死に対する態度 (3) —エリクソン心理社会段階目録検査 (EPSI) との関連—. 日本心理学会第64回大会発表論文集, 1015.
- 丹下智香子 (2002). 「死」からの連想語のKJ法による分類: 死生観の構造の検討. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **49**, 157-168.
- 丹下智香子 (2004a). 青年前期・中期における死に対する態度の変化. 発達心理学研究 日本発達心理学会, **15**(1), 65-76.
- 丹下智香子 (2004b). 宗教性と死に対する態度. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **51**, 35-49.
- Templer, D. I. (1970). The construction and validation of death anxiety scale. *Journal of Psychology*, **82**, 165-177.
- Thielicke, H. (1970). *Death and life*. Philadelphia: Fortress.
- Thielicke, H. (1983). *Living with death*. Grand Rapids, Michigan: Eerdmans.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (1990). Meanings of death and intrinsic religiosity. *Journal of Clinical Psychology*, **46**, 279-391.
- Wenestam, C. G., & Wass, H. (1987). Swedish and U.S. children's thinking about death: A qualitative study and cross-cultural comparison. *Death Studies*, **11**, 99-121.
- Wong, P. T. P., Reker, G. T., & Gesser, G. (1994). Death attitude profile-revised: A multidimensional measure of attitudes toward death. In R.A. Neimeyer (Ed.) *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application*. Taylor & Francis, pp. 121-130.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, **30**, 64-68.

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科
(博士後期課程)

学籍番号 110DC005

村上純子